



AGA ZINE

Volume.108

DIGITAL EDITION

10

18  
未 満

試し読み版

紙版  
最終号

変身ヒロイン

風俗墮ち

今号の  
Special Feature Series  
特集

カラー  
ピンナップ  
FOOTAGE MIRROR

或十せねか  
sage・ジョー  
どうーゆーうおんどー  
竜胆 高浜太郎

(表紙&ピンナップ テレカタブストリー)  
応募者全員サービス

【えっちマンガ】

- ぼふえ
- 白う〜風い
- Rusty Souix 或十せねか
- 翡翠石
- 助三郎
- しーあゐる
- 雨宮ミズキ
- 嘉納あいら

【えっち小説】

- 上田ながの×弥弥
- 089タロー×竜胆
- 羽沢向一×緑木邑
- 高岡智空×草上明
- 黒井弘騎×緋山狐
- 斐芝嘉和×風丘
- 新居佑×えれ2エアロ
- さき傘×あぶりだしさくろ
- 蒼井村正×どうーゆーうおんどー
- でいふいと×高浜太郎

★特別付録★

令和の新紙幣!?



禁断のエロ感謝祭スタート♥  
澄んだ喘ぎ声が公衆便所に木霊する!

浄歌天使

セイクリッド  
アプローズ

ファン感謝祭 in 公衆便所

小説 / おおいむらまき  
蒼井村正

挿絵 / どうーゆーうおんとー  
ILLUSTRATION

コンサート第一曲目のイントロが、夜のスタジオム内に響き渡ると、満員の観客たちは一気に歓声を上げ、示し合わせたかのように、頭上を見上げた。煌々たるライトの光条が交差した夜空の一角にはるか上空から、フワリと、一人の少女が舞い降りてくると、歓声は更に大きくなる。

「フッフ、今日も盛り上がりつつあるわね」  
上空に滞空したままの少女は、勝ち気な笑みを浮かべ、観客たちを見下ろす。

程良く肉付きのいい、ムッチリとした肢体を包んでいるのは、ピッチリと密着したスーツだ。

露出度は決して高くはないものの、豊かなバストや、肉感的な太腿、ブリッと張り詰めたヒップラインまでクッキリと浮き出させた、ある意味フェティッシュでセクシーな見た目だ。

ロングヘアの金髪が夜風に揺らぐ頭部には、薄い薄紅色の燐光を放つ、半透明の角状パーツが付いた、ヘッドギア型の髪飾りが装着され、同様の半透明パーツは、足首やふくらはぎ、手首や肘、肩口の辺りに装着された、メカニカルなアクセサリーでも光を放っている。

腰で翻るリボンや、豊かな胸元を飾るネクタイも、光を放ち、少女のいでたちを神秘的に彩っていた。

「今夜もいっぱいきてるわね！ わたしの生歌を聴けること、光栄に思えないさい！」

ワイヤーの類を一切使わず、自らの力で宙に浮いた少女は、良く通る声で呼びかける。

文字通り上から目線で発せられた、高飛車で挑発的な一言にも、満員の群衆は大歓声で応えた。

そう、観客たちは知っているのだ、この勝ち気で高飛車な美少女アイドルが、聖なる歌の力を武器に闘う変身ヒロイン、浄歌天使セイクリッドアブローズであり、洗脳術で人々を支配しようとしていた悪の組織、「洗脳結社ヒュブノス」を壊滅させて、こ

の国を救った救世主だということを……。

「♪♪♪」  
淡い赤の軌跡を夜空に描いて飛翔しながら、浄歌天使は歌い始めた。

声量が豊かで、力強さの中に愛らしさや優しさも感じられる、まさに天使の歌声は、マイクやアンブで増幅されていないにもかかわらず、観客たちの耳にしつかりと届き、魂を震わせる。

これが、浄歌天使の能力なのだ。

ステージの上に軽やかに着地した少女は、すっかり魅了されている観客たちを見据える。

「コンサートが終わるまで、居眠りも、よそ見も禁止よ！ わたしだけを見てなさい！」  
相変わらずの高飛車な煽りに、歓喜の表情で応える群衆の歓声を、心地良さに受け止めたセイクリッドアブローズは二曲目を歌い始めた。

「ふう〜！ 今日也大盛況だったわね。みんな、お疲れ様！」  
コンサートを終え、スタッフにねぎらいの声を掛けたつづつ楽屋に戻るセイクリッドアブローズ。

「やあ、久しぶりだね」  
楽屋口で、聞き覚えのある声が掛けられた。

「……!?」  
振り向いた少女は、壁にもたれかかるようにして立っている三十代の小太り男を見て、眉を顰める。

知らぬ顔ではない。この男、三十代にして世界屈指の資産家となった、若き大富豪だ。

常に人を見下したような笑みを浮かべ、傲岸不遜な態度と物言い、敵も多いのだが、財力とビジネスの手腕だけは突出している。

「久しぶり。何しに来たのかしら？」  
少女は、明らかに冷淡な口調で問いかける。

「忘れてはいないだろうね？ ヒュブノス首領との

決戦の時、ボクの持っているネット放送を使って、キミへの協力を呼びかけたことを？」  
「ええ、おぼえてるわよ！ あの時の協力には、ホントに感謝しているわ……」  
恩着せがましい男の口調を、内心、苦々しく思いつつ、少女は素直に頷く。

圧倒的な洗脳術の使い手であったヒュブノス首領との最終決戦で、劣勢に追い込まれていた浄歌天使に力を与え、逆転勝利へと導いたのは確かに、ネット回線を通じて、想いの力を届けてくれた、無数の人々の存在があったからこそだ。

「あの時、ボクは、『貸しにしておく』って言ったよね？ その借りを、返してもらおうと思ってね」  
「まさか……!?」  
嫌な予感に、少女の美貌が強ばる。

「そう。キミの所属するプロダクションは、ボクが買い取った。これからは、『社長』と呼ばたまえ」  
「……本当に、こんな所で、ファン感謝祭のイベントをするの？」  
車を降りたセイクリッドアブローズは、周囲を見回し、怪訝そうな表情になる。

（てつきり。アイツとのエッチの相手をさせられると思っただけど……違うのかな？）  
「……もう、ファンが待ってるぞ！」  
後部座席にふんぞり返った社長が指さした先には、半ば朽ちかけた公衆トイレがあるだけだ。

「何よ！ どういうことなの!?」  
気色む浄歌天使であったが、新社長は無言のまま額をしゃくする。

「これはバワハラよ！ ひゃんツ!!」  
ピリツ！ と背筋を駆け抜けた衝撃に、変身少女は可愛らしい悲鳴を上げてうずくまってしまう。

「キミがヤケを起こさないように、変身コスにちよ

つとだけ細工をさせてもらったよ」

「そつ、そんなことまで!」

二人のやりとりを聞きつけ、薄汚れた身なりの男どもが、公衆トイレからゾロゾロ現れた。

「今日は、そこにいるホームレスの皆さんに、癒しを与えてやって欲しい」

「癒しって……まさか!」

表情を強ばらせるセイクリッドアブローズ。

「ファンを無下にしないのが、キミのポリシーだろ?」

「そつ! そうよッ!」

いけ好かない富豪男に、反射的に応えた変身アイドルは、ホームレスたちに視線を向ける。

「まさか、あの浄歌天使様にご奉仕してもらえるなんて、夢みたいだぜ」

へたり込んだままの変身アイドルに、既に勃起した肉棒を剥き出しにした男が迫ってくる。

「こんなピンチ、洗脳結社との闘いでは、何度も乗り切ってきたんだから、平気よ!」

凶暴に怒張した赤黒いペニスから反射的に目を逸らしながら、浄歌天使は自分を叱咤する。

「オレたちで抱っこして連れてってやろう!」

どうやったら、人の身体がこんな悪臭を放つようになるのか? と、不思議に思えるほどの臭気が、浄歌天使を包み込んだ。

「一人で歩けるわよ! やつ、触らないでよッ!!」

「いいねえ、その勝ち気な声と顔が、チンポにピンくるぜえ!」

あらかう両手が掴まれ、ムツチリと肉感的な美脚が抱きかかえられて、トイレに連れ込まれてしまう。

「そうそう、これをつけて渡されてたな……」

便器に座らされたセイクリッドアブローズの首に、ネームプレートのような物が掛けられた。

「な……なんなの、これ!」

首から掛けられたプレートには、「肉便器、1回10円」とマジックで走り書きされていて、少女の恥辱を煽る。

（この人たちからも、心のパワーは集められるはずそうすれば、スーツにかけられた卑怯な仕掛けも解除して、アイツに反撃してやる!）

逆襲への打算も込めて、変身アイドルは、淫辱のファン感謝祭を決意する。

「きよ、今日は集まってくれてありがと。わたしのご奉仕を受けられること、光栄に思いません!」

いつもの澁刺で高飛車な口調とはいかぬものの、迷いや不安を吹っ切るように、一気に言い放つ。

「浄歌天使の身体、お触りしちゃうよ!」

「ひやうつ! わたしがしてあげるから、勝手に触らないで!」

洗脳された群衆に襲われぬように身につけた飛翔能力も、浄化の歌も使うことができない変身ヒロインの身体中を、無遠慮な男どもの手が這い回る。

「うおお! 柔らけえ! 久し振りに採んだのが、セイクリッドアブローズのオッパイだなんて、夢みてえだあ〜♪」

歓喜の声を上げた中年男の指が、コスチュームを丸く張り詰めさせた乳房の奥までめり込んできて、果肉の芯をまさぐるようにグニグニと卑猥に蠢く。

「やだつ、そんなに強くしたら、痛いじゃないのッ! つあああああんツ!!」

男どもに拘束された変身少女は、悲痛な叫びを公衆トイレに響かせ、肉感的な肢体をビクビクンツ!

と擦撃させてしまう。

「ひよほお! いい声〜♪ そういうエロカワイイ声をもっと聞かせてくれよ!」

浄歌天使の上げる甘い悲鳴で欲情を強めた陵辱者たちは、更に激しく、少女の全身をまさぐり回した。

太腿が撫で回され、尻が揉み立てられ、尻の谷間

や、薄いコスチューム一枚だけに守られた秘部にまで指が潜り込んできて、柔らかな媚肉をこね回す。

「はぐうう、んむううう、ンンンツ!」

全身を這う荒たい指が送り込んでくる痛みの奥に、ゾクリとするような快感の片鱗が混じっていて、無垢な変身少女を困惑させる。

（やられっぱなしじゃダメ! 反撃しないと、いいように犯されちゃう!）

勝ち気な変身アイドルは、男どもの手に全身を卑猥にまさぐられながらも、反撃を仕掛けた。

いつもはマイクや楽器を握っているたおやかな指が、赤黒い勃起にシュルリ、と絡みつく。

（……男のモノつて、こんな触り心地なんだ）

妖しい興奮が身体の芯を熱く疼かせて駆け抜け、無意識のうちに、卑猥なストロークを開始する。

しゆるっ、きゅむっ、しゅにつ……

どす黒い肉棒を握った、たおやかな指がリズムカールに滑って奉仕した。

「うひゃあ! 天使の手コキ、スベスベで、ひんやりしてて気持ちいいッ!!」

甲高く裏返った声を上げた男の勃起が、ビクビクと震えながら更に硬度を増して張り詰める。

「おいつ! こつちも頼むよ……」

反対側の手にも、熱く猛つた肉柱を握られた。

「やつ、やつてあげるわよ! だから、大人しくご奉仕、されなさいッ!」

羞恥と困惑を、高飛車な口調で振り払った変身アイドルは、便器に座ったムツチリボディを悩ましげにくねらせながら、手コキ奉仕に熱を込めてゆく。

「オレたちもお返ししなきゃな!」

秘部を覆う薄いコスチューム越しに、敏感な割れ目がグリグリと穿られ、頂点でコリツとしこり勃ったクリトリスをグリグリと集中的に撫で転がされた。

「ひゃんツ! そこ、そんなにしたらダメッ! ア

「ッやつ、やめなさいよお！」

艶めかしさを増した声を上げ、身を振るセイクリッドアプローズの股間が、制御不能の震えに包まれ、ジュワツ！と熱い潤みを溢れ出させてしまう。

「キウウウウウウ〜ンンンツ!!」

子犬の甘えるような声をトイレに響かせ、ムツチリポデイがグンツ!!と伸び上がりて痙攣する。

「天使様がマン汁噴いてイッてるぜ！」

股布越しに、愛液の噴き出す感触を探り当てた中年男が嬉しげな声を上げる。

「オマンコ、剥き出しにしちまえよ！」

「やああ! ダメだったらあ！」

恥ずかしげな声を上げる変身アイドルだが、その目には、妖しい色香の炎が燃えている。

濡れて貼り付いた股布がズリユツ、とずらされ、浄歌天使の秘部があらわになると、コンサートの盛り上がりにも匹敵するような歓声が、薄汚い公衆トイレに反響した。

「ウオオオオオオ〜! これがセイクリッドアプローズのオマンコかあ！」

「ああンツ! 誰にも見せたことないのに！」

浄歌天使の声や表情には艶めかしい媚びが含まれていて、男どもの欲情を更にヒートアップさせる。

「たまんねえ! 一発目、プチ込んでやるよ！」

「えっ!? 挿れ、るの!? ふやああンツ!!」

期待と困惑で見つめる腔口に、赤黒い龟头が突きつけられ、ズブリ、とめり込んで、変身アイドルに長く尾を引く声を上げさせた。

「奥まで……きて……くはああンツ!!」

グンツ!! とムツチリポデイを仰け反らせる浄歌天使の中で、陵辱者の怒張がストロークを開始した。

「ひやうんっ! アツ、やつ、ああンツ!!」

擦られる度に、頭の芯が真っ白になるような快感の波が襲ってきて、高飛車アイドルの美貌が蕩ける。

「手コキ止まつてるぞ、オマンコをズボズボされるのに合わせて、その綺麗なお手々でチンポ握ってシコシコするんだよ！」

ペニスを握ったまま動かなくなったアイドルの中で、ゆつくりと腰を使い、極上の腔粘膜を味わいながら、男が命じてくる。

「くううう、ンンツ!!」

初挿入のショックで理性がグチャグチャに掻き乱されている浄歌天使は、秘部に打ち込まれる卑猥なストロークを両手で忠実に再現してしまう。

「うっ、上手いッ! チンポがビリビリ痺れるぐらい気持ちいいイッツ!!」

歓喜の声を上げる男の勃起から、熱い命の波動が伝わってくる。

（悦んでる!? もっと、もっと感じて、わたしに力を……ちようだいッ!）

被虐の悦びに目覚め始めた変身アイドルは、腰をくねらせ、手コキ奉仕を速めてゆく。

「オマンコの奥に、出すぞっ！」

少女の承諾も得ず、腔奥でドクドクと危険な脈動が開始された。

「ひあ! 熱ッ! やはああンツ!!」

これまで感じたことのない熱い衝撃に子宮を襲われ、悩ましげな悲鳴を上げて仰け反るセイクリッドアプローズの手のひらにも、欲望の煮詰め汁がビュルッ、ビュルルッ!! と吐き出され、変身コスチュームにも容赦なく粘り着く。

「堪らねえ声出してイキやがらせ! そら、その綺麗なお顔にもブツカケてやるよお！」

狭い公衆トイレにピンピンと響く天使のアクメヴオイスに感極まった男どもは、一斉に射精する。

「ビュルンツ! びゆるびゆるびゆるびちやびしやあ!!」

進む白濁汁は、望まぬ絶頂に喘ぐ少女の顔を汚し抜き、メリハリの利いた変身コスボデイにコッテリ

と粘り着いた。

「んはああ……」

ザーメンまみれの美貌を悩ましげに歪めた浄歌天使の淫声が、公衆トイレに響く。

「肉便器アイドルさんよ! これからが本番だぜ！」

その後、数時間にわたって男どもは浄歌天使を犯し抜き、どんどん上達してゆく奉仕に酔いしれて白濁をぶちまけた。

極上の締め付けと震えで勃起を迎える腔内にありつただけのザーメンを注ぎ込み、天使の歌声を奏でる唇に、精液まみれの龟头をくわえさせてお掃除フェラを教え込む。

もともと、物覚えのいい少女は、指遣いや舌遣いをたちまちの内に上達させ、ペニスを次々に絶頂へと導いた。

腔内射精の回数は、アクメの余韻に震える内腿に「正」の字で書き込まれ、その数はどんどん増えてゆく。

「想像以上にいいご奉仕ができたようだね! 最後に、カメラに向かってアピールよろしく！」

ヘッドセットから、富豪男の命令が聞こえてきた。「んは……ハアハアハア……。肉便器天使の全国ツアーで、みんなのチンポ汁抜きまくってあげるから、かつ、覚悟しなさいッ!!」

握り締めたペニスをヌチャヌチャとアグレッツシブに抜き立てながら、カメラ目線で、挑発的な口調で言い放つ浄歌天使の顔に、新たなザーメンがぶちまけられ、堕ちた変身アイドルの頬を、ドロリと垂れ落ちた。

「わ、わたくしのお尻をお金で叩いてえ……」

正義の変幻装姫が蕩け顔で客に媚び、卑猥に腰を振る！

変幻装姫  
SHINE MIRAGE  
シャインミラージュ

没落変身ヒロイン令嬢の末路

小説  
NOVEL

でいふいと

挿絵  
ILLUSTRATION

たかはまたろう  
高浜太郎

「いいぞお!! もつと痴女みてえに腰を振れえッ!!」

「プルンプルンデカ乳揺らして俺を楽しませてみろッ!!」

地下に存在する、どこにでもあるような大きなホール内に響く男達の低い声。

空調から送られる冷気を凌駕する歪すぎる熱気は、あるモノが原因だ。

ホールの奥にあるステージに一人立つ人物こそが、男達の視線を釘づけにし、欲望に満ちた声の数々を一身に受ける存在。

「ど、どうぞ、わたくしの……変幻装姫シャインミラージュのエロダンスをご覧になってください……み、皆様の為に、デカ乳揺らしながら腰を振りますわあ……!!」

熱を帯びた言葉の中で名乗りを上げたとおりの、ステージの上で雄達の視線を独占するのは、平和を守る為にダーククライムと戦い続けているはずの正義のヒロイン。変幻装姫シャインミラージュ。

ステージの一番手前。一步踏み出そうとすれば落ちるギリギリの位置で、両手を後頭部に置いた状態で股のまま腰を落とし、股間を見せつける姿でへこへこ腰を振る様は、とても気高く戦っていた本人とは思えない。

変幻装姫の象徴である青と白のレオタードやグローブとブーツは所々が破かれ、瑞々しい白い肌がさらに多く露出している。特に右の乳房に至っては、少しでも布地がずれれば乳首が露出するほど。

しかし、それでも構わないとぶるんぶるんとGカップの爆乳を悩ましく弾ませ、コスチュームに守られながらも目立つ恥丘を男達の目に焼きつけさせようと淫らな腰振りダンスに興じる正義のヒロイン。

「ハハハハッ!! 相変わらずエロいダンスをするもんだ!!」

「正義のヒロインのシャインミラージュが、こんなことして金を稼いでるなんざ誰も思わねえよなあ!!」

「あああ……い、言わないで、ください……これには事情があ……」

男達の下卑た言葉の中に含まれる「金」という単語。

それこそが、正義のヒロインたるシャインミラージュがこの場で淫らなショーを演じているたった一つの理由に他ならない。

自ら望んでしているわけではないからこそ、変幻ヒロインの表情が僅かに曇った。

「うるせえッ!! 事情も何もねえだろうが!! お前が金欲しさにここでショーをしてんのは変わらねえんだよ!! オラッ!! こいつが欲しかったらもつと媚を売れ媚を!! このエロヒロインが!!」

そう、この場に集う男達にとってシャインミラージュの事情などどうでもいい。

魅惑のボディを持つ、悪と戦う正義のヒロインという特別すぎる存在が見せる卑猥なショー。それを見る為だけに来ているのだから。

「ああっ……お、お願いします……せ、正義のヒロインなどと言いながら、お金欲しさに身体を売る……この変態ヒロインのシャインミラージュに……そのお札を恵んでくださいませ……」

男が指で挟むのは一枚の札。それは変幻ヒロインが心から欲するモノに他ならない。蕩けきった、雄を誘惑する雌の声を出しながら腰を揺らし、変態ヒロインらしく男の持つ金を求めるシャインミラージュ。

「しょうがねえなあ。自分の顔の特製の札まで作りやがって。自己主張の激しいのはその身体だけにしとけよ。ほれ、そのデカ乳を馬鹿みてえにぶるんぶるん揺らしながら俺の前までもってこい」

そう、この場で使用されるのは通常の紙幣ではない。

入る際に、この店でのみ通用する特製のモノへと換金する必要がある。

形、内容。誰もが知っているモノとほぼ同じではあるが、描かれている人物が違うのだ。

本来描かれている偉人ではなく、この場の主役である変幻装姫シャインミラージュとなっている。

それも、基本的には一枚で十万の価値を持つ為、客は選ばれた者達のみ。

「か、かしこまりましたあ……これで、いかがでしょうか……?」

動きづらいが股のまま、ひらひらとこれ見よがしに自身の顔が描かれた札を揺らす男の前へと移動して変幻装姫は前屈みの体勢をとった。

両手は相変わらず後頭部に置いたままであり、たぶんつと巨乳肉を悩ましく弾ませて男の視界を完全に奪う。

正義のヒロインの破損したコスチュームと、そこから溢れ出る白い淫肉が雄の嗜虐心を刺激した。

「正義のコスチュームをこんなにして、ここに入れて欲しいんだろ牛乳ヒロインめ」

「ん、んうっ……は、はい……このコスチュームは今はこの為だけに着ていますのお……この雌牛おっぱいに、は、はやくお札を挟んでください……いいじわる、しないでえ……」

たった一枚の紙幣が乳肌を柔かく擦り、その淡い刺激に変幻ヒロインは甘い吐息を漏らした。

どこまでも相手に媚び諂い、正義のヒロインとして戦う誇りでもあったコスチュームをも自らの口で舐める。

ピツチリとした肌にフィットしたコスチュームに隙間などあるはずもないのだが、強引に挟み込んで欲しいと乳房を強調する為に、たぶたと揺らしな

がら男へとせがむ変幻ヒロイン。

「いいねえ。なら金の必要なエロヒロインにプレゼントしてやるとするか。ほらよ、サービスもしてやったからな。ありがたく受け取れ!!」  
ぐぐうっ!!

「んああっ……あ、ううっ……わ、わたくしのようなエロヒロインに、お金を恵んでいただき……あ、ありがとう、ございます……」

乳房を隠す布地の上部を強く引つ張られ、強引に作り上げられた隙間に二枚の紙幣がひらひらと舞う。男の指が離れコスチュームが元に戻ると、変幻ヒロインの胸元で挟まれた部分がくしゃつと圧迫された。

残る部分はしつかりと外からも見え、シャインミラージュの動きに合わせてこれ見よがしにゴム鞆のように揺れる。

「お礼は言葉だけじゃねえだろ? いつもみてえにやってみろ」

「こ、ごめんなさい……あ、あなたのお金のお陰で、シャインミラージュは喜んでいますのお……ほ、本当に、ありがとうございます……び、ピース、ピース……」

言われるがまま、ただ言葉で礼を述べるだけでなく、今日までに教わった動きを加える。

白いグローブに包まれた手を後頭部から離し、顔の横で固定してピースサインを作った。

勿論、腰は変態のように淫らに揺らし、表情は悪と戦う時とはかけ離れた蕩けたモノ。パイザーの下は潤む瞳は見えないが、嬉しそうな半開きの口は隠せない。

「ハハハハッ!! コスチュームに金を挟みながらピースするとは、とても正義のヒロインとは思えない!!」

「いや、シャインミラージュだからこそより映える

というもの。今日はこれでいくらになるだろうなあ?」

よく見れば、シャインミラージュのコスチュームに挟まれている紙幣は先の乳房のものだけではない。右側のたつぷりと淫肉の零れそうな下乳、両のブーツのむっちりとした太もも部分、さらには股間部にもしつかりと挟み込まれている。

それはすべてこの場にいる男達に変幻装姫に与えたモノ。そう、シャインミラージュがこのような真似をする理由はただ一つだ。

(……い、いつたいいつまで、わたくしはこんな変態のような真似を……神聖なコスチュームでお金を挟んで……これでは、正義のヒロインだなんて名乗れませんわ……いえ、すべては東堂院家と皆の為……た、耐えまさんと……)

言葉では下種な男達に媚を売るけれど、心までもが変態ヒロインに堕ちたわけではない。

すべては愛する家族達。そして東堂院家を守る為に行っていること。

※

変幻装姫シャインミラージュ。

表向きでは凛とした正義のヒロインとして華々しく活躍をする、人々の希望の象徴にして憧れの存在。

だがその裏では、平和を脅かすダーククライムによって弱点を暴かれ、数多くの調教により、処女を残したまま被虐の悦楽をその身に刻み込まれてしまっていた。

いつか来るであろう逆転の時を信じて屈辱と恥辱に耐え続ける変幻ヒロイン。しかし時間は平等に過ぎ、悪の手はシャインミラージュに絶望を与えんとさらに深くまで伸びてくる。

「まさか……どういふことですか?」

変幻装姫の正体はとうに掴まれていた。度重なる調教を考えればその可能性は高く、もしかしたらと

いう想像もあつたが事実として突きつけられたショックは大きい。

だがダーククライムの真の狙いはその先、変幻ヒロインへと訪れる破滅への一步。

東堂院紗姫。シャインミラージュの正体にして、東堂院財閥の令嬢。

そう、狙われたのは彼女にとっての日常。東堂院家そのものだった。

「う、嘘ですわ……そのような馬鹿げたことが、できるわけ……!!」

ダーククライムの手によって無慈悲に作り変えられるのは、彼女の生きている現実。

東堂院家に与えられるのは多額の借金。本来存在せず、これからも存在するはずのないモノではあるが、ダーククライムの手にかかれば投資の失敗や賭博などとして簡単に背負わせることができるという。

普通の相手であればそんなことは嘘であるとして一笑に付すことができるのであるが、この世界には存在しない科学力や闇のエナジーによる特殊能力を考えれば完全に否定はできない。

結果はすぐにわかると、もしもなんとかしたいのならば夜にまたここに来て、最後にそれだけを告げられてその日は終わりを迎えた。

東堂院紗姫が目覚めた時、彼女の世界は一転していた。

昨夜のダーククライムの言葉どおり、東堂院家を破滅に導く、誰の記憶にも残っていない破滅の記録。誰か信じようが信じまいが構わない。確固たる証拠だけが存在しており、東堂院という一本の太い柱が急激に朽ちていく。

家族は当然、東堂院家に仕える者などの関係者

その全員が混乱の中で、必死に虚偽の証拠を探して

はいいるがそれも無駄。

はいるがそれも無駄。

相手は人の理解を超越した存在なのだから。  
 「こ、ここでお金を稼ぐ……わたくしが、シャインミラージュとして……そんな……」

借金を返したければシャインミラージュとして、ダーククライムの手で作らした特殊な風俗店で稼げという。

裕福な相手のみが客として来るようになっていて、性的なサービスで相手を喜ばせると。ダーククライムから受けてきた調教での性知識を駆使し、変態ヒロインシャインミラージュとして一円でも多く借金の足しにしると。

正義のヒロインとしての矜持すら捨て去り、男達に淫らな姿を見せなければならぬ。そんなことはしたくないと思っても、選択権など存在はしない令嬢ヒロイン。

「……わ、わかりましたわ……変幻装姫シャインミラージュとして……精一杯、サービスをしてみせます……」

愛する家族の為。共に過ごしてきた使用人や多くの人達の為。

正義のヒロイン、変幻装姫シャインミラージュは抜け出せない底なし沼に深く深く沈んでいく。

※

「変態ヒロインに金をくれてやる。何度も来ているがどんだんイイ顔をするようになりやがって。バイザーで隠れてはいるが丸わかりだぞ!!」

股間部を守る布地へとさらに数枚の紙幣が捻じ込まれた。

変幻装姫の肌とコスチュームの間に、正義のヒロインの姿に相応しくないデコレーションが施されていく。

「あ、ありがとうございます……!! み、皆様のお陰で、淫乱変態な雌金ヒロインになっていますのお……」

最初のうちは戸惑いもあり、コスチュームに挟まれる欲望の紙に嫌悪を覚えていたのは確か。

しかし、回数を重ねることに自らの変態行為で増えていく枚数に、大きな達成感と快感が混じるようになっていた。

借金が消えたのならすぐにも終わりでいいとは思っている。しかし、今味わっている被虐の感覚は本物であることは否定できないことは確かだった。

「そろそろケツを向けるケツを!! 儂はシャインミラージュのケツを見に来たんじゃ!! 正義のヒロインなぞできないほどのデカケツしおつて。そのケツに金を恵んでやる」

人々の希望の象徴たる美少女ヒロインは、その豊かなボディのどこをとってもファンが存在している。普段、戦うヒロインの前では公然と言えないことも、ここではむしろ言葉にすることこそが正義。

「は、はい……ど、どうぞ、わたくしのデカケツをご覧になってくださいませ……んああ……こ、こちらはまだまだ、たくさん入りますわあ……」

声高に叫ぶ男へと、ムチ尻を突き出す形で反転する。

二桁に及ぶ枚数のヒロイン紙幣を挟む前面とは別に、コスチュームの布面積が少しばかり減った背部にはまだまだ余裕があった。

両手はピースサインで、周囲の欲望に満ちた男達へと高貴なヒロインらしからぬ媚びた姿勢を残したまま、じわりとした汗で鈍く光るむっちりとした尻肉を押し出す。

艶っぽくも荒い呼吸を繰り返して、雄達を楽しませる為にダンスに興じるかの如くふりふりと左右に途中で8の字を描く姿は慣れたモノだ。

「ヒヒヒッ!! いいケツ振りじゃな!! お前のケツは儂らを楽しませ、金を稼ぐ為に存在するんじゃないわかっておるな!!」

パチイッ!! ビチッ!!

「んはああ……ッ!! わ、わかっていませわあ……わ、わたくしのデカケツは皆様のモノ……あああ……も、もつと、もつとのお金で叩いてくださいませえ……そして、コスチュームに挟んでください……んあああつん!!」

（お、お尻、お金で叩かれて……どうして、身体が反応してしまうのがとめられませんわ……こ、これでは本当にわたくし……）

まるで和風の便器での排泄時のように腰を屈めていた変幻ヒロインの尻果実を叩く、複数枚の札。あまりにも微弱な刺激ではあるが、背徳的な高揚感に浸る身体は、その価値も含めて何倍ものゾクゾクとした快感へと転化させる。

稼ぐことが目的ではあるけれども、それはすべて東堂院に関する人の為。仕方なくしていることなのだ。

だというのに、尻肉に走る紙幣での刺激に身も心も甘く反応を示してしまう。最初のうちには覚えることのなかった、最低とも言える感覚に表情を蕩かせる変幻ヒロイン。

弱々しい札ピンタを受ける度にピクンと豊富な尻肉が震える様は、男達の嗜虐心を強く刺激することだろう。

「金で叩かれて喜んでやがる。そいつのが終わったらこつちにもこい!! タツプリ叩いてから金をくれてやるからよ!!」

「こつちもだ!! そのケツが目当てだったんだからな!!」

次々に肉欲に塗れた叫びにも似た声がシャインミラージュに突き刺さる。

「す、すぐに向かわせていただきますわ……!! お、お願いします……お、お金、お金を挟んでください……」

「まあいいじやろう。ほおれ、お前の大好きな金じや。儂からのモノだとこのケツでしつかりと覚えていくんじやぞ!!」

「んんうっ……あ、ありがとうございます……あ、あなたのお金、このデカケツで感じていますわあ……」

臀部を隠すコスチュームの右側を引つ張り上げられ、数枚のヒロイン紙幣が挟まれる。

尻肉に感じる少しばかりガサついた、紙の擦れる感覚に堪らずに甘い吐息が漏れるのをとめられなかつた。

雄達を喜ばせる為に自ら破損させた正義のヒロインの象徴たるコスチューム。そこに隙間なく得なければならぬモノを恵んで貰う為に、時間いっぱいまでシャインミラージュは、似合わないピースサインを両手で作り上げて卑猥なダンスを踊り続ける。

※

この店舗でシャインミラージュが行うことは、ホールでの変態ダンスショーだけではない。

むしろここから彼女にとつての本番。より高額なチップを得る為に、さらなる淫らなサーピスをしなければならぬのだ。

「じゅっぶ!! んむうう!! ぐっぶ、じゅぶ、じゅりゅりゅうううう!!」

先のホールと打つて変わり、ホテルの一室程度の広さの中で汚らしい水音が響く。

「へへへッ!! シャインミラージュがチンポしゃぶつてくれるなんざ最高だなあ!!」

「ぐぶじゅ!! ぬっぶ、じゅぶりゅ!! んぶううっ……んぶうおお、おおっほお!!」

男が歓喜に満ちた声を上げ、正義を語る口で奉仕をする変幻ヒロインを見下ろしていた。

今彼女はバスタブの中にその身を仰向けで預けて

いる。しかし、中に詰まっているのは身体を温める為の湯ではない。

「正義のヒロイン様が自分で稼いだ金に浸かっているなんざ、シャインミラージュも堕ちたモンだ!!」

「んぶっぐ!! じゅほおお!! おおっほ、じゅっぶ!! ぐぶ、じゅほっ、じゅぶずずうう!!」

（わ、わかつていますわ……!! それでも、こうするしかわたくしには方法はありませんのお……ああ……わたくし、こんなにもチンポに吸いついてえ……）

そう、敷き詰められているのは今日まで彼女が稼いできた金額分の紙幣。

両手両足をバスタブから出せるほどに、身体を押し上げるだけの大量の札の数々。

その上でシャインミラージュは、囲む数人の男達から向けられる肉棒へと奉仕をしていた。

「しゃぶつてばかりいるんじやねえよ。空いた手でこつちも奉仕しろや。チンポと金が大好きな雌豚ヒロインが!!」

「じゅぶぶっ……んぶっおお……ご、ごめんなさい……今、ご奉仕させていただきましたわあ……あ、熱くて、びくびくしてえ……んう、ああ……」

普段会話をする以上に、気品の欠片もない大口を開けて巨根へと奉仕をしていた変幻ヒロイン。

謝罪の言葉を紡ぐ為に、穢れた水音を響かせて一旦剛直から口を離し、頬を小突くもう一本の怒張へと左手を添えた。

白いグローブ越しにでもよくわかる肉の脈動と欲望の熱さ。もう数えられないほどに奉仕し、啜えたその感触に、ドクンと心臓が高鳴る。

嫌悪を感じさせない小さな嬌声。パイザーの下で表情を薄かせながら前後にシコシコ、相手に最高級の肉悦を与えんと擦り上げる。

「おいおい、だからってチンポ啜えるのは忘れんじやねえぞ? この風呂の金を増やしたいんだろ?」

「は、はいっ……たたいま、この口マンコで……この選(たくま)しいチンポ様にご奉仕いたしますう……んむう……じゅぶう、じゅつぶぐぶう!!」

口と手。本来ならば啜えたり掴んだりするはずではない汚棒を相手に、変幻ヒロインは教え込まれた淫語や技術を駆使して射精を促す。

「そうそう、そうやって肉便器みてえに奉仕してりやいいんだよ」

「ぐっぶじゅ!! じゅっぶ、ぬぐぶじゅ!! じゅほっ……ぐぶうおおお!!」

最早たどたどしきなど微塵(みじん)もない。穢れた下品な音を立て、唾液で肉の幹を光らせ、ぶるんとした瑞々しい唇で熱い肉竿を摩擦する。

「手もいい感じだ。この正義のヒロインの手袋で擦られてるつてのが堪らねえ。もつと擦れ!! 俺のザーメンでドロドロ口にしてやるからよ!!」

「ふ、ふあ……おおっぶ!! んぐぶじゅ!! ちゅりゅりゅ……ちゅぶうおおお!!」

（ああ……口の中も、手も、どんどんチンポ汁で穢れてえ……で、でも、射精させなければ……お金がお金があ……）

正義のコスチュームで金を挟み、正義のコスチュームで肉棒を擦る。

事実を改めて確認する度に背徳感が強まるが、口や手をとめることはできない。いや、むしろ激しさは増すばかり。

この場でのシャインミラージュの役割は彼らを満足させること。満足とは即ち、滾(たぎ)る欲望を放つことに他ならない。

「出して欲しいんだろ!? ヒロイン口マンコにたっぷりぶち込んでやるから感謝しろよ肉便器ヒロインが!!」

「こつちもだ!! 俺の臭いを染みつかせてやるから

なあ!!

「んうっぐ!! ぶじゅりゅりゅ!! じゅぽおおお!! おおつぽ……ふお、ふおれらいれすわああ……ひ、ひんふおじりゅう……ふひまへへええ……!!」

ピクピクと、口腔内と掌の中の肉棒が乱暴に震えた。

剛直には、唾液とカウパーの混じった淫液がたっぷりと付着してさらに奉仕音を強くさせる。

疑いのような射精の合図を前に、変幻ヒロインは嫌がることはせずに放たれるであろう白濁液を求めた。

ぶびゅうううううううう!! びゆるるるうううううううう!!

「んっぶうううううううう!! ぐぶうっうううううううう!!」

「ち、チンポ汁が溢れてええ……あ、熱くて、苦いのが口に、手にいい……!!」

ほぼ同時にぶちまけられる、二本の肉棒からの熱い欲望の粘液。

片や口腔を、片やグローブを。ドロドロの汚臭を放ち、白濁に染め上げる。

「んぐっ……ごきゅ、ごきゅ……!! んぐ、ごくごくっ……!! んうっぐ、ごきゅ……!!」

（の、喉が、焼けてしまいうですのに……飲むようなモノでは、ありませんの……）

喉を鳴らし、濃厚な白い汚辱液を胃に流し込む変幻ヒロイン。

一日に摂取する水分などとは比べ物にならない量を、シャインミラージュは毎日飲んでいる。

絶対に慣れることなどないと思っていたというのに、段々と湧き上がる嫌悪が薄くなり、美味とすら思えてしまうようだ。

同時にグローブに吐き出された白濁もまた、手袋

を軸として身体や周囲の札にも降りかかる。

雄の臭いはすぐに変幻令嬢の鼻腔を刺激し、幾度となく淫らな行為を繰り返した身体は敏感なまでにゾクゾクとさらなる淫熱を齎した。

「んぐっ……じゅぽおおおつ……んぽおつ!! はあ、ああ……げえっぶう……」

最後の一滴まで出した男が肉棒を引き抜くと、変幻装姫は空っぽの口を大きく開けたまま、汚臭の酷い息を吐き、直後に下品にゲップまでもをしてしま

う。

それは手で奉仕していた男も同様であり、スリズリと何度か手袋に残る精液を擦りつけていたかと思えば、乱暴に変幻装姫の手を振り払った。

「相変わらずいい口マンコだったぜ。ほれ、サーピスだ」

「ごっちもくれてやる。嬉しいんだろう?」

一人は金風呂に数枚の札を投げいれ、もう一人はホールでの淫ダンスの時と同様にコスチュームに挟んだ。

「う、嬉しいですわあ……ありがとう、ごきゅ……これからも、わたくしの身体で、気持ちよくな

ってくださいませ……」

直接シャインミラージュに奉仕され、口や身体を弄べるサーピス。

先のフロアでのダンスシヨールに比べて何倍もの料金が必要とするが、それでも客は後を絶たない。

あの正義のヒロインが従順な肉便器そのものとして、その身を使って奉仕してくれるのだから当然とも言える。

「へへへ……オレはシャインミラージュのマンコに注いでやる……!!」

「俺もだ。奉仕されなくても、この姿見てるだけで十分だぜ」

直接の奉仕とは別に、もう一つのコースも存在し

ていた。

それは、今も処女であり続ける変幻装姫シャインミラージュの膣へと精液を注ぐこと。

「……ど、どうぞ、わたくしの処女マンコに……あ、あなた方のチンポ汁を注いでくださいませ……はあ、んっ……ね、狙いは、外さないように……お願いしますわ……」

しかし、直接その処女地を男達が欲望に任せて荒らせるわけではない。

神聖なコスチューム。股間部の布地をずらされたシャインミラージュは、大切な秘裂を完全に露出した状態。

そこに丸めた札を突き刺される形で強引に割り開かされ、まるで的当てゲームのように、歪んだ円形の中へと精液を注げということだ。

処女のまま白濁液を膣へと受け入れるという、目が眩がしかねないような卑猥なゲーム。

しかし、普通の奉仕コースよりも高額となり複数参加可能な処女的当ては、一日でも早く多額の借金返済の為に稼がなくてはならないシャインミラージュにとつてなくてはならないモノ。

（今日こそ……チンポ汁で孕まされてしまいかもしれませんわ……あ、あつてはならないことですよ……）

……身体、どんどん熱くなつてえ……

本来肉棒によって奥まで突き入れられた状態で射精されるのが普通であり、余程の量がない限りは子宮にまで届くかも怪しい。

しかし膣内が犯されるという事実は変わらず、今日まで何度も処女のまま熱い白濁液を内部で感じていた。

あつてはならないこと。どこの誰ともわからない男の子を孕むなんて、東堂院家の令嬢として、一人の少女として、正義のヒロインとして、本当にあつてはならない。

サンダークラップスの  
ロボコンが風俗勤務!?  
濃厚ローテクを  
堪能せよ!

★本作品のオリジナルシリーズ『サンダークラップス!ロボコン』の電子書籍版が無料でダウンロードできるぞ!  
詳細は表紙の裏ページにて。

サンダークラップス!ロボコン  
THUNDER CLAPSI ROBBAN

スーパーソープランド  
SUPER SOAP LAND

は びわこういち  
小説 NOVEL 羽沢向一

みどりぎむら  
挿絵 ILLUSTRATION 緑木邑

「ついに来たぞ！」

倉林史郎は無意識に声に出していた。目の前のビルを見ているだけで、体内にはじめて味わう昂揚が満ちて、あちこちの筋肉が無意識に震えた。

服装におかしなところがないか、あらためて確認しておく。白い半袖シャツに、ダークブルーのストラックス。ライトグレイのスニーカー。

（服は昨日洗濯したばかり。風呂もアパートを出る前に入った）

ビルの黒い金属のドアに「パワフルガールズ」と記した小さな真鍮のプレートがある。

ドアを開くとロビーがあり、狭いカウンスターの向こう側に三十代の男が受付をしていた。

「いらつしやいませ。ご予約のお客様ですか」

愛想のいい声をかけられて、史郎は緊張でうわずる声で告げた。

「あの、五時に予約した倉林です」

受付がパソコンの画面を見る。

「ひかりをご指名のお客様ですね。コストチュームは」

受付が告げた名称に、史郎は大きくうなずいた。

「では料金をお願いします」

史郎はバッグから財布を出して、紙幣を払った。

「ありがとうございます。奥の待合室でお待ちください。用意ができましたら五番のお客様とお呼びします」

ロビーの奥のドアを開けると、無人

の狭い部屋があり、テーブルとロングソファがある。ソファに座って、四方の壁を見まわした。

何枚ものポスターが貼ってある。すべて有名な女性スーパーヒーローの写真だ。

日本最高のヒーローチームのジャスティスサーカスのメンバーである熟女魔道師マダム・スクロールと超高速ヒーロー銀の弾丸。

大阪を代表する女だけのヒーローチームのフェアリーフォースは、一枚のポスターに全員集合している。

北海道の守護女神北風。アメリカから静岡へ来た剛腕カウガールのミス・フジヤマ。真紅のチャイナ服もまぶしい横浜の夜の拳士赤い未亡人と弟子のすもも。

日本だけでなく、欧米やアジア各国の女性ヒーローのポスターもある。

大学生の史郎には遠い歴史上の出来事だが、ソ連が存在した冷戦時代にテロリストによるワシントンDCへの核ミサイル攻撃があった。

そのときスーパーオフビートと名乗る超人が核ミサイルを止めなければ、アメリカは首都を失っただろう。

スーパーオフビートがはじめたヒーロー活動をきっかけにして、世界中で様々な善悪の超人が現れた。彼らは最初の超人にちなんで「オフビート」と呼ばれた。

今も多数のスーパーヒーローが活躍し、スーパー犯罪者が暗躍している。

犯罪や災害から人々を守るスーパーヒーローの人氣は高い。

（サンダークラップスのポスターがないじゃないか！）

自分が一番大好きなヒーローがいないと、なんだか負けた気分になる。

サンダークラップスは東京で活躍する四人組の若い女性だけのヒーローチームで、人気上昇中の新鋭だ。

自分の部屋に貼ってあるサンダークラップスのポスターを、待合室の壁に加えた妄想の構図を浮かべて楽しんでると、スピーカーを通じた受付の声が聞こえた。

「五番のお客様。用意ができました。前のドアへ入ってください」

史郎はソファから飛び上がり、奥のドアを開けた。

目の前に若い女が立っている。

「こんにちは。ご指名をいただいたひかりです。よろしくお願います」

硬い笑顔で挨拶したひかりを見つめて、史郎は声をあふれさせた。

「フレア！」

フレアはサンダークラップスの一員。空を飛び、人間を超える身体能力を持つ。史郎はもう一度声を弾ませた。

「フレアだ！」

「はい」

恥ずかしそうに頬を紅潮させて応えるひかりは、独特の衣装を身に着けている。

史郎は、ひかりの衣装の特徴のひとつひとつを胸の内指摘する。

（純白で、ノースリーブのミニのワンピース！ チアリーダーっぽい！）

視線は、ひかりの豊かに盛り上がるバストに釘付けになった。

（おっぱい大きい！ 胸の黄色い炎のエンブレムが、引っぱられてる！ 背中に腰までの白いケープ。白い手袋。白いロングブーツ。フレアのコスチュームの完全な再現だ！ 髪型もフレアと同じショートヘア。顔も似てる！ 背が高く、身長も同じくらい！）

史郎は感激と称賛の言葉を、ひかりへ告げる。

「ひかりさんは本当にフレアに似てます！ この店にしてよかった。ほくの期待通りです！」

ひかりがぎこちない笑顔を見せた。

「ありがとうございます。前からよく言われるんです」

史郎がパワフルガールズを知ったのはネットの検索だった。

この店は女性スーパーヒーロー専門のコスプレソープランド。

ヒーローたちにとっては噴飯ものだろうが、その手の風俗店を無視して相手にしていない。他にやるべき正義がたっくんあるのだ。

史郎は十日後に二十歳の誕生日を迎える前に、童貞卒業を決意した。大好きなフレアのコスチュームがあるソープランドを探して、似ているソープ嬢がいるパワフルガールズを選んだ。

サイトの写真は、目鼻がぼかしてあるが、ひかりの髪型、顔の輪郭、口の

形はフレアの雰囲気があった。

「ひかりさんは、本当に、本当にフレアに似てます！」

「そんなに言われると、ちょっと恥ずかしいです」

「それで、あの、正直に言うけど、ぼくはこういう店に来るのははじめてで、というか、その、童貞なんです」

ネットで漁った風俗入門記事によれば、未経験者は素直に伝えるほうが風俗嬢に好感を持たれるらしい。

「だから、どうすればいいのか、よくわからなくて」

ひかりの美貌に驚きが浮かび、すぐにはにかなだ好ましい表情になる。

「じつはわたしも今日がはじめての仕事なんです」

「そうなんだ！」

「でも講習を受けていますから、まかせてください。ご案内します」

ひかりが史郎の右側に立った。横に並ぶと、男としては小柄な史郎と、女としては高いひかりは、ほぼ同じ身長だ。フレアのコスチュームから伸びる左腕が、史郎の半袖の右腕にまわされた。腕と腕の素肌が密着する。

史郎は彼女いない歴〃年齢。キスも未経験だし、手をつないだことすらない。はじめて味わう腕組みの心地よさに頭をぼーっとさせて、ひかりに導かれて廊下を進んだ。

ひかりが廊下に並ぶドアのひとつを開けた。中に入ると普通の住宅ではありえない構造の部屋がある。

ベッドルームと浴室が壁もなしにくっついているのだ。二つを区切っているのは湯がベッドルームに流れないための段差だけ。

浴室には直方体の浴槽。洗い場の床には、プラスチック製の世にいうスケベ椅子がゴージャスな金色に輝いている。一方の壁には、鈍い銀色のエアマットが空気の入った状態で立てかけてあった。

まさにソープランドな光景を、史郎がまじまじと見まわしていると、ひかりにうながされた。

「ベッドに腰かけてください」

史郎がベッドの端に座ると、ひかりも左側のすぐそばにミニスカートの尻を下ろす。

(ベッドの上で、女の人と二人きりになってる！ここで軽くおしゃべりをしてソープ嬢という感じになれ、と書いてあった。えーと、なにを話せばいいんだ……)

脳が空回りして話題が浮かばない。幸いにもひかりのほうからトークを振ってくれた。

「倉林さんは、フレアが好きなんですか」

「そうっ！ スーパーヒーローはみんな好きだけど、フレアが一番大好き！会ったこともある！」

「サンダークラップスが出勤した現場にいたんですか？」

「ただの野次馬じゃないよ。ぼくはフレアに助けてもらったんだ」

「本当に!？」

史郎は首に金メダルをかけられたみたいに誇らしい顔で語る。

「三か月前のデパートの火事で、ぼくは最上階のイベント会場から逃げ遅れて、フレアに救助された。今も鮮明に覚えている。ぼくはパニックで、空から降りてきたフレアの身体に必死にしがみついた。フレアはぼくを抱いて、道路へ下ろしてくれたんだ」

「さすが本場のヒーローはすごいですね」

二人で飛んでる間に、フレアの胸がぼくに押しつけられたんだ！とつても大きくて、柔らかくて、最高に気持ちよかった。ぼくが生まれてはじめて触れた女の人のおっぱいだ。その感触が今も忘れられない！」

普通ならこんな露骨なことを、とても他人には、特に女性には言えない。相手はソープ嬢という思いが、口を軽くしている。

自分の言葉に陶醉して、史郎は気づいていなかった。熱弁をふるう相手の顔が、困惑の色を浮かべて引きつっていることに。

ひかりと名乗るソープ嬢は、たった一度のフレアとの出会いを語る青年の顔を、曇った瞳でにらむ。

(三か月前に、サンダークラップス全員でデパートの火事から大勢救助したことは覚えている。でも倉林さんはいたかな？ 思い出せないけど、悪い人じゃない。自分の欲望を解消するために、

誰にも迷惑をかけない方法を選んだだけ。店で会ってからの態度も紳士的だし)

顔に表れないように、胸の奥だけで深々とため息をついた。

(でも、わたしが救助した人が、ソープランドでわたしのコスプレを指名するなんて、どう納得すればいいの?)

ひかりはフレア。

必要に駆られてパワフルガールズで働くことになり、店長からひかりという源氏名を付けられた。もちろん女性ソーパーヒーロー専門のコスプレソープランドなのは承知していた。

(本人を目の前にしても、わたしは本物のフレアだと気づかないのね。本物がソープランドで働いているなんて絶対に思わないか)

ひかりの正体にも、フレアの複雑な思いにも、史郎が気づくことなくしゃべった後に、フレアは告げた。

「そろそろ服を脱ぎましょうか？」

史郎は顔を赤らめて告げた。

「その前に、ひかりさんをフレアと呼んでいいですか？」

客からコスプレしたヒーローの名前で呼ばれることもある、と店長に言われたが、あわてずにはいられない。

「え、あつ、わたしをフレアだよ」「フレアと呼べば、もつと感じが出ると思つて」

「そ、そうですね。フレアと呼んでください」「ありがどう、フレア」

フレアの肩がピクンと上がり、背筋がゾクゾクした。

「ああああ、恥ずかしいっ！ 恥ずかしすぎるっ！」

返事の声が羞恥で震えた。

「はい」

「ぼくのこと史郎と呼んでください」

「はい、史郎さん」

史郎は歓喜で震える。

「はい！」

「では服を脱がせていただきます」

史郎はフレアの手でシャツのボタン

を手早くはずされた。両腕からシャツ

が抜き取られ、壁のハンガーにかけら

れる。白いアンダーシャツも脱がされ

中肉中背の上半身が現れた。フレアの視

線にさらされる半裸身が熱をはらむ。

「ブルじやないのに女の人の前で裸

になるのは恥ずかしいな」

「そう言われると、わたしもちょっと

恥ずかしいです」

実際にフレアの頬に朱が差した。

（本当に、わたしもはじめて。おとな

しく恥ずかしがる男の裸を見るのは）

ソープランドのテクニクの講習は、

先輩ソープ嬢が教えてくれる。パワフ

ルガールズに入店してから、史郎の身

体が最初に見る男の裸だ。

（わたしの男との経験はすべて酷かつ

たから……）

フレアの男性経験は、悪党に強引に

犯されるか、悪党に操られた市民たち

に輪姦されるかだった。

スーパージェイルンにとって、スーパ

ーヒーローを凌辱することは勲章その

もの。表沙汰になることは少ないが、

世界の多くの女性ヒーローが悪人に犯

された経験がある、とフレアは先輩ヒ

ーローたちから聞かされた。男性ヒー

ローが悪女に逆レイプされるのもけっ

こうあるらしい。

（史郎さんみたいな人とエッチなこと

をするのは不思議な感じ。本当はこれ

があたりまえなのに）

フレアの指がトランクスにかかると、

史郎は息を呑む。

（ああ、ついに全裸にされる）

下げられたトランクスの中から、

勃起したペニスが見え上がり、自分の

腹にパシッとぶつかった。

フレアと史郎自身の視線が、そそり

勃つ男根に注がれる。

（うわ、見たことないほど大きくなっ

ちゃってる！）

フレアに裸にされただけで自分史上

最大に膨張していた。といっても十九

歳の日本男児としては平均的なサイズ

で、まだ皮に包まれている。

フレアは内心で胸をなで下ろした。

（よかった。普通ね）

オフェイト犯罪者の人間離れた巨

根や異形の肉棒に凌辱されたフレアに

は、とっても安心できるペニスだ。

「わたしも裸になりますか？」

史郎は思いっきり首を横に振った。

「コスチュームを脱いだらフレアでな

くなる！ なにも脱がないで」

これもよくある反応だと店長に言わ

れた。

「それでは浴室へどうぞ」

史郎はフレアに手を取られて、浴室

へ入った。

「歯磨きをお願いします」

フレアが壁際の棚から使い捨ての歯

ブラシを二本取って、一本を史郎に手

渡した。

二人で歯を洗うと、次いで容器に入

った茶色い液体をコップに注いで、水

で薄めて差し出してくる。

「うがいをしてください」

顔に近づけると、独特の匂いが鼻を

つく。

「これが有名なイソジン！」

うがいをし、浴室の排水溝に飛び

散らないように注意して吐き出した。

「これでキスをしたいんですよね」

「はい。キスをください」

史郎が見つめる前で、フレアがまぶ

たを閉じて、唇をやや前に差し出した。

映像で何度も見たキス顔が、今、自分

の眼前にある。

（フレアとファーストキスできる。フ

レアがぼくのキスを待ち受けてる！）

両手でそとフレアの二の腕をつか

んだ。

（キスする前にロマンチックなことを

言うべきかな……ああ、やっぱりなに

も浮かばない！）

無言で自分の唇をフレアの唇に押し

つける。

「んっ！」

（柔らかい！ これがフレアの唇！）

史郎の内側で炎が大きく燃え上がり、

舌をフレアの唇の間に差し入れた。舌

先に予想外の感触が当たる。

（硬いものがある！ 歯！ フレアの

前歯を舐めてる！ うあつ！）

舌先に温かくて濡れたものがこすれ

た。はじめて味わう舌ざわりが、ヌル

ヌルとくりかえされる。

「うむっ！ むんんんん！」

（フレアがぼくの舌を舐めてる！ デ

イーブキスしてくれてるっ！）

「ふっ、んふ、はふう……」

唇を重ねるフレアの鼻から熱い呼吸

があふれるのを、史郎は顔に感じた。

見えない舌のくねりが、史郎の脳内で

激しく躍る。

史郎も夢中になって舌をさらに伸ば

し、フレアの舌に絡ませて、互いにこ

すり合う。

「んちゅ！ びちゃ……」

「んふう、るちゅ！ べちゅ……」

どれほどの時間、舌の交歓がつづい

たのか。

「はああああ」

フレアが大きく吐息を洩らして、開

いたままの唇を史郎から離れた。二人

分の唾液に濡れたフレアの口を、史郎

は名残惜しんで目で追う。

「椅子に座ってください」

「は、はい」

全裸で乗るスケベ椅子の座り心地は、

あまりに特異だった。尻の左右だけが

硬いプラスチックに触れて、下半身の

ち着かない。同時に大きな期待が、さらに勃起を苛烈にした。

スケベ椅子の前にフレアがひざまずいて、プラスチック製の白い湯桶を床に置くと、手袋をはめた手でボディソープを泡立てる。

「身体を洗います」

フレアが両手で白い泡を持ち、たつぷりとコスチュームの豊かな胸にまぶした。黄色い炎のエンブレムが泡に消される。

史郎の薄い胸板に、泡みぞれのバストが押し当てられた。

「うわあ！ おつばいに！」

コスチュームの布は、以前に抱きついた本物とは異なり、とても薄く、内側の乳房の柔らかさと弾力を鮮明に感じられる。

「ノーブラだ！ コスチュームの下にブラジャーをつけてない！」

「はい。ノーブラが決まりなんです」

二人の胴体に挟まれて平たくたわんだ豊乳が、史郎の肌の上で円を描いて滑りだす。

「あああ、気持ちいい！」

直接触れているのはコスチュームの布だ。タオルで身体を洗うときと同じなのに、信じられない心地よさが胸から全身に広がっていく。

「はじめですが、本当に気持ちいいですか」

史郎は泡にまみれた上半身をくねらせて答える。

「すごくいいです」

「よかった」

フレアが微笑みながら泡のバストを史郎の背中へ移動させる。背中がシュツシュツとバストが上下した。

「次は、史郎さんの手を洗います」

史郎は右の首を握られて、フレアの豊かに盛り上がった胸に押しつけられた。泡みぞれの黄色い炎に、手のひらと指が沈む。

手を洗う名目で、史郎の右手は二つのノーブラ豊乳の表面を上下左右に動かされた。動きに合わせて、コスチュームの布が泡を盛んに生み出す。

押しつけられた右手にこすられて、乳球がたわみ、縦横に形を変えていく姿が、史郎の目に映る。

薄い布を通して、指や手のひらに二つの突起がかすった。乳肉の柔軟さとは違う感触の正体に、史郎もすぐに気づく。

「フレアの乳首が当たってる！」

史郎の右手を離し、左手を同じ要領で二つの乳房で洗う。史郎はまた巨乳と乳筒の魅力を堪能して、変化を感じ取った。

「もしかして、フレアの乳首も硬くなってる？ 勃ってる？」

史郎の問いに、フレアが沈黙して胸で左手を洗いつづける。ややうつむき加減の美貌に色濃くあふれる羞恥の表情を見て、史郎は確信した。

（フレアは洗いながら乳首を硬くしてる！ ぼくの手で乳首を勃起させてるんだ！）

史郎の左手を持ったまま、フレアが立ち上がった。下半身のミニスカートの裾の前へ、左手を持つていく。

「腕を洗います」

フレアがミニスカートの裾をつまみ、まくり上げた。

史郎は高い歓声を放つ。

「見えたっ！」

フレアのコスチュームは、白いボディスーツの腰にスカート状のフリルがついている構造だ。

パパラッチにスカートの中を何回も撮影されているが、見えるのはショートではなく、ボディスーツの下半身部分にすぎない。ハイレッグやTバックではなく、下腹部と臀部全体をしつかりと包んでいる。

パワフルガールズの衣装も本物のデザインを再現しているが、濡れた下腹部はあきらかに中にショーツを穿いていない。

（下着が見えているのと同じだ）

史郎は視線を白い布の中心部分に注いだ。凝視されるフレアの下半身が前へ進む。史郎の左腕の首が、露出した左右の太腿の間に挟みこまれる。

「ひゃー！」

手首に左右からギョツと内腿の肉が押しつけられ、手のひらが股間の布に密着した。史郎は反射的に指を動かし、薄い布越しに女の秘密の部分をつかむ。

「うんっ……」

フレアが喘いで、腰を前へ突き出した。左腕を三方からとらえた女の下半

身が、モノレールのようにヌルヌルと進み、史郎へと向かってくる。

「す、すごい！ こんなこと！」

左腕を伝って、フレアの泡に濡れた下半身が史郎の顔へ迫ってくる。このまま顔に押しつけられるのか、と思うとフレアが背後へ退いて、またあえかな声をこぼした。

「あくっ」

左腕を股間に強く挟んだ腰が前後にピストンするたびに、フレアの唇の端からあふれる喘ぎを、史郎は聞いた。

（フレアが、ぼくの腕に恥ずかしいところをこすりつけて感じてる！）

史郎が耳をすまして妄想を膨らませている間に、フレアが太腿の間から左腕を抜いた。

「はああ、右腕も洗います」

間を置かず右腕を下半身に挟んだ。

「んっ」

またフレアの腰が前後に動き、腕を滑る白い布に泡が溜まる。

「はああ、次は右脚を洗います」

スケベ椅子に腰かける史郎の右脚の太腿に、フレアがまたがった。股間が乗り、脚にねっとり体重がかかる。

「重い！」

「あ、すみません」

「いや、脚にフレアの体重を感じて気持ちいい。このままつづけて」

「はい」

太腿に乗ったフレアが両腕を史郎の肩に置いて、小刻みに腰を動かした。股間を膝から太腿の付け根まで何度も

往復させる。

「あん、ああ、ご気分はどうですか？」

「たまらないっ！」

史郎はスケベ椅子の上で身悶える。右脚を刺激されるだけで、自分でも驚くほど大きく反応した。太腿がこれほど敏感とは知らなかった。

目の前のフレアの紅潮した美貌も、股間を男の身体でこする心地よさに悦んでいる、と史郎には見えた。

「んふっ、左脚も洗います」

左の太腿にフレアの股間が乗り、泡とともに前後へ運動する。ソープで滑るたびに、濡れた音色がクチュクチュと奏でられる。

「はあっ、それでは一番たいせつな所を洗わせていただきます」

フレアが太腿から下りて、史郎の背後にまわって両膝をついた。

「来たっ！」

史郎はフレアを追って、首を背後へねじ曲げた。ペニスがひとりりで跳ね上がり、泡がついた腹を打ち鳴らす。

尻に当たる感触で、フレアの右手がスケベ椅子の窪みに潜りこんだどわかった。

指で尻の谷間をこすられ、肛門をなでられる。

「ほっひいっ！」

はじめて知る感覚が、一拍置いて快感へと昇華する。

「ここも洗わせていただきます」

肛門と睾丸の間を、泡立つ手袋が何度も往復する。

「ひゃっ！ それ！ そこ、すごく気持ちいいよっ！」

その部分が性感帯だとは、史郎は今の今まで知らなかった。フレアの指の腹が動くたびに、裸身がピクンピクンと跳ねて、弾けそうに膨張した亀頭が腹を連打する。

睾丸をフレアの手で包みこまれた。五本の指が巧みに蠢き、やさしく揉みほぐされる。

「あっああ、いいっ！」

睾丸を他人に愛撫されるはじめての悦びに、うっとりとし身をゆだねていると、脇腹をかすめてフレアの左手が前にまわってきた。

史郎の肩越しにフレアがペニスを覗きこみ、前後に動く亀頭を左手でそつとつかんだ。

「剥きますよ。よろしいですか」

「はっ、はい！」

指が動き、クルリと包皮を剥き下ろされた。

「うおうっ！」

鮮烈な電撃が、亀頭から肉幹を駆け下り、全身を走り抜ける。

風呂では自分で皮を剥いて洗う。今日も、風俗店に行くときは事前に清潔にしておくべしというネットの忠告に従って、アパートを出る前に風呂で亀頭を洗った。

だが今までに皮を剥くだけで、快感の衝撃が炸裂することはなかった。フレアが泡をすくって、裸の亀頭に触れる。充血して赤く輝く曲面が、水晶玉

を磨くように十本の指で複雑にさすられた。

「こおおっ！」

史郎は歓喜の叫びを浴室に反響させた。成人コミックで「自分の手でオナニーとは全然違う！」という描写を何度も読んだが、現実はそのようなレベルではない。スケベ椅子がきしむほど全身がガクンガクンと痙攣する。

フレアが手首を巧みにひねって亀頭を研磨したかと思うと、肉幹を滑りシユツシユツと泡を散らして上下にしごく。右手も休まずに睾丸をやわやわと心地よく揉みだてた。

「あうっ！ はおおお、くっううっ！ すこいよ！ すこすぎるようっ！」

人生最初の女の手から与えられる男性器への奉仕に、史郎は耐えられなかった。自慰よりもはるかに早く限界を突破してしまう。骨盤が溶ける灼熱の快感が、精巣から尿道へ疾走する。

「出るううっ!!」

「あっ！」

亀頭を包むフレアの五本の指の間から精液があふれた。史郎の肩の上で目を見張るフレアの指先から、白く濃厚な水滴がポタポタと落ちる。

「はあああ、こんなに気持ちがいいのははじめてだ……うん、ありがどう、フレア……」

「わたしも、お礼をいわれるのは、はじめです。ふうう……」

悪党どもに手コキにフェラチオ、パイズリと性技を強制されたが、奴らは

フレアの肉体を淫具にして、自分の欲望をまき散らした。

（手で出させて感謝の言葉を聞くなで、本当に不思議）

「ソープを流します」

スケベ椅子の上で放心する史郎の裸身に、シャワーの湯がかけられる。亀頭にまぶされた自身の精液も、フレアの手で直接洗い落とされる。

「はうう」

射精直後でいっそう敏感になっている局部をなでられて、史郎はまた背筋を反らせた。放出で力を失いかけた男根が、フレアから与えられる刺激を求めてたがり勃ち、史郎自身が力強く言い放った。

「童貞を卒業した！」

「えっ!? 手なの!?」

「女の人といっしょになって出したから、もう童貞じゃないよ！」

（そういう考えもありかも）

フレアは納得して仕事をつづけた。

「次はマットプレイです。その前にそろそろわたしの胸と、あの……」

口ごもり、視線を自身の下半身へ向ける。

「……ええと、下のほうとかを、見たいですか？」

史郎は脳内で、コスチュームは着たままだいいフアンの願望と、女体を直接見たい男の欲望がせめぎ合う。

「コスチュームを脱ぐんですか？」

「いえ。コスチュームを着たまま見てもらえます」

「それなら、見たい！」  
「わかりました」

フレアがコスチュームの中心を、首から鳩尾まで指でなで下ろした。布の下に隠されたコンシールファスナーを開いて、両手で白い布を左右に大きく広げる。

コスチュームの中に押しこめられていた二つの豊満な乳房が、解放されてどつとあふれ出た。

はだけた布がバストの左右の付け根にひっつかけて、より強く乳房が史郎へ向かって押し出される。

（史郎さんが胸に手を出してくるかも）と、フレアは思った。

だがはじめて女の胸を目にする青年は、手を伸ばせば触れられる距離で立ちつくして、ただ目だけを大きく見開いている。

史郎の初々しい姿が、かえってフレアの羞恥心を煽りたてた。

（わたしが本物で、ソープランドでこんなことをしていると知ったら、史郎さんはどうするだろう。風俗が悪いことだとは思わないけど……）

「おおお！ 大きい！」

やつと史郎は声を出した。生で見ると大迫力の巨乳は、筋肉に支えられて満々と前に突き出した。美しい曲面を描く球体の先端では、淡い桜色の乳輪が咲いて、中心からピンクの筒が屹立している。

「やっぱりフレアの乳首が勃起してる！」

史郎の大声で指摘されて、フレアが身をよじった。

「は、恥ずかしいですけど、史郎さんを洗うときに感じてしまっ……」

恥じらいながら左手でミニスカートをまくって、右手でボディスーツの下部をつまむ。

布の股間部分が楕円形に剥がれた。

コスチュームに開いた穴から、ふっくらした恥丘と、その中心を走る縦の溝が出現する。

「見えた！」

史郎は叫び、一度射精した男根を猛烈とたぎらせる。

実際に見えているのは、びつちりと閉じた秘裂の外側だけ。女の真の秘密はまだ閉ざされたまま。

（ソコの中を見たい！ 指で広げて、女の人の中を見せたい！）

激しい願望を口に出せない。無言で熱い視線を注ぐばかりだ。

フレアが銀色のエアマットを床に敷いて、マットの端の枕部分に白いタオルをかぶせた。手桶の中でローションと湯をかき混ぜて、エアマットに塗り広げる。

床に両膝をついて、自分の露出した胸にローションを塗りはじめる。両手の動きに追われて、ヌルヌルの二つの乳球が上下左右に逃げまわった。

「んふ……ふあ……」

乳房と肉筒をヌラヌラと輝かせると、ローションを乗せた右手を剥き出しの恥丘に押し当てた。

「はっあ……」

手を恥丘から滑らせ、太腿の間をくぐって肛門まで進める。女の秘部の上で二度三度と手を動かし、クチュヌチュとぬめつく音を奏でた。空いている左手は再び胸に当て、左右の乳房をねっとりとなでさする。

（ああ、史郎さんに、オナニーしているみたいと思われそう）

コスチュームの腹と手足にもローションをまぶすと、隠すべき部位をあらわにした煽情的な股体が、透明な皮膜でテラテラと輝く。

「うつ伏せで寝て、タオルに顎を乗せてください」

「はい」

史郎がいそいそとマットに腹這いになる。ピニールに亀頭が押しつけられただけで、予期せぬ快感が走った。

「安全のために、マットプレイではお客様は動こうとしないでくださいね。ローションで滑って転ぶお客様もいますから」

「そうなんだ。わかりました」

「では背中に乗りますよ」

史郎は背中に、布越しではなく直接二つの柔らかく温かい塊を感じた。柔軟な感触がひしやげて広がっていく。

「ふあああ……」

無意識にうめく史郎の耳に、フレアの吐息が注ぎこまれた。

「はふんん……」

背中に押しつけられてつぶれた乳肉が、肩甲骨や背骨の上を上下左右に移

動する。圧迫感がありながら、体重をあまり感じさせない絶妙な動きだ。（フレアは今日が初仕事なのに、すごく上手い気がする！）

感嘆する史郎は、もちろん知らない。フレアは未熟なソープのテクニクを、オフビート能力で補っている。自由に空を飛ぶ能力で身体をわずかに浮かせて、滑らかな移動を可能にした。

フレアの身体が軽快に滑り、乳肉だけでなく腹のコスチュームや太腿を背中にこすりつけられると、史郎は未知の心地よさに身体が痺れた。自分の背中で鳴るシュッシュッという摩擦音で、鼓膜も愛撫される。

「次は史郎さんを表向きにします。力を抜いて、わたしに身をまかせてください」

「はいっ」

うつ伏せの身体の右側にフレアが膝をつき、史郎の胸の下に右手を潜りこませた。胸とマットの間を通り抜けた右手が、史郎の左手首を握った。フレアの左手が、史郎の腰の右側に当てられる。

「行きます」

かけ声とともに、史郎の左腕が引っぱられ、腰の右側が押し上げられる。フレアの力とローションの滑りで、史郎の全身がマットの上でツルリと反転して、瞬時に仰向けに横たわった。

史郎は目を丸くして、フレアの顔と豊乳を見上げる。

「びっくり！ スゴい技だ！」

フレアが史郎の胸と腹にローションを塗って、覆いかぶさってくる。男の二つの乳首に、女の左右の乳首の勃起した先端が当てられた。四つの乳首同士を触れ合わせたまま、フレアの身体が小刻みに動きます。

「うひゃー！」

史郎の喉から甲高い嬌声こせうがほとぼしる。未知なる男の乳首の愉悦に、喜声が止まらない。

「うわうわ！ あふっ、くひ！」

史郎と上から向かい合うフレアも、唇から甘い音色を滴らせる。

「あふ、うっんっ、あはあ」

乳首同士の遊戯に、乳肉が加わった。史郎の胸板にバストが押し当てられ、ニユルニユルとこすりつけられる。

「気持ちいい！ フレアの大きな胸最高っ！」

「わたしも気持ちいいです」

フレアが身体を下へずらした。現れた史郎のローションまみれの右の乳首を、フレアの唇がチュッとついばむ。

「はうっ！」

乳首にキスされるのも当然はじめてだ。次から次へとはじめての喜悦を身体に刻まれる。

「チュッ、ンチュッ、ルリユロ……」

フレアがキスをくりかえし、さらに舌で乳首を強く舐めまわす。再び乳首にキスをする、唇がツ——ツと胸の上を左へ進み、もうひとつの史郎の乳首を含んだ。

「はあうう」

「んっ、んんっ、はあああ、クチュ、ペリユ……」

左の乳首も唇のキスと舌のおしゃぶりで、ずぶずぶと未知の甘美な悦びが掘り起こされていく。

乳首への口唇愛撫がつつけられて、史郎がうっとり耽溺する最中に、下半身で新たな悦楽が噴き上がった。

反射的に枕から顔をもたげると、フレアが左右の乳首を舂めながら、左手で亀頭をクチュクチュと磨いている。

乳首責めに反応してパンパンに膨れた亀頭が、直接刺激を受けて今にも破裂しそうだ。

乳首と亀頭に同時に奉仕され、史郎はせつばつまって訴えた。

「あああ、フレアツ、また出そう！」

「ンチュウツ、ふああ」

乳首からフレアの顔がローションの糸を引いて上がり、唇同士のキス寸前の距離でたずねてくる。

「このまま出されますか？ それともわたしの、その、中に出します？」

史郎は両手の指でマツトを引き裂くばかりに力をこめて宣言した。

「フレアに入りたいですっ！」

「喜んで」

アレアが身体を起こし、史郎の腰をまたいだ。その位置で膝を曲げて、身体を落としていく。右手が伸びて肉幹をつかみ、亀頭をボディスーツから露出している恥丘へ向けた。

史郎は首を上げて、自分とフレアが距離を縮める光景をじつと凝視する。

ヌチツ。

亀頭の先端が、閉じた縦溝に触れた。ローションをまとった肉唇が滑らかに左右に広がり、史郎の分身はフレアの内側にスルツと入りこんだ。

「ほおおうっ！」

指や唇や舌とは違う濡れた柔肉が、亀頭にみっちり貼りつき、キューツと締めつけられる。

男を啜れたフレアが、またいだ史郎の顔を見つめて、わななく声を噴き上げた。

「あああつ、ダメツ！」

湧き起る快感の大きさに惑乱して、下半身から力が抜け、尻がすとんと史郎の腹の上に落ちた。自身の体重の力で、フレアの中に男根が付け根まで突入する。

「あひいっ！ はっおおう！」

史郎の目にくつきりと映った。自分のペニスの根もとが、肉孔を押し広げている。その先は女体の中に埋まって、熱い粘膜にきつく抱かれる。

「入ってる！ フレアに入ってるう！ フレアの中は最高に気持ちいいっ！」

夢中で腰を突き上げようとしたが、マツトのローションで滑ってできなかった。

フレアがこみ上げる快感に耐えて告げる。

「はあああ、わたしが動きまます」

フレアが手足を巧みに使って腰を上

下左右にくねらせはじめる。今回もこつそりと飛行能力を応用した。

「んっ、んはああ、あふうう……」

身体を浮かせて膣口からローションと愛液に濡れた肉幹を吐き出し、亀頭だけが女性器の中に残る位置まで上昇する。すぐに身体を下ろして肉幹を体内に呑みこみ、史郎の腰に乗った。そしてまたひねりを加えながら浮き上がる。

亀頭から付け根までのわずかな距離の移動を、オフビート能力でくりかえす。

（飛行能力で自分の身体を動かして史郎さんのをしごくなんて、あああ、まるつきりわたし男の身体でオナニーしているみたい……）

自分で身体を上下に動かし、腰をうねらせるたびに、想像しなかった悦楽の波が次々と押し寄せてきた。

これまでに悪党たちに陵辱されたときは、決まって媚薬や魔術や超能力で肉体を強制的に欲情させられ、官能の感度を増幅された。

それでもしなければスーパーヒーローは快楽に溺れて屈服することはない、と悪党たちは逆の意味でヒーローを信頼しているのかもしれない。

しかし今は身体を狂わせるものにはなにもなかった。

（受け身の史郎さんへの奉仕が、知らないうちにわたしの肉体を発情させていたの？ わたしはもともと性の快楽に弱く造られているから……）

フレアは人造人間。



美少女変身ヒロインが催眠風俗なんかには負けるわけないだろ!!

この星は…

ジュエリー  
プリンセスが守る!

# ジュエリー プリンセス

~催眠風俗で大ピンチです!~

初単行本  
「らぶじゅーすパーティー」  
好評発売中!!

あまみや  
漫画 COMIC 雨宮ミズキ

頑張れー!  
敵をやっつけろー!

やった!  
ジュエリープリンセスが  
来たぞ!







負け無しが続いていた  
ジュエリープリンセス達だったが  
ある日戦いに敗れてしまった



その後  
「あのジュエリープリンセス達が  
働いている風俗がある」という  
噂が広まり店にやってきました



見る影もない...!

ジュエリープリンセス達は  
洗脳されてるらしいので

今やこの国では  
正義のためには何でも  
思い込んでもいいのだ



んふっ

おじさん達になんか絶対にはげないんだから!!



まさか街の正義のヒロインが風俗にいるなんて夢にも思わなかったよ



んふっ!!

入江アツシちゃんのおまのHロケさ〜♡



ほおらプリンセスロまんこでロイヤルご奉仕してよ♡

おん

即尺



んふっ  
臭いぞぞぞぞぞ

っっ早〜  
射精しなさいっ



男達の欲望のままになっ  
てているなんて…!



あんなに強くて  
かっこよかった  
シユエリー  
プリンセス達が…!



スパッツコキ

おいバカ女!  
これが何かわかるか?

チンポだよチンポ!  
見たことねーだろ?

バカじゃないし!  
ちんぽだって  
な何度も見たこと  
あるぞ!



ローション素股

いけ…いけ…!

そんなんじゃ  
イかないなあ〜!



愛があれば  
悪はやつつけ  
られるんですっ

みんなまとめて  
やつつけよう！

ふぶん  
私が一番最初に  
射精させてみせるわ



自己ハニスを  
しやぶつてくるなんて  
信じられない!!!

あの強くて淫々しい  
シュエリプリンセス達が...



あつほら  
また悪ちゃんぽが来たよ

!?



ちゃんと  
悪ちゃんぽは退治して  
おこななきゃ

えっ

すい



また敵が現れたのね

皆!  
あれ行くよ!

次から次へと...

キッ

力を一つに  
合わせまじょう!

任せて



すい

すい

慈愛をもってちんぽを癒やす！  
プリンセス・ペリドット！

早く来なさい！  
愛の力で倒して  
差し上げます！

小さいけれど  
感度は抜群！  
プリンセス・ハウライト！

締めりなら誰にも負けない！  
プリンセス・ラピスラズリ！

そっちから来ないなら  
こっちから行くよ？

弱そう…一ユキで  
射精させてあげる

ほらほら  
かかってきなよ？



男も女も翻弄する!?  
プリンセス・オニキス!

なんて邪悪なオーラ

オニキスさんが  
一捻りしてあげるわ

そして  
絶対絶対頂へと導く!

誰もが認めるNo.1風俗嬢  
プリンセス・スピネル!

悪のちんぽになんか  
絶対に負けないんだから!





プリンセス・ペリドットー!

さあ誰かひんがせ  
かかってくるなごー!



スーパーヒロイン  
エロエロタイムだー!!

オオオッ



一度このデカ乳で  
パイシリして  
みたかったんだよな  
おい! この乳牛女!  
母乳出してみろ!

愛の前では  
悪は無力ということを  
証明してみせます!

ふん...っ!

キッ

マシエマロおっばい  
きもちいいー!

愛は必ず  
勝つのです!

★089夕ロー先生の人気作『デキる妹はイヤですか?』  
の電子書籍版が無料でダウンロードできるぞ!  
詳細は表紙の裏ページにて。

クールな冷笑をたたえらる少女シノビ  
潜入先で待つ娼婦調教の果てに彼女は  
!?

謀忍  
霧咲氷雨  
きりさきひさめ

～吉原遊郭に沈む潜入娼婦～

おぼきゆー  
小説 089夕ロー

りんどう  
挿絵 竜胆  
ILLUSTRATION

開国、文明開化、そして大戦を経てより、長く発展を続けた日本。

近代化を経てさらなる栄華を誇った首都、江戸シティ。かつての隆盛は今は失われて久しく、麻薬密売や人身売買、殺人強姦等の犯罪が横行し、非法のカジノやら娼館やら違法店舗が乱立する無法者たちの温床と化していた。日本政府も黙しておらず浄化に着手して長い。

その最たる先兵にしてみつとも多く労を尽くし、公安当局の影に潜み、人知れず悪党を裁く者たちがいた。

古くは戦国の世にあり、政を裏から支える者——忍と呼ばれる者たち。その末裔にして、今は政府直轄の特

別諜報機関、諜忍と呼ばれる存在であった。

※

「チ、なんだって見つかつちまつたんだ、公安のクソどもが」

深夜の江戸のうら寂れたバラック街を、二台の大型トレーラーが苛立たしげに走行していた。

「どつかのアホがドジつたんだらうよ。まあいいじゃねえか、ギリでトンズラできたんだからな」

女どもも連れ出せたんだし。そう言つて助手席に座る男が、背後の荷台のコンテナにしつらえた小窓を指差す。

「今回は上玉が手に入つたしな。いい稼ぎになりそうだ」

「せつかくの商品だ、放り出しちゃ儲けになんねえぜ」

トレーラーを走らせる男たちは人身売買業者だった。コンテナに所狭しと押し詰められるのは様々な手法で集められた金に換えられる運命の女たち

治安乱れし江戸シティにてその身の行き着く先はどこか、素人であれども想像するだに暗澹たるものだらう。

「とにかく上に知らせなきゃな、クソどもに嗅ぎ付けられたつて」

助手席の男が携帯端末を操作し、映像オフモードで話し始める。

「今そつちに向かつてまさあ。吉原のええ、例の店——デイエゴ様とこに

できあ」

アジトを摘発された事で焦りがあつたのだらう。

男はいとも容易く、その目的地を口にした。

それを耳にしたコンテナの奥にいる一人の女が、暗闇の中でぼそりと小さく声を出した。

「——やはり吉原のようです。マークして例の遊郭かと。はい。詳細は連中から直接」

「なんだてめえ、なにこそコソしやべくつてやがる！」

運転手の男が小窓から荷台の奥を見やり、助手席の男が訝つた様子で拳銃を向けた。

「D地点を通過。——了解。これより制圧行動に移行します」

「無視すんな、誰としゃべつてんだ！」

男らが凄むも女は微動だにせず、他の女らが怯え始める中、すくつと立ち

あがり目深に被つたジップパーカーのフードをあげた。

「ターゲットは二台、共に二名ずつ。フツ、問題なし、容易い相手だ」

暗闇の中、白く浮かび上がる素顔。つんと目尻の吊り上がった勝気そうな目をした女だった。美しい——荒れ果てたこの江戸に相応しくない美貌である。すつと通る細い鼻筋、桜色の淡い唇、なめらかな丸みを帯びた輪郭、青く煌く膝下まであるストリートロング。トップモデルもかくやという若さ溢れる美顔には、義侠心と戦意に満ちた生きた笑みがよく似合っていた。

「制圧行動開始——アクティベーション・モードSHINOBI！」

女は凛として言い放ち、着ていた衣服を一挙動にてぱつと脱ぎ捨てた。

一糸まとわぬ白い裸身が闇の中あらわとなる——と見えたのも刹那、細かな燐光がその身を包み一瞬にして覆い隠した。

それすらも刹那の出来事。光の粒は瞬く間に形を成し、起伏目立つ人型の輪郭を形成させ、

「諜忍、霧咲氷雨。貴様らは当局が行する！」

光の収まったその姿を見て男二人は目を剥いた。

女の姿は瞬時にして一変していた。白い素肌は青い薄布に覆い尽くされ、口元には覆面、腕には籠手、足には脚絆、背には刀という戦闘装束となつていた。

特殊急襲部隊が使う戦闘服とも違う。防具と呼ぶにはあまりに薄く、籠手と脚絆を除き身体にびたりとフィットしている。レオタードと見て遜色ないほどの格好だ。

そして浮き出る身体の線は、男の劣情を誘うに申し分の無いものだった。たつぷりとした豊かな乳房にでんと膨らんだ見事な臀部。すらりとした長身に細くくびれた腰、肉付き良い太腿と八頭身はあろう長い両脚。こちらもトップモデル顔負けの起伏に富む素晴らしい肉体美を誇っていた。

「諜忍だと、マジか!？」

肉体美に見惚れたのも束の間、男らは慌てて銃のトリガーに指をかける。

が、ポニーテールと化した青い長髪が、ゆらりと揺れたのが見えた矢先、女の姿は闇に溶けるがごとく消え失せていた。

助手席の男がぎよつとした顔で窓を覗きこもうとして、しかし——その首が不意に、ずるりとずれてシート脇に落ちる。

「遅い。日本の忍を舐めるな」

首を失つた軀の背後には女が忽然と姿を現していた。背に帯びた忍刀を逆手に抜き放ち助手席に割り込む形で。一体どんな手品を使ったのか、理解できず運転手は悲鳴をあげた。

「車を止める。後続もだ」

「てめえ、なにモンだ！」

怒鳴つたのは運転手ではなかった。異変を察した後続のトレーラーが横に

二巻続けて書かせていただきました。ご覧いただくと鼻息が出そうです。雑誌はこれで最後となりますが、以後は電子版にて、皆様どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

並び窓から小銃を向けたのだ。

女は慌てた素振りすら無く、窓から身を乗り出し後続車へと鋭く跳躍した。銃声と宙を舞う火花、金属の弾ける甲高い音。

その一瞬の後、後続車の男二人は血しぶきも無く首を落とし、

「もう一度言う、車を止めろ！」

「ひいっ!? どうなってるんだあ!」

先の運転手の喉元には、忍刀の刃がびたりと押しつけられていた。

「どうする、貴様も首を落とすか?」

「こ、殺したら情報は得られねえぞ!」

「安心しろ、ナノマシンを投与すれば脳から情報は取り出せる」

「わ、わかっ、た、止める、止める!」

空恐ろしい事をさらりと言われて運転手は観念しブレーキを踏む。

サイドミラーには、タイヤをやられた後続車がバラックにぶつかり停車しているのが映り込んでいた。

※

「間違い無いようです。情報解析の結果、ターゲットの潜伏先は吉原の一角に絞られました」

深夜の捕り物から数時間後。シテイ埼玉の郊外のビルでは、謀忍らによるミーティングが行われていた。

「さすがね水雨、あの状況で被害者側に死傷者ゼロなんて」

腕の立つ謀忍は頼りになるわ。女上司はそう言い学生服姿の水雨を見る。大人に紛れて潜入していたが、これで水雨はれつきとした18歳の女学生だった。スタイルが良く大人びているため変装すれば違和感無いが、ニツと笑みを作る素顔は年相応に若々しい。そんな彼女が所属するのがこの謀忍部隊である。現代の忍にして日本独自の諜報機関。彼女もその一員であり治安維持に携わる者だった。

「これで上からの許可がおりたわ。歓楽街として悪名高い江戸吉原の遊郭。ここにターゲットのデイエゴはいるはず。潜入し所在を確認した上で確実に確保する。——今度こそ」

女上司の硬い声。謀忍たちの表情が引き締まる。

デイエゴ。性別男。年齢は30前後と推定。本名、人種、国籍とも不明。その謎多き人物は突如として現れ裏社会でのし上がり、永続的に作用するというまったく新種の娯楽を武器に万を超す女を傀儡とせしめ、江戸シテイ浄化作戦を幾度となく妨げてきた。

調査に当たった公安および謀忍は数多く。そのいずれもが失敗に終わり無情にも姿を消されていた。

(引退した身である父もこの男を追って最後まで届かなかった。わたしがこの手で捕らえてみせる。日本が誇る古来より続く諜報員、忍のプライドにかけて!)

水雨は奥歯を噛み締め義侠心を燃や

す。先の潜入任務はこのためにこそあった。小物などではなく根元を断つための足掛かりに過ぎない。

腰の重い御上の者からもようやく許可がおりた。司法機関の一員である以上独断専行など許されないが、これで失われた同僚たちの無念も晴らせる。水雨は必ずや成功をと固く心に刻むのだった。

※

——ほぼ時を同じくする頃。

江戸郊外のとあるホテルでは、世に言う悪党どもの密会が行われていた。「嗅ぎ付けたか。意外と遅かったな」バスローブに身を包む男が銀の髪を小さく揺らす。

間もなく手が入る——そう語ったのは窓際に立つ一人の官僚だった。謀忍による内偵。つまりは情報漏洩だ。個人的にはいけ好かないが何かと便利なやつではある。銀髪の男は静かに含み笑いし、渡された対象の写真に目をやった。

「ほう、霧咲の娘か。いい女じゃないか。確かまだ18だったか。ガキの割にいやらしい身体つきをしている」

映っていたのは青く長い髪の女だ。学生服姿と謀忍の姿。共に隠し撮りされたものだ。特に謀忍の姿は尻下からのアングルが絶妙だった。

「いいだろう。たつぷりと教育してやるうじやないか。吉原の遊郭がどんな場所なのかという事を」

いやらしい肉付きの被写体を見て股間に小さな疼きを感じる。

酷薄な笑みを浮かべる銀髪の男。人は彼をデイエゴと呼んでいた。

※

ミーティングから数日の後。吉原の空に夕闇が落ちるのを合図とし、謀忍部隊は行動を開始した。

「B班はバンからバックアップ。麗華と水雨は体内通信をオンにし潜入を開始して」

現場司令からの通信を受け、水雨は一人の同僚と共に乗りつけた車を降り、寂れた遊郭の前に立った。

「了解。これより潜行人動へ移行する」

黒のボディコンワンピース姿の水雨は、ルーージュを引いた唇を動かさずナノマシンによる体内通信を行う。

手筈はこうだ。二人の謀忍が身分を偽り仲介を通して遊郭を訪れ、「ドラッグ代を求めている」という動機で娼婦となるべく面接を受ける。本命は同僚で水雨はアシスト役だった。

(それにしても、こんな服装とは……娼婦志望の女は皆こうなのか)

大腿もあらわなミニスカートは思いのほか動きづらく、露出した胸の谷間が少しばかり落ちて着かない。

水雨とて年頃の女、異性が自分をどう見るかくらいは知っている。93、5889というスリーサイズが男の視線を引くという事も。変装擬態は慣れたものだが女を武器とする所作にはまだ少し抵抗があった。身体はともかく心はやはり十代後半の乙女なのだ。

（集中しろ。任務に私情を挟むなど諷忍としてあるまじき事だ）  
今の自分たちは素行不良の享楽主義者、本職の顔など一片たりとて見せられぬ。

「ここでの水雨は付き添い役である。一人で来るのは怖いとせがまれ能天気についてきた悪友。そういう配役だ。同じく興味を持つ素振りを見せつつ本命が入りこめば撤収する台本だった。同僚が個別で面接室に入り、廊下の長椅子で待つ事しばし。」

息を潜めていたバックアップチームから突如通信が入った。  
「水雨、聞こえる？ 緊急事態よ、麗華の所在が掴めなくなつたわ」

「ッ!? どういう事です、彼女なら隣の部屋に——」

「原因は不明よ、反応が消えたし応答も無し。ジャマーは検知されてないから本人に何かあつたとしか」

音量を抑えているが司令の動揺は強く伝わる。多少のイレギュラーはつきものだがサポートも間に合わない事態なのだ。

「……予定変更よ。あなたが本命となり潜入任務へと移行してちょうだい」

「……了解。潜入役はこれより霧咲水雨に変更」

通信を終え水雨はギリッと奥歯を噛んだ。なぜ。正体が知られたとでも？

まさか。偽装履歴は何年も前から用立て組み上げてきたものだ、たかが数日で足がつく代物ではない。

迷っていても今は意味が無い。万一同僚が撥ねられた場合は自分が代役を務める、元よりサブプランとしてあつた流れだ。  
「あのー、やつぱりワタシも面接受けていいですかー?」

「我が馬鹿っぽいと思える口調で水雨は面接室のドアを叩いた。  
「ワタシもお金ほしいし、クスリ買えるつて聞いたんだけどー?」

「そうかい。ま、君みたいな子の方が人気出そうだしねえ」

顔を出した面接官は無遠慮にじろじろと上から下まで眺めてくる。なるほど、いかにもゴロツキあがりだ。そして下つ端然としたこの仕草もフェイク。

その素顔は筋金入りのマフィアだ。  
「んじやあつちの部屋行つて。面接するから」

別室なのが逆に不安を掻き立てられたが逆らうわけにもいかず従う。  
殺風景な部屋に入ると蝶ネクタイの男がおり、すぐに面接を開始してきた。

「じゃあ早速——ほお、これはこれはいい身体だねえ」

「きやつ、ちょ——え、やつ——!」

「ここまであからさまな面接なのかと水雨は内心竦み上がった。ネクタイの男は無造作と言えるほどに胸と尻に手を這わせてきたのだ。

「大きいねえ、巨乳マニアには涎ものだ。尻もどつしり形もいい。経験は何人? 避妊はする派? しない派?」

「えつと、し、します。この歳で妊娠とかイヤだし、人数は、5人かな、初めてん時はラリつて覚えてなくつて」

水雨は照れ笑いを作り、どうにか設定を口にした。  
（いきなりこれとは、遊郭とはこれが常識なのか?）

耳にはしていたが聞きしに勝る横暴だと感じた。面接と言うよりは品定めだ。人格などよりも女体として商品価値があるか否か、それしか見ていないのだろう。

生憎と水雨は生娘だったが、なぜ選ばれたのかと言え、他の面々は顔が割れているためだ。過去幾度も潜入と失敗が適材不足を招いていた。  
「バストは93の日と。二十歳でこれとは素晴らしいねえ」

男は手触りのみでカップ数まで言い当てる、今度は箱型の機械を操作し、B5サイズほどの金属製のネームプレートを手渡してきた。

「両手でこれ持つて撮影するから。うちの遊郭の登録者としてね」

水雨は「はい」と承諾し、偽造情報に刻まれたプレートを首から紐でさげ胸の前で手に持った。

（まだ面接段階だと言うのに、もうここまでやるのか? 契約したも同じじやないか?）

この写真を見て客は女を選ぶのだろう。源氏名もつけず本名を出すと吉原がいかに腐っているかがよく分かる。偽名でなければ震えてしまつていたやもしれない。

「あの、それでー、雇ってもらえる、んですよねー……?」

兎にも角にも話はそのからだ。愛想笑いを作り訊ねると、男はしれつとした態度でとんでもない事を言いだした。  
「試験はまだ先の話だよ、まずは準備としてヤクを——この薬を肛門に入れてもらおうかな」

男が取り出したのは、市販の風邪薬等で見かけるカプセルタイプの錠剤だった。

「え、肛門って、ええー!」

「平気平気、軽めのヤクだから。キメセクした方が分かりやすいからねえ」

水雨は馬鹿っぽく驚いてみせながらも内心本気で驚いていた。  
その薬には覚えがある。デイエゴのみ製法を知るという新種の娼薬に間違いない。この薬のせいで数々の女が性の奴隷と化し傀儡とされてきたのだ。  
（面接初日から投与だと、く、展開が早すぎる……!）

しかし断るわけにもいかない。薬物使用下での性行為は江戸シテイでは珍しくもなく薬物経験ありと偽造履歴にもあるのだから。

「とはいえ男に肛門を晒すなど一人の女として躊躇は強くある。自分でやるの旨を伝えたが男は首を横に振つた。  
「こつちも仕事なんぞね、ちゃんと入れたの確かめないときあ」

「う、うう、分かり、ました……」

本音は嫌で堪らないが、ここまで来て逃げるわけにもいかず、背を向けミ

ニスカートをあげると、白いショーツをギリギリの位置までスツとさげた。「ほおお、綺麗な尻だねえ。孔もびかびかで、すんすん、いいにおいだ」「やだあ、あ、あんま、見ないでくださいよー……」

(さつきと態度が違う、この男、尻が好みなのか……?)

先程までは事務的に見えたが性的嗜好によるものらしい。男は楽しげな声を出し、尻たぶを両手でむにゅりと掴むと、

(あつ——開かれ、て……入って、く……!)

実に手慣れた手つきでもって錠剤と思しき物を肛門の浅い部分へと挿入してきた。

「よし、じゃあ本試験はまた後日つて事で。今日は店の規則について話とこうかな」

氷雨はすぐさま下着を直すと椅子に座り、落ち着かなさげに尻をもぞもぞと動かした。

(落ち着け、座葉だと思えばなんともない。それより今は5分以内に入目の無い場所へ移動しないと)

「……あのー、ちよつとカレシにコールしてきていいですか? あいつ遅いとすぐキレルんでー」

「へえ、カレシ持ちかい。まあいいよ、早めにね」

「はいー」

もちろん大嘘だ、生まれてこの方男と付き合った事は無い。ここを出て個

室に駆け込むための口実が欲しかっただけだ。

部屋を出ると周囲を確認し記憶しておいたトイレへと向かう。

肛門に投与された媚薬には、ある特徴があった。投薬後、常に軽い発情状態となり感度が増して快楽への耐性が薄れる。この冷める事の無い永続効果こそがもっとも恐ろしい点だ。

そしてもうひとつの特徴、それは、(5分以内に排出すれば無効となる……情報はある、諜忍を舐めるな……!)

実験したのは想定外だが媚薬の登場は想定の内だった。薬が回りきったところで改めて合否を決めるのだろうか、そうはいくものか。

が、しかし、さつとトイレに駆け込んだ氷雨は、思わぬ事態に出くわす事となった。

「え——つと、どうしたんですか?」

体調でも悪いんですか?」

ひとつしかない個室のドアが開いたままとなっており、中では銀髪の女が一人、便器に向けて嘔吐していた。

「……すみません。面接に来てから、急に……」

「つ……大丈夫ですか、背中さすりませね」

黒いスーツ姿なのでスタッフかとも思ったが、違うと聞くと氷雨は無下にはできなかった。

(わたしと同じ? ひよつとして媚薬が……でもこんな症状は聞いてないが……)

被害者であるならば助けたいが生憎と自分も猶予が無い。制限時間は刻々と迫り錠剤が溶け始めている頃だろうか、個室もしくは無人のトイレが適所だったが、よもやこの女の前で排出するわけにもいかない。

(そろそろ3分は経つ、急がねば……こうなつたら多少無理にでも……)

「……ありがとうございます。——霧咲氷雨さん」

と、蹲る女が不意に名前を口にした。

「つ——え、誰それ? ワタシは——」

「霧咲氷雨、18歳。諜忍ナンバー107、埼玉シティ在住、同立附属高等学校在籍中——」

偽装履歴ではなく本物の履歴をすらすらと読み上げていく長い銀髪の女。「ネームプレートに書いてありますよ。はつきりと。——いいえ、表ではなく裏側に」

首からさがるプレートを裏返してみれば、確かにそこには本物の履歴が別で刻み込まれていた。

「B班聞こえますか、罨です、情報が漏れていました——!」

状況を悟った氷雨は慌てて体内通信を試みた。

「……え……聞こえ……いわ……!」

「無駄だ。通信妨害用のナノマシンを錠剤に混ぜてある」

銀髪の女が何事も無かったかのごとく、すつと身を起し正面を向いた。

「意外と呆気なかったな。諜報員とも

あろうものが擬態を疑いもせんとは」

「な、き、貴様は!?」

女がカツラを取ると、肩まで程度の銀色の髪が鈍い光沢を放つて揺れた。あらわとなった浅黒い素肌の顔。伶俐で美しい造作。感情の読みづらい目。若くも壮年にも見える独特の雰囲気。華奢に見えた肉体は、今は鋭い筋肉が現れ女らしさなど微塵も無い。

「アイエゴ。本作戦の最重要ターゲットが目の前に立っていた。」

「女だとはかり……油断、した……!」

「仕草や雰囲気完璧に模倣すれば性別を偽る事も可能だ。人の目など実不確定なものなのさ」

未確認だが、この男は以前どこの諜報員だったとの情報もある。常軌を逸する擬態能力はその技の一端なのか。……まさかアイエゴ本人が出てくるとは。ならばこの場で取り押さえるまで!」

氷雨は胸の動揺を押さえつけ、ボディコンワンピースを片手で裂くようにぱつと脱ぎ捨てた。

「アクティベーション・モードSHINOBI!」

燐光があらわな肢体を覆い瞬きの間に青い諜忍装束へと変化した。忍術ではない。ナノマシン技術による戦闘用のボディスーツだ。体内通信と同様近代技術を得た現代の忍の姿だった。(時間はまだ少しある。拘束は無理でも脳さえ確保できれば組織の全容を洗い出せる!)

擬態能力がその身を秘してきたのだろうが、見えてしまえばそれまでだ。謀忍装束は身体能力を劇的に高める。戦技においても劣るとは思えない。ただの一撃でケリはつく。

氷雨はしかし、必殺の踏みこみを行う寸前に、

「つ、か——はあ……な、に……!?」

刀を抜きながらガクンと膝を折り、太腿と腰を小さく震わせた。

「あ、あ——熱、い……急に腰が、尻の奥、が……!」

出所不明な違和感が肛門を中心にじんわりと腸を侵食していく。力が抜けた膝が立たず心臓が強く音立て始める。「甘かったな。大方5分以内にはひり出せば良いとでも考えたのだろうが」

「ダイエゴが革靴を鳴らして歩み寄り、乳房をむんずと掴んできた。」

「はうあつ!? 胸も、熱い、はう、ああつ……!」

「こ丁寧にも乳首には装甲があるか。だが無駄だ、俺には分かる。スーツの内側でぶつくりと膨らんでいくお前の乳首の形が」

真正面でも直立したままダイエゴは軽く腕を伸ばし、豊かな乳房を掌の上で転がすようにして弄ぶ。

「はうああつ、く……まさか、葉、を……!」

「改良したのさ。より短時間で効果が出るようにな。もつとも、少々効き目が強すぎるようだ」

乳房の先端にある装甲を避け、親指

がぐりぐりと乳輪の外側をまさぐる。「はう、はあうつ、乳房が、あはうッ……!」

「まあ、鍛え抜かれた謀忍ならば問題はあるまい。葉が回りきったところでたつぷりと身体に教え込んでやるとしよう」

ダイエゴは乳房を掴んだまま膝を突き、動けぬ氷雨の細い首筋に唇を押し当てた。

「はあつ、な、にを……!」  
口元を覆う覆面の奥で氷雨は熱く吐息した。

男の犬歯が薄布越しに柔肌を甘噛みする。痛みは無いが鋭い何かがつブリと肌に突き刺さるのが分かる。

すぐさま訪れる強烈な睡魔。麻酔針の類を歯に仕込んであったのか。

理解したとて時すでに遅く、氷雨は忍刀を落とし、ガクリと男の胸にくずおれた。

※

——その夜。

法の目の行き届かぬ江戸吉原の最深部では、広大な地下アリーナにて、大勢の観客らがひしめき合っていた。

「ようこそ。この混沌に満ちた不夜城に生きるお客人たち」

堂々たる竹まいでアリーナの中央に歩み出たのは、今や江戸シテイの支配者として目される男、ダイエゴ。

「今夜お集りいただいた方々には、ちよつとしたショーをお披露目したく思います。——江戸の治安浄化に努める

日本が太古から誇る勇士、その一人謀忍、霧咲氷雨です」

ダイエゴが手をかざした先、薄暗がりには眩いライトスポットが当たる。そこに立っていたのは。

白い肌のほとんどがあらわな水着姿の氷雨だった。

「色つべえ女だな!」「乳でけえ!」「キツそうな顔がたまんねえぜ!」「謀忍つてあれか、噂の公安の犬か!」「捕まったのか、いい気味だぜ!」

客といつても大半は重犯罪者、まともな声援など望むべくもない。口笛混じりに飛び交う歓声は文字通りゴロツキのそれだった。

「く、下種どもが! こんな連中に見せ物にされる日が来るとは……」

胸と陰部を手で押さえながら氷雨は屈辱に歯噛みする。

今の彼女は実に破廉恥な姿をしていた。水着と銘打つも面積はごく僅かに過ぎず、局部と乳首程度しか隠せるはずもないビキニだ。白い布地はともすれば肌が透けかねず、少しでも激しい動きをすれば確実にずれて中身が露出する。両手両足にはロンググローブとニーハイストッキング、ハイヒールを履き首には襟付きチヨーカーと、水着としての意図が無い事は明らかで、なおさらに淫らだった。

「結局無様に捕まった挙句、犯罪者どもに顔を……く、忍の名折れた……」

このアリーナの存在すら知らなかった。謀報員としても失格だ。

（しかし、これも任務の内……本来なら麗華が潜り込み辱めを受けたのだ、わたしとて耐えてみせなければ!）

かくなる上は仲間を信じ救助と反撃の機会を待つのみ。己が身に起きる恥辱に構え、自制を試みる氷雨。

だが、ダイエゴに胸を軽く掴まれ揺すられた途端「あつ」と小さく呻いてしまっていた。

「この女は娼婦となるべく吉原を訪れました。政府お抱えの謀報員が自ら色を売りにきたのです」

それを聞いた観衆たちはドツと笑い声をあげた。

「しかしまだ見習い、男のなんたるかも知りません。そう、この女は処女なのです」

「膜つきが娼婦志願かよ!」「とんでもねえビッチだぜ!」「きつとエロいカラダ持て余してんだぜ!」

（おのれ、好き勝手ばかり……!）

清き己が身をこのような形で嘲られるとは思ってもおらず、氷雨は再び屈辱に歯噛みする。

もつともそれは長くは続かない。水着から溢れた乳房を握ねられたぶたぶと揺すり弄ばれるたび、得も言われぬ官能が肌にじわじわと浸透していく。

「く、はあ……離せ、うう……」

「強がっても無駄だ。あれから三日、とうに媚薬は回りきっている。効果が失せんのは知っているだろうに」

そう、氷雨の肉体は今や媚薬に完全に侵されていた。排出できぬまま昏倒

し囚われた末の現在だった。

あの投葉から、はや70時間以上。肌はすっかり鋭敏となり、絶えず欲情し軽い酩酊状態に近くなっていた。

「この三日間どれほど疼きに苛まれたか？ 慰めはしたか？ 何度この乳房を弄った？」

「黙れ、弄ってなど……黙れ……！」

猫の喉でもくすぐるように指は乳房を下から撫で回す。たっぷりとした色白の脂肪がぶるぶると小気味良く下から柔らかな波を打つ。

「柔らかい乳袋だ、実に日本人らしい。サイズは日本人離れしているがな。俺の手ですら掴みきれん、まるでメロンかスイカだ」

「はうあ、く、おのれ……っ！」

たかがその程度の刺激にすら身体が反応し声が出てしまう。

快樂に自由を縛られながらも氷雨は拳打を放とうとした。

次の瞬間、首のチョーカーがバチバチと青白い電撃を放つ。

「ぐあっ！ く、こんな小細工まで……！」

「抵抗は無駄だと言ったはずだ。俺の意志ひとつで起動する仕掛けだ。お前の身体しか通さん特殊な電流だ、俺を巻き込もうとしても無意味だ」

「デイエゴは感情を見せずに言う、背後に移動し、今度は乳房を両手で下から掬い上げた。」

「あつ、やめろ……揺するな、持ち上げるな、こんな程度で、ああそんな

……！」

「ご覧下さい、この反応を。処女でありながらこうも感じる。娼葉があつたとてこれは珍しい。手に余るほどの巨大な乳袋は、感度も並外れて抜群のようです」

他とは異なる娼葉である点をあえて伏せてデイエゴは辱めてくる。

「今宵は皆様の目の前で、この女の教育を行いたく思います。娼婦とはどういふものか、どれほどの恥辱とどれほどの快樂を得るものなのかを」

男にしては整った指が、今度は胸の先端に伸び、布越しにくりくりと円運動にて撫で擦ってくる。

「あつ、はうあ、やめ……そこ、はあ……っ！」

「勃起しているな。俺には分かるぞ、乳輪ごと膨れ上がつてぶっくりと先端が尖っていくのがな」

男の指は想像を遙かに上回る技で、焦らしながら乳輪部を責め弱い先端部を定期的に引っかけてくる。

「はううっ、せ、先端を、爪でえ……やめろ、これ以上、こするなあ……っ」

「肩が震えているぞ。腰もだ。乳袋だけでこの反応とは、この三日間ろくに慰めてこなかったな？」

男の言う通りであった。娼葉にやられ疼きに苛まれ続けてきたが、心折れまいとじっと耐えてきたのだ。

（でも、だからこそ逆に……ああ、感じてしまう。しつこく乳首責められると、熱くて、痺れて、だんだん切なく

なつてきて……！）

もつと強い刺激というものを心より身体が求め始める。むき出しの乳肌をまさぐられるのは例えようもなく快く先端はなお敏感がゆえに布越しであるのがもどかしくなってくる。

「はあ、はあ、ひうっ……くう……」「そろそろ物足りなくなつたらう？ では——」

胸の突起を弄ぶ指が、ごく小さな三角布を数センチほどだけ横にずらした。「ああやめろ、せめて布は、はううっ……あああ、触る、なあっ……！」

「ほう、美しい桃色だ。やはり生娘、小さくくすみの無い乳首だ」

先端をもあらわにされた練乳のごとき白い爆乳は、圧巻と言うべき量感を持ちつつ手指の中で柔らかに形を変え揺れ動いた。

男はその先端の桃色を、指で転がし見せつけるように軽く爪弾く。

「はうっ！ ああだめ、そ、そんなことお……！」

「自分で見てみる、このはしたなく勃起した乳首を。感度があがるうと反応や仕草までは変えられん。この勃起具合は間違い無くお前自身のものだ」

「うるさい、はあはあ、大して勃起などしていない、これが普通っ——はうあ！ 先っぽ摘ん——はひい！」

小指の先ほどの桃色ニブルが同時に摘まれ前方に引き延ばされた。

氷雨は早々に耐えきれなくなり、くびれ腰ごと尻房を揺する。

「離せっ、こ、これ以上はあつ——ぎやんっ!? ぐう首い……！」

またしても電撃が首を襲い、放とうとした肘鉄が止まる。

「まだ抗うか、なかなかのじゃや馬だ。では——ここならどうかかな？」

「あつ、そこはあ!?」

デイエゴの指が狙いを変更し、背後から太腿の付け根をまさぐる。

「すでに濡れているようだな。股の布がべったりと肌に張り付くぞ」

「はあはあ、うる、さいっ……濡れてなど、いな……っ！」

「そうか。では濡らしておかねばな。でなければ後が辛いぞ？」

「うるさい、はうあつ、はう、かひい……！」

氷雨は逃れようとしたが、すでに力が入らなかつた。乳房への官能は思う以上に神経を緩ませ、うっすらと汗の浮く豊かな尻たぶを小さく揺するだけに留めた。

その尻房をまさぐるようにして谷間の辺りで手首がうねり、背後から股の下をくぐり、指が局部をずりずりと撫で擦る。

「はあ、ああ、よせ、はうあ痺れるう……！」

（か、感じる、少しの間触っただけですぐにアクメ、来そうッ……！）

無自覚に腰をヒクつかせながら氷雨は早くも息を弾ませる。下種な連中の視線の中はまさに鋭利な針の筈。だといふのに身体は燃えあがり自制を離れ

て昂<sup>たかぶ</sup>っていく。自慰の時より何倍も早く官能の頂へと昇っていく。

「こんな事ならひとりエッチ、しておけば良かった……だめ気持ちいい、こいつの指わたしより上手いっ……」

ヒクつく局部の反応を見るように緩急をつけて指は撫で擦る。布が湿って肌張り付くのが今では自分ではつきり分かる。懸命に力む両脚は閉じんとするのか、倒れまいとするのか、快感が強くてよく分からない。

「気づけば水雨は唇を半開きとし、目をさげ白い頬を紅潮させていた。」

「どうした、息が荒いぞ。よもや、もうイキそうなのか？」

「はあはあ、誰が、イク、もの、かあ……っ！」

（だめだ、本当はもうイキそう、頼む許して……！）

新種の媚薬の恐ろしさというものを骨身に染みて理解したと思った。こんな勢いで昂ってしまったては間違だろうと堪ったものではない。

「そうか。ではまだまだ耐えられるという事だな？」

しかも抵抗は裏目に出てしまった。背後のデイエゴが屈みこんで尻を割るように舌を這わせたきたのだ。

「はうあッはうあア!? 何をする、舌など、やめつ、舐めるな、あひッ！」

「見ろよあの女、マンコ舐められただけで腰砕けになってやがるぜ！」

嘲弄と共に再びドツと笑いが起こる。水雨は睨みつける余裕も無く身体をく

の字にして内股になった。布越しにマッ筋を舐められ続け尻の孔まで鼻でつつかれ、文字通り腰砕け寸前まで追い詰められる。

（舐められるだけで、こ、こんなにも感じるなんてっ！ 媚薬もすごいが、この男も上手すぎるっ！）

またひとつ理解したのはこの男が性技の達人である事だ。ごく一般的行為ですら常人の技など比較にならない。強すぎず緩すぎず、遅すぎず速すぎず、それでいて変化に富むクンニに、膈はたちまち痙攣し始め白い布地にくすんだ濡れ色を広げていった。

「ジュルックチュ——さあ足を開け、ご覧になる客人方に破廉恥な己を披露するのだ」

細身な割に逞しい腕が前屈みの両脚をぐいと左右に開かせる。

「もうびしょ濡れだぜあの女！」「布が白いからくつきりマン筋浮き出てやがるぜ！」「ちったあ耐えやがれ課忍さんよお！」

「はあはあ、み、見るな、見ないでえ……えっ！」

アリーナの各所には大型モニタがあり、カメラが捉えた局部の映像をご丁寧にもどんと映し出していた。

恥辱と屈辱に水雨は本気で涙ぐみそうになる。よもやこれほどとは。男一人に犯されるだけでも心の負担は相当だろうが、いきなりこれでは泣き叫びたくもなろうというもの。

しかしこれだけで済むはずは無かつ

た。ついに膝を突くこちらの頬にデイエゴのペニスが堂々と押しつけられたのだ。

「はあ、はあ、こ……これは、ペニス……お、大きい……！」

さして大柄でないにもかかわらず男の性器は想像以上に太く、長い。特別な形状でこそないものの日本人の平均よりは明らかに上に思えた。

デイエゴはそれを唇に押しつけ酷薄な目で見下ろしてくる。

「舐めろ。娼婦としての初歩だ。こなせなければ廃棄されて終わりだ」

そう言われると水雨は反抗の理由を失う。このまま任務失敗となればこれまでの内偵すべてが無に帰す。今までに何度、一から出直す羽目になったか。払った犠牲も数多く、それを思えば無理にでも食らいつくほか選べる道は無かった。

「っ……は……むっ……ちゅ、ちゅ……」

今は耐え忍ぶ以外に無い。そう己を論じ、屈辱に震えつつ小さくだが舌を這わせる。

「もつと動かせ。俺がやってみせたようにしっかりと舐めてみせろ」

「ん、く、は……はい……ちゅくつ、ちゅ、れる、ちゅ……」

塩気にも似た独特の苦みが舌を通じて口に広がる。汗ばみながら睨みつけ小さくだが連続して舌を動かす。

（なんだこれは……なぜ? グロテスクで臭いの、言うほど……嫌じゃな

い。舌がびりびりしてきて、におい嗅ぐと、頭の芯がくらくらと……）

決して美味ではないというのに舐めれば舐めるほど馴染んでいく自分に驚く。特ににおいは強烈で鼻につくも自分のそれとは大きく異なり不思議に劣情と興奮を煽る。

これが男の味とでもいうのか——ふとそう思った刹那、熱く茹<sup>ゆ</sup>った下腹の奥に、きゅんと小さなわななきを覚え

た。

「無知だが飲みこみは早いな。上出来だ。だが……」

デイエゴは目を細め薄く笑うと、水雨の頭をわし掴みにし、口目がけてずんとペニスを打ちこんできた。

「んほおおッ!」

「この程度では客は飽きる。もつと激しく、もつと深く、舌を絡ませ頬と喉を擦り付ける」

（く、この男っ——！）

耳にはしていたがこれがイラマチオという行為か。なんと横暴で傲慢なブレイか。女の口をなんだと思っている。そうは言っても今の自分は従う以外に選択肢は無い。反抗の手立ては無く任務にも反するのだから。

それに何よりも、これまで以上の牡臭さが鼻腔と口蓋に沁みてきて、

（頭が、目が、くらくらしてきて……身体が熱い、このにおい、この苦み、なぜだかだんだんとクセになってきて……疼く、身体の芯が、先程以上に強

く……！）



又…ウウ！  
 これがっ  
 銀河特捜の  
 スーツか!?

数々の  
 テロ活動も  
 ここ  
 まだよ！

手配犯  
 ガルド星人  
 デイロ！  
 手加減  
 モード

気高い美貌を放つ女捜査官と  
 陰謀の魔手が迫る！

とじめツツ!!

銀河連邦  
捜査官一級

ヴァネッサ  
ノイン

犯人を確保し  
たどいま帰還  
いたしました

ご苦労  
ノイン捜査官  
次の任務に  
当たってくれ

は！  
長官殿

緊急の  
案件ですか？

惑星ムトを  
知ってるな？

ウム

★ばふえ先生の人気作『獣欲の花嫁たち』の  
電子書籍版が無料でダウンロードできるぞ！  
詳細は表紙の裏ページにて。

墮とされた銀河連邦捜査官

# 四人慰安婦ヴァネッサ

漫画 ばふえ  
COMIC

凶悪犯罪者を  
収監している  
高重力惑星

民間企業の  
所有星で

銀河連邦には  
属してませんが  
一応関係は  
良好かと

だがしかし  
黒い噂が  
絶えない

職員が錯乱  
する事件が  
多発したり

囚人の自殺  
及び不審死  
乱闘事件も  
かなり多く

出所後  
行方不明に  
なっている  
者も多い

そのわりには  
脱獄事件・  
暴動の類が  
ゼロである

あからさまに  
怪しいですね



この監獄惑星の管理体制に何か問題がありますか？

そんなわけないでしょう

社会復帰の為労働をさせておりますが

皆自分の意志です

逮捕された説明を願おう

それではハミル捜査官がここを訪れて

ほう

ああ  
その人なら  
違法薬物所持で  
現行犯逮捕  
いたしました

何!?

不当逮捕ではありません

罪を認めると  
供述書にサインも  
あります

罪を悔いて  
皆と共に  
労働を  
しております

丁度仕事中なので  
様子を見ましょう

彼らが待遇に  
満足できるよう  
もてなすのが  
囚人番号765の  
仕事ですよ

八八ツ  
見事な働き  
っぷりですな

囚人たちには  
人に言えない仕事を  
手伝わせています





そんな物を  
持ち出しても  
ムダムダ

囚人の首を  
見るがいい



脱獄防止の  
爆弾よ

もし貴官が  
ここで暴れて

コンピュータが  
誤作動しないと  
いいなア



ク…ッ

はははは

銀河連邦  
捜査官も

頭に血が  
登っては  
大したこと  
ないわ

私の  
ここでの仕事は

ストレスの  
溜まった  
囚人たちを

慰める  
ことだ

この首輪は  
罪を悔いて  
勤めた分

目標額まで  
貯まれば

外れる仕組みに  
なっている

こんな最低の  
仕事をさせる  
だなんて

私は銀河連邦  
捜査官一級を  
務めた女だぞ

何が罪だ！  
この蛙野郎

お前たち  
二人の罪は  
ざっと100万って  
とこだ

ふざけ…  
るなああ

女の尊厳を  
踏みにじる  
グスの所業  
だが…

ここから  
出るためには  
我慢なくては

ならない  
のか…!!

囚人番号024  
またコイツか

フビヒ  
またムラツと  
きちまった

ヌイテ  
くれや

こんなこと  
好きでしてる  
わけではない  
んだぞ!!

コイツは日に  
34回は来る  
"お得意様"だ

風俗女扱い  
するな!

教えた挨拶  
しろってんだ  
学習しねえ  
女だな!

まやん

ヴァネッサを  
お買いください

あ……りがとう  
ございま……す

わ私の  
お……お……  
お口まんこ  
……に……

くっさい  
ザーメン  
どぴゅどぴゅ  
……出して……

スッキリ  
してくれ……  
ください

……

# 聖装衣姫

# レイファリオン

主演 小○遊 怜

聖なるコスチュームぶっかけ輪姦！  
正義の変身ヒロイン恥辱のAVデビュー！



★黒井弘騎先生の人気作『新装版 聖天使ユミエル』の電子書籍版が無料でダウンロードできるぞ！  
詳細は表紙の裏ページにて。

小説 / **黒井弘騎** くろいひろき 挿絵 / **緋山狐** あけやまきつね  
NOVEL ILLUSTRATION

「う、うわあー！ 助けてくれー！」  
「怪人だ！ ゼクスマキナの狂改人が  
また暴れてるぞー！」

日も落ちた夜の街。繁華街は、人々の  
悲鳴で溢れかえっていた。

平和な日常を破壊するべく、突如現  
れる謎の怪物。世界転覆を目論む狂科  
学帝国ゼクスマキナによって作り出さ  
れた生体兵器——世間を逸脱した重犯  
罪者をベースに、冒瀆的な狂科学テク  
ノロジーによって肉體改造を施された  
新たな人間、すなわち狂改人だ。

現代の常識を逸脱した狂科学の産物  
である怪人には、通常兵器などまるで  
通じない。警察や警備部隊が応戦する  
も、銃弾はすべて弾かれ、触手の一振  
りで車両は軽々と吹き飛ばされる。

「愚かな人間どもめ！ ゼクスマキナ  
の狂科学に震えるがいい、お前達は  
我々の玩具に過ぎないのだグハハ！」

「い、いやあ！ 助けて。誰かあ！」  
勝ち誇った怪人の声に、黄色い悲鳴  
が折り重なる。頭足類と人間とが混じ  
り合ったようなおぞましい怪人が、若  
い女学生をその触手で捕らえていた。  
そこだけは生前のままの、狂った欲望  
に燃える犯罪者の眼球が、若い肢體を  
いやらしく睨めつける。

「女ア！ この場で俺の慰みモノにし  
てやる！ 公衆の面前で犯される恥辱  
と屈辱、たっぷり味わうがいい！」

「ひ、や、いや……ああ……！」  
無数の触手が、少女の身体に迫る  
——その、瞬間。

「待ちなさい！ ゼクスマキナの狂改  
人！」

高層ビルから夜の街へと響き渡る、  
高らかな美声。それは揺るぎない意志  
と正義に燃える、凛と研ぎ澄まされた  
少女の声だった。

「ぬっ!? いいところで邪魔をしおつ  
て……また貴様か！」

「ああ、あ、あれは……！」「やつ  
た……来てくれた。俺達を助けに来て  
くれたんだ！」

忌々しげな怪人の声と、期待に満ち  
た人々の声。

まるで正反対の感情を込めた、彼ら  
の視線の先にあるものは——  
「心に燃える正義の炎！ 纏うは聖な  
るコスチューム！」

ビシィッ！

ビルの屋上で高らかに叫び、月をパ  
ツクに凛々しくポーズを決めてみせる。  
金色の長髪が風になびき、艶やかなグ  
ローブに包まれた細指が、見るもしな  
やかなラインを描いてポーズを決める。  
「聖装姫レイファリオン！ ここに参  
上ッ!!」

高らかに自らの名を宣告し、ビルの  
屋上から飛び降りるレイファリオン。  
白銀のボディスーツに包まれたスタイ  
ル抜群の肢體が、見惚れるほどの艶や  
かさで躍動する。重力に逆らいぶるん  
っ！ と大きく揺れるたわわな美乳は、  
Eカップは下るまい。密着スーツの華  
麗なアクセントになっている黒い半透  
明の胸生地を、パンパンに押し上げて

瑞々しい肉感を誇張する。たわわに熟  
れた巨美乳は、着地とともにまた大き  
く震えて見るものの目を釘付けにした。  
ハイレグレオタードから覗く美脚は艶  
やかなニーソックスに締め上げられ、  
瑞々しい肉感をいっそう強調して見せ  
つけている。無骨なレガースが地面を  
踏みしめれば、豊かに張り詰めた太も  
もがむっちりとして躍動した。

「愛と平和を守るため、命を賭けて戦  
います！」

再びビシィッ！ とポーズを決め、  
高らかに宣告する聖装姫。密着スー  
ツ越しでも生意気そうに盛り上がった胸  
胸を誇らしげに張り、肉感的な両足に  
ぐっと力を込めて、グローブに包まれ

た指先で可憐なポーズを決めてみせる。  
見事なプロンドが目を引く美貌は大人  
びてクールだが、怜悯な理性の中にも  
熱い正義感と揺るがぬ使命感を感じさ  
せるものだった。

「レイファリオン……」「正義のヒロ  
イン……レイファリオンだー！」

華麗なパフォーマンスに見とれてい  
た人々が、わあっ！ と喝采をあげる。

これまでの恐怖と絶望から一転し、希  
望の化身を前にした市民は、安堵と希  
望を見出していった。

「みなさん！ 安心してください……  
レイファリオンが来たからには、もう  
大丈夫ですからね！」

人々を安堵させるべく、その声に応  
えてみせるレイファリオン。クールな  
中にも優しさを感じさせる少女の微笑

みは、人々の心を希望で照らす。  
そして——それ以上に、人々は理解  
していた。

この少女は——正体こそ謎に満ちて  
いるが、紛れもなく言葉通りの救世主。  
ゼクスマキナの暴虐に為す術なく怯  
えるしかなかった人々の前に、突如現  
れた少女戦士。彼女はその口上通り、  
愛と平和を守るため、命を賭けて怪人  
達と戦ってくれる正義のヒロイン。

これまでも街を守るため、あるいは  
無辜の市民を守るため、数え切れない  
ほどの戦いを繰り広げ、そして勝ち抜  
いてきた、守ってくれた。

聖装姫レイファリオン——彼女こそ  
は人々の最後の希望にして、最も敬愛  
される正義の戦士。その実績と信頼感、  
そして人氣は、絶大だった。

「聖装姫レイファリオン……またして  
も我らの邪魔をするつもりか！」

喝采の中、ただ一人別の感情を抱く  
者が、忌まわしげにその名を呼ぶ。

レイファリオンは油断なく構え直し、  
怪人のほうに向き直った。

「人の心を失い、邪悪に身を棄した狂  
改人！ これ以上の凶行は、レイファ  
リオンが許しません！」

「黙れ小娘！ せつかくのお楽しみみの  
邪魔をするなら……グヒヒ！ 貴様か  
ら犯し殺してやるぜ！」

危険な空気が膨れ上がり、緊張が爆  
発する。雄叫びをあげ、少女戦士に襲  
いかかる生体兵器。触れただけで周囲  
の建造物を破壊し、あるいは瓦礫を跳

ね上げながら、無数の触手が迫る。

「ふっ！」

対するレイファリオンは、至って冷静だった。短く呼吸を吐き、鋭い瞳で敵の動きを観察する。

一撃でも受ければ、少女の華奢な肢体などバラバラにされてしまうだろう。恐るべき暴威を前にしても冷静さを失わない、そのクールさは機械のようだ。

だが、人々は知っている——彼女の心の中には、熱く滾る正義の炎が燃えていることを！

「……見切りました！」

瞬間。迫り来る怪物に、少女戦士は逃げることなく、自ら触手の間合いへと踏み込んだ。しなやかな美脚に渾身の力が込められ、ニーソックスに締め上げられた太ももがむっちりと肉感豊かに躍動する。真上から振り落とされる触手の一撃を、艶やかなグローブに包まれた手指の一振りで跳ね除け、さらに迫る触手をブーツで踏みつけ一蹴。それを踏み台にして軽やかに跳躍し、ブロードロングを翻して宙に舞う。

「ぬ、ぬおっ!? 馬鹿な……!?!」

「言つたはずですよ。貴方の動きは、すべて見切っています！」

触手を踏み台にしての華麗なジャンプで、一気に間合いを詰めるレイファリオン。そこから落下の勢いを乗せて急降下の必殺キックを喰らわせる！

「いきます！ シューティングインパルス！」

キインツ——ズガアアアアア！

音速を超える必殺の急降下キックが、怪人の巨体を貫いた。聖なるエネルギーを全開にしたブーツが怪人の巨体をブチ破り、そのまま貫通して地面へと突き刺さる。

「——フィンニッシュユ！」

「ぐ、ぐがああああああああ！」

断末魔の叫びとともに、爆散する狂改人。同時にクラブとブーツが機械的に展開し、排熱のために素足を晒す。

「この世に悪の栄えた試しなし！ 人々の愛と平和は、レイファリオンが守つてみせます！」

「ピシィッ！」と勝利のポーズを決め、人々に微笑みかける正義のヒロイン。

「わあああ、と人々の間で喝采が上がり、天使を称える歓声が木霊する。」

「ありがどうレイファリオン！ 助かったよ！」「街の平和のために戦つてくれてありがどう！」

「……はいっ！」

緊張と絶望から解放され、人々の顔にも笑顔が戻る。それを認めてから、正義の救い主はビル谷間へと跳躍し、その場を後にする。

「ああ……やつぱりカッコいいなあ、レイファリオンは……」

「素敵……レイファリオン様……」

クールなビジュアルに燃えるハート。目を奪われるほどに華麗な戦いぶりと、人々を安堵させる優しい微笑み。

そして何より——天使のように美しい美貌に、フェティッシュな密着スリーブで誇張された抜群のボディスタイル。

聖装姫レイファリオンは、人々にとつて真の救世主であり、それ以上に理想のヒロインなのだ。

※ ※ ※

「見たかよ昨日のニュース！ またレイファリオンが活躍したらいいぜ!?!」

「ああ。やつぱりすごいよなレイファリオン……めちゃくちゃ可愛いしカッコいいし。大好きだあ！」

翌日の名和学園。放課後の教室で談笑する学生達。その話題の中心は、昨日のレイファリオンの活躍だ。

「実は俺あの時現場にいたんだぜ？ ほら、生写真売つてやろうか?」

「な!? お前するいぞ、よこせ！」

正体不明の美しき正義のヒロイン。その華麗な活躍も、クールな美貌も、熱い正義感も、すべてが若者達を魅了してやまない。男子達の話題がレイファリオン一色になるのも、無理なからぬことだった。

「…………………」

そんな談笑の輪に入ることなく、一人教室の隅で机に座つたままの少女がいた。

つまらなさそうに男子達に視線をやり、すぐに臥せる。飾り気のない黒いロングヘアに、端正に整つたクールな美貌。異性どころか同性にさえもとはやされそうな美少女だが、年相応とは思えない落ち着いた態度が、近づき難い雰囲気を感じさせている。

少女の名は小鳥遊伶。学年でもトップクラスの美貌と成績を誇る美少女だが、学園で誰かとつるむことは皆無。社交性がないわけではないが、常に必要最低限しか他人と関わりを持つとしない。クールな麗姿と大人びて理知的な雰囲気から人気はあるものの、他人との間に引いた城壁には誰も近づくことを許さない、まさに高嶺の花、孤高の美少女だ。

「……………」

クラスの誰も、伶の本心を知らない。伶もまた、知られまいと隠し続ける。なぜなら、小鳥遊伶の正体は——

（ううっ……は、恥ずかしい！ わたしつたら、また調子に乗りすぎちゃつて……ま、またあんなに噂になつてしまつているじゃない。褒められるのは嬉しいけど、照れるわね……）

クールな素振りを感じながら、内心では舞い上がつてしまつている伶。教科書を持つ手は、実は汗でべつとりだ。

「いや、しかし生のレイファリオンはカッコよかつたなあ! 『愛と平和を守るため、命を賭けて戦います!』つてあの決め台詞と決めポーズ、直接見ると感動したぜ!」

（きやー! 言わないでそんなこと! そ、そりやわたしが一生懸命考えた決めポーズだけ……そんなに褒められたら、は、恥ずかしいすぎるわ!）

興味なさげに振る舞いながら、聞き耳を立てるのはやめられない。人々の喝采は嬉しいし誇らしいが、こうして身近な男子に言われるのは恥ずかしくてたまらない。

そう。彼女こそ、正体不明の正義のヒロイン。小鳥遊怜は、聖装姫レイファリオンの正体なのだ。

（うう……正義のヒロインとして活躍するのはわたしの夢だったし……愛と平和を守る戦いは、苦しいこともあるけどやりがいも感じてる。華麗なパフォーマンスだって正義のヒロインとしては必要……みんなに夢と勇気を与えるのも、聖装姫の役目だもの。それはわかっているつもりだけど……！）

「それによ！ 間近で見るとレイファリオンってめちゃくちゃ可愛いんだよ！クールでカッコいいのに、ちよつとコスはエロくて……へへ。ぴちぴちスーツでムツムチなんだよ、特にあの絶対領域！ いや、眼福だったぜ！ 生忘れねーぜ！」

（やつ……言わないで、そんなこと！）

バツと教科書で顔を覆い、咄嗟に隠す。誰にも見せられないその素顔は、ゆでダコみたいに真っ赤になってしまっていた。

（あのコスチュームは……聖装は、すつごく大事なもののな！ わたしの心に呼応して、最適な形状をとる……！）

レイファリオンは、わたしの理想の正義のヒロインの姿なの！ そ、そりゃ……ちよつとセクシーすぎじゃない？ っと思うこともあるけど……）

誰に聞かせるでもなく、必死に言い訳してしまふ。

怜がレイファリオンになったのは、まさに運命だった。

現代の常識を超えた超科学の産物である「聖装」——自ら所有者を選び、その心に呼応し無限の力を与える神のシステム。数奇な運命に選ばれ、怜は偶然にそれを手にする。

もともと正義感が強く、ゼクスマキナの凶行に怒りを覚えていた怜だ。クールな知性に秘められた燃えるハートが、休眠状態の聖装を起動させた。

こうして怜は、人々を救い、愛と平和を守るために戦う理想のヒロイン——聖装姫レイファリオンとなったのだ。

ゼクスマキナの狂科学に唯一立ち向かえる力を手に入れた怜は、以来正体を隠し、悪の組織と戦い続けている。正義のヒロインとしての華美なパフォーマンスも、怯える人々を癒やし、救うためのもの。事実レイファリオンの存在により人々は希望を見出し、明るい笑顔を取り戻している。

それは怜も望むところなのだが——「ああ、羨ましいなあ本当。生でレイファリオンの活躍見られるなんて俺も見たかったら〜！」

「ああ！ おっぱいぶるんぶるん播すって戦うレイファリオンめっちゃエロカッコよかったぜ！」

「……っ！」

パンツ！ いつでも変身できるように聖装を詰め込んでいる大きなバッグを机に叩きつけ、怜は立ち上がった。突然の出来事に、教室が静かになる。

「た、小鳥遊さん……どうかした？」

「さ、騒ぎすぎたかな？ で、でもも

う教室誰もいないし……あ、勉強の邪魔しちゃった？」

「……………いえ。別に」

言葉少なに応え、再び着席する怜。物静かでミスティアスな美少女が見せた突然の剣幕に、男子達は戦々恐々だ。（……ああ、やつちゃった。みんながこうして明るく笑いあえる日常のために、わたしはレイファリオンになったのに……ダメね、わたしったら）

怜は生真面目で使命感の強い少女だ。恐るべき悪の帝国と戦うのに、生半端な覚悟で挑んではいけない。

「愛と平和を守るため、命を賭けて戦います」——生懸命考えたキメ台詞だって、偽らざる本心だ。

だけど、レイファリオンの人気は怜の思う以上にあがりすぎてしまっており……そして何より、怜はこうしてもはややされるのが大の苦手。クールを気取っているのも、実は人付き合いが苦手で内気だからなのだ。

ニュースで取り上げられる程度ならいいが、こうして同年代の学生達に話題にされ、しかも男子からは性的な目で見られてもいるとなれば、もう恥ずかしくて消え入りたくなってしまう。

かといって正体を明かすわけにもいかず、やめろということもできない——だから怜は毎日、こうして一人で悶々とする他ないのだった。

そして、目下一番の懸念は——「はあく、いいなあ本物のレイファリオンちゃんに会えて。俺は結局……こ

いつしかねーんだよな」

「お？ 何それ、新作の企画モノ？ 貸してくれよ！」

「うるせーよ、お前は本物の画像オカズにしてればいいだろ。俺らはこんなAV使っしかねーんだよ！」

一度は静かになったものの、先程の男子達がまた騒ぎ出す。

その話題の中心は、年頃の若者にはつきものの猥談——憧れのヒロインであるレイファリオンをネタにした、パロディAVについてだった。

「まー本物には劣るけど……案外いいぜ？ 今回は触手の特撮も頑張ったし、生ハメマジイキだし」

「あく、本物はカッコいいし可愛いけど、強すぎて全然負けねーからな。エロピンチはヒロインの華だからな、その辺はこのAV監督わかっているよな」

「へへ……本物のレイファリオンがこうやって怪人にやられたら……やべっ、想像しただけで勃起しちゃうぜ。ムラムラしてきた……」

「お前やめろよ！ お、俺も昨日の思い出して……ああ、あのぴちりスーツにぶっつけてえなあ」

「……っ！ っ！ っ！ っ！ っ！」

再びカバンを叩きつけそうになるも、それ以上の恥ずかしさで手が震えて動かない。怜は耳まで真っ赤にして、その場でブルブルと震えていた。

この手の話題は、何も今に始まった話ではない。

レイファリオンは華麗でカッコよく、

セクシーなコスチューム姿はあまりに  
蠱惑的。性欲旺盛な年頃の男子達が、  
歪んだ劣情を昂らせるのも当然だ。

表では救世主としての敬慕やアイド  
ルのな人気を集めるレイファリオンだ  
が、裏ではそうしたニーズを満たそう  
とする者が出てくるのは自然の流れ。

ネットでは際どいショットでの隠し撮  
り写真や淫猥な加工画像が日夜取引さ  
れ、男性向けの創作イラストや薄本  
などもたくさん作られている。さら  
にはアマチュア活動だけでなく商業的  
も目をつけられ、実写AV業界も多  
くのパロディ作品をリリースするに至っ  
ているのだ。そうした性的嗜好品は当  
然、レイファリオンに劣情を抱く年頃  
の男子達にとっては垂涎の品だ。

(くっ……。べ、別にわたしに何かの  
実害があるわけじゃないけど。でも  
そういう目で見られてるといふ事は  
やっぱり……う、うんわたしは小鳥  
遊惰であつてレイファリオンではな  
いけど……いやでも！)

他人との距離を取りすぎて、男性経  
験どころか恋愛すらしたことのない怜  
だ。誰にも正体を知られていないとい  
言え、変身した自分自身にこういつた  
劣情を向けられるのは、たまたまなく恥  
ずかしすぎる。

「あ、知ってるか？ 今日近場でこれ  
の新作の公開撮影やってるんだぜ！」  
「AVの公開撮影ってありなのかよ……  
……でもないな。本物のレイファリオン  
には会えなくても、女優さんには会え

るわけだしな……今から行こうかな」  
(し、仕方ないわよね……男のこつて  
そういうものなんだろうし……ッ!?)

視線は外しながらも耳をそばだてて  
いると、異様な感覚が駆け抜けた。  
(こ、これは……！ エグゼマキナの  
狂改人！)

聖装に選ばれた怜には、狂科学の暴  
虐を感じ取る超感覚が備わっている。  
毎回悪の現場に急行できるのもそのお  
かげだ。その能力が今、怜に再び平和  
の危機を知らせていた。

「……っ！」  
バタンッ！ 再び聖装の詰まったカ  
バンを手にとると、すぐさま教室を後  
にする女学生。男子達は一瞬気圧され  
たが、すぐにまた狼談を続ける。  
(急がないと！ ゼクスマキナの悪事  
を止められるのはわたしだけ……聖装  
姫レイファリオンだけなんだから！)

クールな瞳に正義の炎を燃やし、走  
る怜。もう彼女の耳には、男子達の言  
葉は聞こえていなかった。  
「聖装！ 起動ッ！」

校舎を出て誰の目もないことを確認  
し、怜は手持ちの大きなカバンを展開  
した。中には白銀に煌めく聖なるコス  
チュームが、小さくたたまれたスリー  
プ状態で格納されていた。

それが所有者の声に応え起動し、眩  
い光とともに中から飛び出した。  
「来て！ ホーリーアーム・ウェイク  
アップ！」  
聖装の放つ輝きに飲まれ、学生服は

分子レベルにまで分解されていく。露  
わに晒された少女の裸体は、大人しく  
物静かな普段の姿からは考えられない  
ほどにグラマラス。すらりと伸びた美  
脚や細くくびれた柔腰、そしてEカッ  
プオーバーの美巨乳など、抜群のスタ  
イルと肉感を両立させている。

一糸纏わぬ裸体を守るべく、聖装が  
次々に装着されていく。ハイレグレオ  
タード型の密着スーツが瘦身を隙間な  
く包み込み、見事なボディラインをい  
つそうセクシーに引き締める。黒く半  
透明なタイツ状の生地が胸乳を包み込  
み、スーツ内部にぎゅつと押し込める。  
若さ溢れる瑞々しい乳肉はきつく締め  
上げられてなおも量感を失わず、半透  
明のタイツ越しに釣鐘型のカップを誇  
らしげに主張していた。

タイトなハイレグレオタードが豊満  
なヒップと鼠蹊部に食い込み、下半身  
を際どく彩る。肉感的な太ももにびつ  
ちりと吸い付くのは、ボディスーツと  
同質の艶やかなニーソックス。しかし  
つま先までを完全に覆うわけではなく、  
中指だけにかかって他の足指は晒され  
ている。ブーツを履く前だけに見られ  
る足裏を晒したインナー姿は、ひどく  
フェティッシュでセクシーだ。

「ふう……ん。ふ、あ……っ！」  
びつちりと肌に吸い付くほどの密着  
スーツに、熟れた媚肉をきゅつと搾り  
上げられる。食い込むほどにきつい、  
けれどどこか心地よい装着感に、怜は  
思わず上擦った喘ぎを零してしまう。

それは同時に、理想の姿へと変わり  
ゆく高揚感にもよるものだ。いかにも  
生真面目そうな印象の黒髪が眩いブロ  
ンドに染まり、全身に聖なる力が満ち  
ていく。少女に悪を裁く拳を与える漆  
黒のクラブが両手に装着され、最大の  
武器でもある超出力を秘めたレガース  
が艶やかな脛から先を覆い守る。完全  
に起動した聖装から正義のエナジーが  
迸り、超科学テクノロジーの結晶と  
も言える聖装姫が誕生する。

「聖装姫レイファリオン！ ここに参  
上ッ！」  
誰も見ていないが、ピシィッ！ と  
ポーズを決めて宣言する。正義に燃え  
る怜のハートは、もはや聖装姫レイフ  
アリオンのものとなっていた。  
「……いきますっ！」

聖なるコスチュームで強化された身  
体能力は、変身前の十倍以上。夕暮れ  
迫る街を目にも留まらぬ速さで駆け抜  
け、ビル谷間の谷間を飛び越えて、聖装姫  
は悪の現場へとひた走った――

※ ※ ※

「ここですわね！」  
ほとんど人も立ち寄らないような郊  
外から、その気配は発せられていた。  
元は何かの工場だったのだろうか。  
もはや原型も残さないほどにポロポロ  
の廃墟へ、聖装姫は足を進めた。  
(こんなところで、ゼクスマキナは一  
体何を？ いえ……闇に紛れて狂科学  
の実験をしているのかもしれない。油  
断は禁物だわ)

思索を巡らせ、廃工場へと踏み込む変身ヒロイン。しかしてそこで見たものは、予想だにしていなかった光景だった。

「あっ！ レイファリオン……本物だ!？」

「た、助けに来てくれたのか？ こんなところまで……こんな俺達のために……うう、すげえ！ 感動した!」

「……えっ!？」  
 そこにいたのは、触手に拘束された若い男達。その数は、三十人はくだらない。私服の者が大半だが、中には学生と思しき若者達も少なくない。

そしてそんな男性に混じり、一人の女性も中にはいた。ポロポロの廃墟なのに、それだけは今日のために持ち込んだと思われる新品のベッドの上で、彼女は多くのカメラを向けられて撮影されていた。

しかも、奇妙なコスチューム……レイファリオンの聖装を模したと思われる、けれども作り物っぽさの拭えない安物の衣装を身に付けて、金色のカツラまでつけている。

「あつ……は、本物のレイファリオンなの!？ お願いつ、早く助けて!」

「え、え!？ こ、これは……一体……!？」

予想だにしていなかった状況に、思わず目を見開く変身ヒロイン。

多くの撮影機材にコスプレした女優、そして囚われているのは撮影スタッフと観客達——恰愼な思考が、今日の学

生達の会話を思い出す。

（これ……撮影会場……なの？ レイファリオンのパロディものの……だ、男性向けの、あの……）

数え切れないほどの戦いを勝ち抜いてきた聖装姫だが、こんな状況は経験したことはない。

まさかAV撮影現場に鉢合わせてしまうなんて……それも、自分をモチーフにした作品の撮影現場なんて。

困惑と恥辱とで、クールな美貌が紅潮する。

「おつ、おつ！ やつときてくれたねー、遅かったじゃん！ ニセモノ撮るのも飽きてたんだよ、もう少し遅れてたら殺してたトコだよかつたね!」

だが、ここが悪の現場であることは間違いない。それが証拠に、撮影現場でただ一人自由の身の男は、明らかに人間ではなかった。

「ゼクスマキナの狂改人! こ、こんなところで、一体どんな悪事を!？」

「ん、見ればわかるでしょ？ 撮影だよ撮影……俺は史上最高の天才映画監督なのよ。なのにといつもこいつも俺の才能を認めやねえ! だから俺は人間を辞めて狂科学帝国に魂を売ったのよ!」

椅子に座りメガホンを取る男は、もはや人間の姿をしていなかった。

肥満した身体からは無数の触手が生え出て、一人で機材を動かして動画を撮り続けている。機械化した頭部は、撮影用のビデオカメラそのものだ。よ

れたスーツやネクタイなど、人間としての痕跡が残っているのが、いつそう不気味でおぞましい。

「俺が撮るのは本物だけ、ヤラセもダメ全部なしのガチだ! だからアンタを待ってたんだよ聖装姫レイファリオン……お前こそ最高の被写体だ、史上最高のAVが今日こそ完成するのだ!」

「……まともな狂改人なんて一人もいませんでしたけど……貴方はとびきり狂っていますね!」

熱っぽく語る監督怪人に、レイファリオンは嫌悪と怒りを込めて言い放つた。

狂改人のベースになっているのは、社会を逸脱した重犯罪者だ。その思考は常人には理解不能で、趣味嗜好もなればそれ以上におぞましい。だがこの映画監督を名乗る狂改人の思考は、レイファリオンにとっては今までで最低に嫌悪感を煽るのだった。

「わ、わたしの……えっちな映像を撮りたい!？ そのためだけに、こ、この人は……!」

考えるだけで、背筋がゾッと冷たくなる。

男の人から性的な目で見られるだけでも辛いのに、こんなにも露骨に欲望を露わにされるのは、生真面目な少女にとつてもはや恐怖でしかなかった。

「ふん、天才とは理解されないものだ! だが作品さえ仕上げれば凡人どもも掌を返すさ、そのために協力して

もらおう聖装姫レイファリオン!」

「残念ですね。貴方に協力する気なんてありませんし……これ以上言葉をかわず気もありません!」

言うが早い、レイファリオンは一気に駆け出した。聖装にエナジーが循環し、グローブとレガースが眩く輝く。「一気に決めます! クロスレイザー!」

鋭い手刀が繰り出され、エナジーの残光が弧を描く。もはや斬撃と呼ぶのが相応しい一撃は、蠢く触手の群れを見事に一刀両断する。

「ぐ、ぐえっ! 流石に本物は強い……だがこれだ、これこそリアル! それでこそ、俺の被写体に相応しい!」

触手をずたずたに引き裂かれながらも、狂改人は肥大化した欲望のままに動き続ける。斬られた触手がすぐさま再生し、聖装姫を捕らえようと迫る。

だが、レイファリオンの動きはそれよりも素早かった。再生する側から何度でも触手を斬り落とし、まったく勢いを緩めず直進する。ムチムチと躍動する太ももに力が込められ、タンツとブーツが軽やかに床を蹴った。

「たあつ!」

「ぬつ!？ この体勢はレイファリオン必殺の……!」

華麗な跳躍からの急降下キック——聖装姫の必殺技の軌道を、カメラの眼球が凝視する。

「いきます! シューティングインパルス!」

だが、カメラで追えても反応できる速度ではない。これまで数え切れないほどの悪を倒してきた必殺キックが、今日もまた正義に勝利をもたらす――

その、刹那。

「き、きゃあああ!? 待つて、待つて! 助けてレイファリオン!」

突如聞こえた女の声、そして姿。狂人の触手はA V女優に絡みつき、自らの前に盾として差し出したのだ。

「おotto! どうするレイファリオン、まさか正義の聖装姫が罪なき一般人を手にかけてしまうのかア?」

「つく!!」

下手な演技めいた、いやナレーションを語る狂人。レイファリオンはそんな相手に頓着している余裕はなかった。咄嗟に空中で身体を捻り、キックの着地点を無理矢理に反らす。

「くつ……あつ!」

必殺キックは怪人の横側に反れ、レイファリオンは倒れるように地面に着地した。無理矢理に軌道を変更したせいで負荷がかかり、強烈な反動がダメージになって全身に跳ね返る。衝撃で足が痺れ、汗にまみれた美脚が辛そうに震える。

「おおお、どうしたレイファリオン! まさか必殺技失敗か!? これは無様だ〜!」

「つ……だ、黙りなさいこの卑怯者! その人を、早く解放しなさい!」

一撃で怪人を爆殺するほどの必殺キックだ、その反動ダメージもまた尋常

ではない。震える足でなんとか立ち上がりながら、怒りに燃える瞳で狂人を睨みつけるも、そのダメージは見るからに深刻だ。

「ハハハ! お約束だけ効果テキメンみたいだな。やつぱり王道シナリオってのは偉大なんだよ、どうだレイファリオン、こいつの命を助けてほしければ俺様の命令に従え!」

「くつ……ひ、卑劣な! 最初からこうするつもりだったのですね……まともに戦うこともできないのですか、この臆病者!」

「うはは、いいねいいね、その悔しそうな表情! フアンはそういうの求めてるんだよこれがリアルだよ!」

人質を拘束したまま、勝ち誇った笑い声をあげる怪人。怒りと屈辱に歪むレイファリオンの顔を、カメラアイがじつと睨めつけて撮影する。

「さあ! 卑怯にも人質を取られ抵抗を封じられてしまったレイファリオン! 正義のヒロインに待つのは一体いかなる恥辱のショーなのかア!」

再生した触手が伸ばされ、周囲の機材を同時に操る。怪人監督の中では、もうすでに撮影は始まっているのだ。

「つというわけで、ここからは俺の台本通りに動いてくれよな。さ、まずはお約束のインタビュースタイルからいこう。そのベッドに腰掛けてね」

「くつ! な、何をふざけたことを……真面目に戦いなさい!」

「真面目も真面目、大真面目だ! お

前こそふざけた口きいてみる、この女だけじゃないぞ、人質どもを皆殺しにしても構わないんだぜえ!」

「ひつ!? お、俺達もかよ!?」

最初から拘束されていた男達の首筋にも、鋭い触手が押し当てられた。生命の危機に、観客達は怯えた声をあげた。

「うあ……レ、レイファリオン。助けなさい、お願いだよ……!」

「こんな……無敵のレイファリオンちゃんに狂人に負けちゃうなんて……うう。俺達どうなっちゃうんだ……!」

絶望と悲観の念が、人々の間に広がっていく。その姿を前に、レイファリオンは声を張り上げた。

「わ、わかりました! なんでも言うことを聞きますから……お願い、その人たちに酷いことをしないで!」

「わかりやすいんだよわかりや! それじゃはい、本番いくよ!」

命令通り、ベッドに腰を落とすレイファリオン。屈辱と怒りに震えながらも、今は屈従を示すしかない。

「くつ……なんて屈辱なの!? こんなふざけた狂人のいいなりなんて……でも、今は……!」

怯える人質に目をやり、覚悟を決める。どれだけ悔しくても、今は怪人に従うしかない。罪なき一般人に被害を及ぼすなど、あつてはならないのだ。

「そうよ。今は従うしかない。チャンスは必ずくるわ……だから!」

そしてまた、レイファリオンは決意

を固めた。

何をされても、今は耐えるしかない。だが、それもすべて最後の勝利のため。怪人が油断した瞬間をついて、必ず人質を救出し逆転する――クールな瞳の奥では、正義の炎が燃えていた。

だがしかし――彼女は知る由もなかった。

この怪人監督の、理解不可能なまでの下劣な嗜好とやり口を――

（大丈夫……耐える、耐えてみせるわ。何をされても、絶対負けない……!）

「それじゃまずはお約束。冒頭インタビューから始めるぞ。俺の質問に嘘偽りなく応えるように。まずは名前とスリーサイズ教えてくれるかな?」

「なつ……!」

まるで予想していなかった言葉に、思わず声をあげる変身ヒロイン。ふざけているとしか思えない命令、まるで意味がわからない。

「ふ……ふざけてるの!? どうしてわたしがそんな……!」

「おい、わかっているだろうな? お前に拒否権は……!」

「ッ! わ、わかりました……言います、答えます……!」

これ見よがしに触手を動かされ、暗に人命を引き合いに出される。こうされては従うしかなく、正義のヒロインは声を上擦らせた。

「せ、聖装姫……レイファリオンです。スリーサイズは……測っていないので、わかりません!」



やめなさい!!

この街は今日から  
俺たちのものだあ!

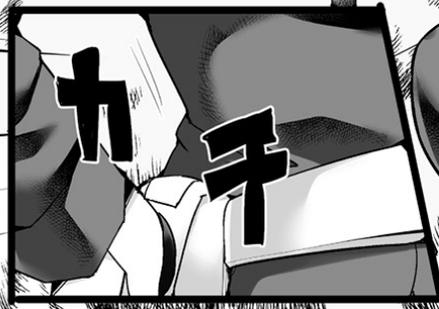
グハハハハ!



アアン!?  
誰だ!?

私がいる限り  
これ以上この街は  
傷つけさせないわ!

へん  
しん!



正義のバニーヒロインが借金を背負い……?





正義の変身ヒロインズ・  
快樂 風俗墮ち  
ラピッドバニー  
Rapid Bunny



あっ



ぐわあー!!

ラピッドパンチ!!



まだマシってもんだ  
毎回毎回全く…!

これなら  
あいつらに金渡して  
穩便に済ませたほうが



土下座

またやって  
くれたな!

これで何度目だと  
思ってたんだ!



よし決まりだ!

なあとアンタなら  
スグ返せるさ…



身体を動かすのは  
得意です!

ちと特殊な  
肉体労働だが…



こうなったら  
ウチの店で働いて返して  
もらうほかないな…



ここがどこ  
お店なの？！

うわ...



それに変身アイテムは  
つけたままで...って

いつもの  
コスチュームより  
露出は少ないのに...



恥ずかしいよっ

おい  
バニーちゃん



早速お客さんだよ  
接客について

あはいっ

よろしく  
おねがいますっ

よろしく

なんだか  
距離が近い…

可愛いね  
今日入ったばっか？

いつもは街の平和を  
守る変身ヒロイン  
してるんだって…？

流石スタイル  
いいね♡

大変でしょー  
そんなおつきな  
おっぱいしてたら♡

いえ  
そんな…

うっ…おっぱい  
イヤらしい目で  
見てくる…っ





彼はいるの？  
いない？ふーん♥

最近  
エッチもご無沙汰  
なんじゃない？

いいえ…  
その…

ヤダ…っ  
セクハラが…

やめ…

やっぱりストイックな  
活動してると色々  
溜まるのかな？

おじさんたちが  
解消してあげようか？

どんだん  
エスカレートして…っ



悪者にこんな風にならたら大変じゃないかっ♥ん？

あっ♥あっ♥

このお客さん上手すぎ…てっ♥

おじさんが鍛えてあげようほれほれっ♥



おっ♥パニーちゃんはここが弱いのかな？

正義のヒロインがこんなわかりやすい弱点を晒して…

やああっ…♥



★本作のオリジナルシリーズ  
『ワルブルギスの淫夢』の電子書籍版が  
無料でダウンロードできるぞ！  
詳細は表紙の裏ページにて。

# ワルブルギスの淫夢

ひどりの夜

外伝

## 2

ニジマガからデビューしたベテラン  
さかき傘が描く人気シリーズ外伝！  
被虐の淫夢に苛まれる魔女ユリーシャを待つのは……？

小説 NOVEL さかき傘<sup>かさ</sup>  
挿絵 ILLUSTRATION あぶりだしざくろ

イル・ド・フランスの中心地、パリ。花の都の名を戴き、華やかなイメージが先行する街だが、その成り立ちは交通の要衝に歴々の治世者が要塞を集めて作った。戦火により発展した場所なのは有名である。

それゆえか古く五世紀末にひな形が出来てより、そこに住まう人々は常に不安と緊張のなか日々を暮らし、そうした大衆の緊張は、いつもなにがしかの形で発憤する歴史を背負っていた。戦争然り、革命然り――、

十七世紀現在には、教会主導による狂信的民衆暴動通称、  
魔女狩り然り。

「でえ、パリはいまちよつと落ち着いたから、しばらくは生活基盤をイギリスにするって言うんですよ」ダングルテル先生つてば」

「あつそ」  
そんなパリの郊外。深い森の奥地には、うち捨てられて朽ちた城がある。教会をあげての迫害などものともせず、魔女ユリーシャが寝床にしていることは、誰にも知られていなかった。

同じ魔女の仲間以外には。  
「はうう、イギリスなんて大丈夫かなあ。ルイズ、英語がしゃべれる自信ありません」

「語学くらい三日あれば慣れるでしょ

う」

「今後はバラン家の息女、ラウリエル。バランを名乗るんだそうです。あうう、なんかすつこい名門貴族ってなってるみたいですよバラン家つて。その令嬢なんて、上手くつとまるでしょうか」  
「あなたが上手く興して、名門にするのよ。がんばりなさい。あ、ちよつとそのパープルのペンを取つて」

「は、はい」  
露骨にあしげにされているが、この城のことを知る魔女仲間ルイズは、ニコニコしながら指示に従い紫羽根のペンとインクを差し出した。

こんな森深くの古城にも、爽やかな風が訪れるよく晴れた春の日のことである。

冬の終わりを感じさせるほかほか温かい木漏れ日に甘えながら、二人、城の応接室でテーブルに向かう。

魔女ユリーシャ。そして妹弟子のルイズ。  
ユリーシャがひとり、テーブルに広げた羊皮紙に、紫色のペンで何事か書き記していく。

妹のほうはなにをしているか聞かされていないらしく、小首をかしげて見守っていた。

黄ばんだ紙に刻まれていく、不規則な黒、赤、黄、青、そして新たに紫の線。それは常人が見れば絵画、否、小さな子供の落書きにしか見えないものだが、

色で分けられた情報の差異には、同

じ魔女である妹弟子も気付いた。

「なんですかこれ。設計図……？」

「ええ」

不規則な線に込められた、文字に頼らない情報量。

なにかを開発しているようだった。「魔女」と呼ばれる彼女らが持つ、この十七世紀から何百年も先を行く科学の目で見れば。

「……？」

といつても、なにをどう設計しているのか分からず、少女は首をかしげるばかりである。

説明してやる義理はないが、このままだとどうさく聞かれそう。先輩であり彼女の教育係も任されているユリーシャは、面倒くさそうに肩をすくめ

「脳の機能を補佐するからくりよ。ここが脳幹、ここが海馬に作用して、神経系から補助演算を……」

「ほえ？」

「簡単に言うところを頭にブツ刺して、あなたみたいなおバカさんでもちよつとだけマシな頭にしてあげるの」

羽根ペンを振り上げてチクリと少女の頭にあてる。

「えええええ！ そんな、死んじゃいますよ！」

「だから死なないようにいま考えているのよ」

ペン先を紙に戻し、また何事か書き込んでいく。  
「これが上手くいけば、脳機能がいくら自由を増強できる。認知機能が高

まれば運動機能も……そうすれば、魔女にも「闘いの力」が身につくわあ」

「はあ……それは、大事ですね」

ふと神妙な顔になるルイズ。

過去連綿と紡がれた、この十七世紀には「魔法」としか思えない力を持つ魔女の二人だが、

あくまでどちらも、普通の少女であることには変わりない。

魔女の本領は、その智慧ちえ、その「魔法」からなる病魔や飢饉の是正。パリのような華の都を少しだけ幸福に彩ることはできても、戦火が襲えばできることは少ないのである。

魔女狩りという暴徒から身を守る手段は、決して多くなかった。

「……」

一瞬言葉を句切るユリーシャ。  
妹弟子から、ふいとそっぽを向いて、

「それに、魔女狩りが落ち着いてきたから、アンリエットがなにか新しいことを始めるそうじゃなあ。なにすることを知らないし興味もないけど、力になることはあつたほうがいいわあ」

「あ、は、はい。そうですね」

素直じやない言葉の端々に、二人にとつての師であり、母親のような存在に対する敬愛が感じられ。ルイズは嬉しそうに笑う。

「……」

姉がこちらに顔を見せないのも、きつと照れているのだと思つた。  
「さすがお姉様ですね。そこまでお考えだつたなんて」

「別に、そつちは本命じゃないわあ」  
「またまたあ」

赤くなつた顔も見たいけれど、後ろ姿だけで充分可愛い。妹はにんまりしながら、羊皮紙を愛しそくに撫でる。

「お姉様みたいに、いまや欧州最高、最強と呼ばれる魔女なら、こんな道具は必要ないでしょうに」  
「ん……」

「先生や、うふふ、ルイズたちのために作ってくださってるんですよねっ。ねっ。うふふふだからお姉様好きです」

「はあ……。もういいわあ、お茶をいれてらっしゃあい」

一縷の隙もなく善意ばかりぶつけられて、ひねくれものの魔女としては居心地が悪い。とにかく話題を切り上げようと、しつしつと手をひらひらさせた。

照れてる姉が可愛いのと、命令されたのが嬉しいのとで、少女はウキウキしながら部屋を出て行った。

台所からやかんとカップ類がカチャカチャいうのを聞き、小さく肩をすくめるユリーシャ。

振り向いて……同じように羊皮紙を撫でる。

その顔は、ほんのり赤くなつてはいるけれど。

妹の期待したような照れの色はなかった。

むしろどこか、倦怠感すら感じさせた。

2

「それじゃあ、今日は帰りますねお姉様」  
「もう来なくていいわあ」

「そんなあ、イギリスに移つたらしばらくお会いできないんだから、それまでご一緒させてください」  
もうとつぷりと日の暮れたころ、妹を帰す。

森深くにある古城は、周囲を背の高い木々に覆われて星や月明かりさえ心許なく。外に出ればお互いの顔すら認識しづらいほど真つ暗である。

「あうう、ちよつと怖いです」

「泊めないわよお」

「……早い。そしてひどい」

帰りたくなさそうなルイズに、さつさと行きなさいとばかりにあごで帰り道を指すユリーシャ。

少女はちえつと舌打ちして、ランプを取り出した。火をつけるでもなく中央に静かな明かりが灯り、適度に周囲を照らす。

そうして明かりができてから、改めて古城を振り返る。

「お姉様はお強い方ですねえ。こんな真つ暗なお一人で住んでるなんて寂しくないんですか？」

「どっかのウルさい子が寄りつかないぶん、一人のほうが都合がいいのよ」

ずるずると居座るルイズに対して、姉はお見送りも中途半端に背を向けて

しまった。

苦笑しつつ「また明日来ます」と頭をさげて、森へ入っていく。この闇深い森にランプひとつで入るなど、命知らずに近い危なっかしさだが、そこは彼女も「魔女」。行き来くらいできないわけではない。

「……」

城に戻つたユリーシャは、二階へあがり、

しばらく森の闇を、ふらふらとランプの明かりが横切っていくのを目を向けていた。常人ならすぐに迷つてしまふ深さだが、魔女の地政学を持つてすれば十五分ほどで抜け、パリの街の外壁までたどり着く。

魔女の影が、空を飛ぶように城壁を抜けて中へ戻つたのを見守り。ようやくユリーシャも中へ戻つた。

別に心配したわけじゃないわあ。自分には言い訳しながら、

「……ふう」

急に静かになつた、真つ暗な城内に、小さくひとつため息をつく。

夕飯の時間……と思つたが、妹がお茶の時間を長引かせるので、あまりお腹が空いていない。

軽く身体を拭いたら、もう寝てしまつていいかと寝室へ向かつた。真つ暗な古城、魔女の智慧なら明るく彩ることも可能だが、そんな気分でもない。真つ暗な中で、ベッドに腰掛けて、

お姉様みたいに、いまや欧州最高、

最強と呼ばれる魔女なら――。

さきほど言われた言葉を思い出していた。

「……」

欧州最高の魔女。最強の魔女。とは、他の魔女たちが最近ユリーシャを指す代名詞である。

人民も魔女も恐れる教会の暴走、魔女狩りに、現在働いているある程度の抑止力。それが彼女の働きによるものだと知れているための。尊称というやつだろう。

とくに直接助けられた、妹弟子のルイズはその呼び方が気に入っているようだった。心酔する姉を敬う言葉。最近では口癖のように連呼している。本人がどう思っているかも知らないで。

(違うのよ、ルイズ)

ベッドに腰を下ろして。両足を引つ張り上げるように抱え込み。膝に額をあてて俯く少女。

欧州最強の魔女。そんな呼び名に恥じない、理想的に長く伸びた手足が大人の美を彩る彼女だが、こうしてるとまるで六つか七つの子供のようだった。

(違うのよ。強くなつてないの)

子供のように、小さくうずくまつて。それでも大人の色気を滲ませる首筋には、思い至るだけでじつとりと汗が浮いていた。

彼女を欧州最高たらしめた『魔女狩り』の打倒。

それがどう行われたのかを、知るものは少ない。たぶん他の魔女たちは毅然と教会に立ち向かい、正義の名の下に悪党を罰したと思っただろう。

実際はそんなものではなかった。ユリーシャがこなししたのは……一言で言えば、囮。

教会の名の下に行われる暴虐の、被害者として一ヶ月を過ごしただけだ。

「偉大なる絶対愛と、体现者たるグストー司祭に感謝を」

あくまで正義の代行であるはずの魔女狩りだが、当時すでに教会の腐敗はそのシステムまで作り変えていた。

魔女狩りの名のもとに適当な女を誘拐、監禁し、肉人形とするべく調教。彼女らは教会が貴族に取り入るための交易品として使われる。

「主への忠誠を思い出すべく、この身を絶対愛に捧ぐことをここに誓います。偉大なる慈悲と慈愛をお与えください。グストー様」

指揮をとったのはグストーという一介の司祭である。彼は『絶対愛』により魔女らの魂を救済するという名目で、正義の代行として誘拐と調教を行っていた。

誘拐し、調教し、

「私はこの心と体をグストー様に捧げます。生涯グストー様を愛すると誓います……♡」

「ひっひっひ、そうかそうか」

「ああ、グストー様。愛しておりますわ」

「今日まであなたの偉大さに気付かなかったわたくしをお許しください」

「グストー様……ああ、ダメ、触れられるだけで私、私、もう」

洗脳する。

一ヶ月の間、何度も見せられた光景だった。でっぷりと肥えた男が裸で立っている、年齢や国籍は様々、ただ見目に美人である点だけ共通した女たちが嬉々として寄っていく。

女たちは本気で悦んでいた。グストーの、醜い身体に触れられること。たるんだ皮膚にキスして、グロテスクなベニスに触れ、ぶよぶよの尻に顔を埋めて汚い部分を舐め回せることを。

運よくグストーの腕に抱かれた女はナターシャ、ブリテンで数少ない女騎士の名譽を受けた令嬢である。その伶俐で気高い顔は、抱かれただけでくしやくしやになるほど恍惚としている。

ベニスにうつとり指を絡める女はエリエル。先月幼なじみと結婚したばかりという村娘だ。初夜を過ごした夫の、すでに何十倍もの回数、恥をかかれ、絶頂と共に忠誠を誓わされた剛直に、触れるだけで腰を震わせている。

パリ自警団の勇敢な戦士、グロリアは夢中になってグストーの尻穴に舌を

潜らせながら、すでに自分で自分の箇所をまさぐっている。

施設では淫惨な調教と、グストーを賛美する『感謝の言葉』の朗誦を強要される。

ものの数週間ですべての女たちが人生の価値観を塗り替えられた。自分の喜びは男に奉仕することであり、指揮者であるグストー司祭がその喜びを与えてくれたのだと。本気で信じ込まされた。

美女三人の感謝の抱擁と愛撫を受けながら、男はにんまり笑い、

「お前は来んのか？ ユリーシャ」

同じく呼ばれた四人目の美女。ユリーシャに声をかけてくる。

「ふざけ……ないで」

魔女の力をすべて奪われた彼女には、目の前で狂わされた女たちを止めることも。施設にまだ百という次の被害者たちを救うこともできない。

ただ救出を待ただけだった。

(強くなんかないのよ、ルイズ)

自分の無力さは嫌というほど思い知らされた。

## 4

「ゲへへへ、ずいぶん大人しくなったなあユリーシャ、おい」

一ヶ月の間受けた調教はいずれも過酷なものだった。

中でも一番記憶に残っているのが、

デュバロという男に受けた調教である。身の丈二メートルはあるかという巨漢で、筋骨隆々として、

「おいっ！」

「きやあつ！」

何人かの娘らと共に連れられた、広いホールのような調教部屋で。デュバロが当番につくと、まずは必ず頬を張られた。

怪我はしない程度の方だが、痛いのに変わりはない。

「返事をしねえか。大人しくなったなあおい」

「は、はい」

身体が大きさと反比例して頭が悪く、粗野で短気な男だった。思い通りにならないとすぐ暴力をふるう。

「まったく、エリザ様も嫉妬が行き届いてねえぜ。オラオラ、ぶん殴られたくなきやまずはどうするんだ、おい」

「S……」

デュバロが当番につく調教は、その乱暴さを活かしたものだ。

女らには、男との殴り合いが課せられる。顔以外どこを殴ってもいいルール。

筋力の差で不利なのはもちろん、もともと女性陣に『勝利』は用意されていない。たとえ相手を打ち負かしても、二人目、三人目が現れ、負けるまで続くだけだった。

それでも負けん気の強いユリーシャは、最初のうちは一人でも殴り倒せる機会があるならと決闘を受けていた。

しかしある時から、このデュバロとい  
う凶暴な獣が最初の相手に固定される。  
この男には一度も勝てたことがない。  
当然である。いまの彼女は魔女の力の  
ないただの少女であり、筋骨隆々な大  
男とは体重が百キロは違うのだから。  
痛い思いをするだけ損なので、すで  
にユリーシャも最初から降参する道  
を取っていた。ナターシャやグロリアと  
いった腕に覚えのあるごく一部を除き、  
ほとんどの娘がそうするのと同じよう  
に。

しかし降参の合図は、  
「こ、降参いたします……お許しくだ  
さい、デュバロ様」

自分から服を脱ぎ、床に両手両膝を  
ついて、頭をさげること。

裸になつて土下座する。それがこの  
調教における最適解だった。

「げへへへ、それでいいんだ。お前は  
いつとも世話やかせやがってよお」

「……」  
最適解ではあれ、

プライドの高いユリーシャからすれ  
ばこれほどの刑罰はない。

どうせやらなくても同じである。戦  
いを選んでも遊ぶように殴られ、最後  
は土下座させられる。それは変わらな  
い。

だが……  
自分は無防備ですと床に両手をつく。  
頭をさげる。

毎度頭がクラクラした。  
裸であるためお尻が持ちあがり、谷

間に冷たい空気が触れる。羞恥の念が  
屈辱をさらに増幅する。

殴られた痛みがあるほうが少なくと  
も気は楽だ。痛みがないと、自分がい  
ましていることの惨めさを冷静に捉え  
てしまつて、頭の中が真っ赤になるほ  
ど腹立たしい。

「だが最近は大人大人しくなつたなあ」  
「ひうっ！」

びしゃつと男の巨大な手が、お尻を  
叩いた。

叩くというか掴むというべきか。尻  
たぶを片方、丸ごと鷲掴みにされる。

形がよいだけでなく、吸いつくよう  
な肌質とその強烈な弾力。男はにんま  
り頬を緩めながら、粘っこい手つきで  
丸みを転がしてくる。

「く……」  
感触だけで不潔感が伝わる触り方だ  
つた。

あまりの汚辱感に、ユリーシャは齒  
噛みしながら男を睨みあげる。

「誰がやめていいつつたコラア！」  
「っ」

それを待つていたように男の怒声が  
飛んだ。

確かにルールでは、土下座は相手が  
許可するまで続けなくてはならない。  
額を床から離すのはルール違反である。

ただ、  
（ど、どうして怒鳴られなきやいけな  
いのよお）

理不尽すぎるルールと、それに従つ  
ている自分。悔しさが改めてこみあげ

て、少女は目じりが熱くなるのを感じ  
た。

涙が出てくる。突然の怒声への驚き  
と、それに屈さなければならぬ現実。  
「キレる」という状況を我慢すると、  
涙が出ることをユリーシャは初めて知  
つた。

床につけた両手の間に顔をやる。そ  
の格好も逆に救いになる。誰にも見ら  
れない。狭い場所に閉じこもっている  
ようで……。

（み、みじめだわあ……私）  
けれどひくつ、ひくつとしやくりあ  
げる。白い背筋の動きは、きつと見え  
ているだろう。デュバロはもちろん他  
の調教師たちにも、囚われの仲間たち  
にも。

そうして精神がギリギリまで追い込  
まれた、その時を狙うかのように、  
——ちゅぷ。

「んん……っ」  
臀丘を撫でていた男の手が、中指を  
折り曲げてきた。

野太く巨大な指が、べつとりと尻の  
谷間をふさぎながら、奥で息づくラビ  
アを捉える。

「ああっ、や、やめてえ」  
思わず弱音を吐く少女。だが、  
「やめてだあ？ クク、やめていいの  
かよ」

男はかまわず中指を折り曲げてくる。  
——じゅぷう。

普段は幼く閉じている淫華は、驚く  
ほど従順に口を開けて太い指先を飲み

こんだ。  
それどころかその容積に押されて、  
場所を追われた蜜汁がとろりとあふれ  
る。

「まだ何もしてないのにこんなに濡ら  
しやがって」  
「っ……そんな、そんな」

自分で自分が信じられない。顔をあ  
げて後ろを仰ぐユリーシャ。

悔しくて、みじめで、泣いてしまつ  
て。

けれどそんな状況に、身体がねつと  
り火照っているのをいまさら悟つた。

身体が熱い。股関節の裏側がむずつ  
いて落ち着かず、  
「ああーんっ」

そこに中指を埋め込まれると、甘え  
るような声が出てしまう。

デュバロがニヤニヤしながら、本格  
的に攻撃しようと身を乗り出してきた。  
ちよんちよん丸くなっている少女の身体に  
覆いかぶさるようになたぐ。

（あ……か、硬いのが）  
男は幅広のローブを着ているのだが、  
密着しすぎて身体が顔にぶつかった。

その奥にある筋肉の熱量と、ちよん  
ど腰が顔にくるので、硬い尖りを感じ  
る。

「へへへ、相変わらずいいケツしやが  
つて」

一方のデュバロはハート形のヒップ  
を両サイドに掻き分け、くんくんと谷  
間のニオイを嗅ぎながら、

「ケツの穴がヒクヒクしてやがる。そ

ういや前はこつちを可愛がってやったなあユリーシャ。可愛いメスケツ自分からぷりぷり振って、七回もイッたのは覚えてるか？ ああ？」

「ああん……そんな」  
顔にあたる巨大な存在感と、疼く股関節を埋める中指の存在感。

二つに挟まれた頭からは、すーっと血の気が引くように、屈辱や悔しさが消えていった。

いや消えたというより、

（そ、そうよお。七度、ううん本当は九度もイカされたの、わたくし。こんな卑怯な男に負けて……なのにアナルのおちんちんが気持ちよくて、何度も何度も）

別のものに転嫁している。

屈辱も、敗北感も、何もかも。

「へへ、あげる」

男が銀色の髪を挿んで、顔を起こさせる。

その顔には、涙はまだ残っていたが、どこか甘えるような陶酔の色が、とろんと浮かんでいた。

5

この儀のあとは、一同沐浴場へ通される。

「闘ったあと」というていなので、汗を流す時間である。

十七世紀パリの浴室は湯船を作るのが普通だが、ここでは大人数が一度に使うため、天井に通されたホースから

湯をシャワーの形で垂れ流していた。「ほらユリーシャ、お前のせいでかいた汗だぞ」

「は、はい」

ルールとして、この場では勝者も敗者もなく身体を「洗いあう」ことになっている。

どんな風に「洗う」かに取り決めはない。殴り合いで精神的優劣を決めた直後に身体をまさぐりあう……。どんな結果になるかは言うまでもあるまい。さつきからすでに、負けた女たちが男らにのしかかられてあげる嬌声が、浴室全体を包んでいる。

ユリーシャはまだ声こそ大人しいが、

「んっ、は……あんっ、や、いやん」

「へっへ、今日はぜひぶん調子良さそうだな」

「いやあ最近はこのなんもんさ。ち×ばの味を知ってからは、すぐ可愛くなっちゃまう」

「俺はいつもの糞生意気な面も好きだけどよ」

男が八人も集まっているので、騒がしきは同じだった。

あちこちから伸びてくる手が、雪のように白い肌を、胸と言わず腰と言わず触る。時おり背筋をつうつとくすぐられ、身震いさせられながら、

「おらっ、さつきとしるユリーシャ」

「ああ、は、はい」

妨害に文句も言わず少女は、大男に

しなだれかかる。

八人いても占有権はデユバロにある。

毛むくじやらの巨体は、勝ち誇った様子で三人掛けの椅子を独占してふんぞり返り、その膝に美女を乗せた。

「あ……ん」

男の膝をまたぐには、ユリーシャの細身では大股を開けなければならぬ。そして乗ったら乗ったで、先ほどい

じられて落ち着かない箇所をぐいと男らしい筋肉が押ししてくる。たまらず柔らかな背筋をクネクネさせる少女。

白い肌と銀色の髪が、右へ左へ揺らめく悩ましさに、他の七人が歓声をあげた。

（ああ、わたくし、なにをしているの

お？）

本能的な違和感に戸惑う少女。

その身体は、命令に沿ってこの場の

ルールに従っていた。

敗北者である自分は男にすがりついて、その身体をこすりつけていく。汗を落とすという建前に沿って、自分の身体を男を喜ばせる道具に使う感覚を、

実地で覚えていく。

性奴になるための第一歩……本来なら

ブライドの高さが邪魔をして、怒りで震えていただろう。だがいまは、

「あ、あん、ああん♡」

ぶにぶにと柔らかな乳房が、毛むく

じやらの男の胸で潰れる。その感触に、

男がニヤつくだけでなく、少女の口から

もほのかな愉悅を匂わす声が漏れていた。

細い身芯は嫌悪を感じさせず、むしろ

リラックスして見える。溶けたチー

ズのように男の身体にへばりついてふるふると小さく震えていた。時おり乳首が剛毛で擦れると、ピクンと腰が跳ねる。

（どうして、どうしてなのわたくし）

自分から男の身体に手を回していくユリーシャ。すらりと美麗に整った

大人びたスタイルの身体だが、デユバロほどの大男にくっついていとまるで子供だ。

そんな自分より遥かに大きな異性に

すがりついて、

（悦んでいる……わあ。こんな惨めな

こんな扱いをされて……あん）

身体を洗う。という名目で許される

からと、自分から腰を動かしてしま

う。大きな膝に熱い果肉をこすりつけて

まう。

そこがクチュクチュと鳴っているの

は、微々たる音だが、自分の内部から

生じるだけに少女だけには聞こえてい

た。

そうこうするうちにも、男たちの手

は遠慮なく伸びる。

「ウヒヒ、やつぱりいいカラダしてや

がるぜ」

「ぷりっぷりのピチピチだ。こうして

見ると小娘なんだがな」

「ああ、い、いやよお、触らないで」

無防備な背中、太もも、お尻、首筋、

耳にまで、無作法な手のひらが這い回

る。

いや、やめて。言いながらもユリー

シャは抵抗しない。

それどころかその身体は、自分から両足を広げて太もものより深い部分へ誘い。またくすぐられる背筋は最初丸まっていたものの、やがてクンと反りかえり、後ろで覗く七人のほうへヒツプを突きだした。

「へへ、ここの味を知ってからつても、すっかり淫乱が隠せなくなつたなあ」

「あぁーんっ」

誘われるままに男らの手のひとつが、プリンと丸い肉丘を割り、その深部を捉えた。

「いやん、やん、ああお尻はダメ。お尻、いやよああああん」

銀色の髪を激しく左右させていやいやするユリーシャ。

だが濃桃色の肛門肉は、待ちかねたように男の指を通していった。通つたあとでぎゅーっと皺深く締まる様などは、すっかりそこが「排泄口」でなく「男への奉仕の穴」に変わっているのを表しているようだ。

「や、や、ああああお尻、ユリーコリ、奥からユリーコリされると……お♡」

括約筋を裏側からなぞられる。それだけで、ユリーシャはもう夢でも見ているように表情を蕩かせてしまう。

そこを奉仕の穴に変えているのは、肉体のものでではなく、本人の気持ちも十分に味方しているようだった。「クク、おらユリーシャ、仕事を忘れるんじゃねえぞ」

「あ……っ」

その他大勢が群がれば群がるほど、その占有権を持つ優越感に浸れるのだろう。デユバロは逆に自分から美体を味わうことはしない。

ただだらしなく伸ばしていた足をどけて、身体を起こしてみせた。

自然と床に下ろされて、膝立ちになるユリーシャの眼前に男の腰が来る。触れてもいないのに湯とは明らかに違う熱量を頬に感じ、少女は目を丸くした。

「おら、洗え」

「……は、はい」

向けられたペニスの大きさは、知らないわけではないが何度見ても凄まじい威圧感だった。ユリーシャは恐る恐るといつた手つきでそれに触れる。

「す、すごいサイズ……指が回りきらない……なんて」

大きい。生物にとつて最も根源的な恐怖を覚えるものが大きさと、言うが、その意味でデユバロのそれは、もはや凶器だった。

こんなものが自分に襲いかかったらどうなるか。考えるだけで怖い。触られることがそのまま威嚇に近い。

ユリーシャも自然と恐怖し、そして……。

「ああん……♡」

その恐怖がそのまま甘い吐息となつて漏れた。雁首に絡めた指は、媚びを感じさせるほど執拗にきゅつきゅつと肉を甘くしごく。

「へへ、完全にマゾツ気が出ちまつてるぜ」

「ユリーシャはほんとち×ぼに弱いかなあ」

周りの男らがせせら笑うのが聞こえる。

「ひどい……ああ、みじめだわあわたくし」

嘲笑われる悔しさに、胸が締めつけられる。息が苦しくなる。

けれどそれは、土下座の最中に頭の中にかかった靄の中で、異様な興奮に切り替わって全身に伝播していった。

男の縮れ毛で擦れて赤くなつた乳首がキュンと甘く尖る。膝立ちになつたまま腰が震えるので、ぼたぼたと新たに分泌した雫が垂れる。

「ああ……ん、むう」

なにか考えるより先に、目の前の剛直にキスを仕掛けていた。

「へへ、何も言つてないのにおしやぶりか。ほんつとにち×ぼ好きなメスに育つたもんだぜ」

それでまた新しく笑われてしまう。

（ううう、どうして。どうしてわたくし、こんなの、自分から……）

妖しい悩乱に乗せられるまま、唇には取まりきらない巨砲へ舌を絡めていた。段差の激しい雁首をちろちろしやぶりながら、亀頭にすぎよう小高い鼻を押しつける。

体勢が変わつて一度離れた七人が、改めて手を伸ばしてきた。今度は邪魔な男がいないので、遠慮なく乳房を握

り、尖り立った先つちよを摘む。太ももへなど何人が手を伸ばしてきたのか。その美麗な白肌すら何人にも撫でまわされながら、

「はむ……んあつ、そ、そこは……あつ」

「触つて欲しいんだろ。クク、さつきからデユバロの膝にずーつとこすりつけててよ」

「お前の大好きなクリちゃんを可愛がつてやるよ。ヨすぎてこの前みたいにションベンするんじゃねえぞ」

「もちろんこつちの大好きな乳も忘れてないからよ」

男たちの声が連鎖するのと同時に、身中に侵入者が殺到した。

いつもは秘めやかに口を閉じている白い外唇が、いまはピンクに火照つてひし形に広がっている。内部の、薔薇の蕾のように複雑に行きかうヒダの層。その一枚一枚が別々の指で撫でまわされた。

未発達なクリトリスは、捕まえるのが難しいので指の先で押さえるように。いくつかが的外す者もあつたが、数が多すぎてほとんど常にコネくられている形になる。

肛腔への指も二本が増えて、左右にぐいぐい広げられていた。きつといま下から覗かれたら、括約筋がヒクつきながらガードを乱して、真っ赤な腸壁を見せてしまっているだろう。

（うううう、ううう、いやあ、ああ、もうイジメないでえ）

165

亀頭に吸いついた口の中で喘ぐユリーシャ。

いよいよ八人も男に甚振られてい実感がわいてくる。屈辱や恐怖が本格的な形として身体を犯しだしている。それでも巨物でふさがれた口のかわりに、鼻からこぼれる声は、

「んふん♡ ううん、う、ううん♡」

甘えた色を帯びている。声だけではない。無数の指が行きかう膣花はムチムチッと自分から迫りあがるようにウネリ、奥孔からどろりと白濁したエキスを吹きだした。無数の指がヒタを広げるせいで、蜜はとろりと糸を引きながら床に垂れおちる。

花蜜の粘度と細かな泡立ちとは、よく攪拌された証拠。乙女の内部で粘膜の敵がたっぷり蠢いている証拠だ。どれだけ期待してんだよとまた男たちの嘲笑が飛ぶ。

さらなる罵倒にクラクラしながらもユリーシャは男根への奉仕をやめなかつた。むしろ鼻から漏れる吐息がより甘く蕩けていく。

乳首をくにくに弄られるたび、肛輪をコリコリほぐされるたび、甘え鳴きは高まり、

(ああ……どうしましょう。わたくし、嬉しいわ。バカにされて、意地悪されて……こんな男たちに笑われて、喜んで……)

ついに少女自身も、それを自覚していく。

自分はこの屈辱に、罵倒の声に、快

感を覚えていると。

さつき土下座をしながら覚えた薄暗い感情が、喜悅であると理解していた。「へへ、おいこれ使おうぜ」

ふと後ろで男らの動く気配がする。なんだろう……思うのと同時に、なにをされてしまうのだろう。期待が胸を疼くを感じていると。

——ずぶる。

「んぐう……っ？ な、なあに……あああッ」

変化の意味はすぐに分かった。広げられていた肛肉に、指とは明らかに違う硬い感触がめり込む。

ざらついた皮の感触……ホースだ。それは無理やり括約筋を乗り越えて。

どぶどぶと内部へ、かけ流しのお湯をシャワーしてくる。

「あッ、オオオオオオ……っ、なに、やめ、やめてえッ」

これまでとは異次元の責め苦に、目を見開く少女。

だがそうして泡を食う様は男らを楽しませただけだった。本来身体を洗う用のシャワーの水量は多く、あつという間に直腸をいっぱいにされる。

さすがに腸道を逆流するには勢いがたりず、そこで逆流してどぼどぼとあふれた。満足したのかホースが引き抜かれ……。

「う、ううう、くううう……あああひどいわあ」

それでも体内にはたつぷりなお湯が残される。

じわーっと体温以外の温かみがおへその内側に染みてくる。得体のしれない衝撃に、ユリーシャはさすがに口奉仕を中断するが、

「おらあッ、休むんじゃねえよ」

粗暴なデュパロは許さなかった。ぐいっと銀色の髪を掴むと、強引に口元へ切っ先をぶつけてくる。

「う、うう」

理性が戻ってもどちらにしろ強要される奉仕に、少女は苦渋の顔で従った。改めて美麗な唇を広げて巨大な亀頭に吸いつき、

——ぎゅるるるッ。

(お、お腹が、いやよ、お腹があ)

最初はただの肛門へ向けての加圧。だが次第にそれは、腹部を満たす便意に似たものに転移していく。

男たちの「おら、いつ出してもいいぜ」「俺たちが綺麗にしてやるからよ」という嘲りが、遠くに聞こえた。

人間として最低の行為を強要され、ユリーシャは……。

(また……いじめるのね♡ みじめな私を……ああ、はああ♡)

驚くほどあつさりと、また落ち着きを取り戻していく。

この汚辱。このイジメもまた、喜悅の因子だと順応していく。土下座で芽生えた黒い感情は、すでに少女の心を完全に制圧していた。

ちゅば、ちゅば、向けられる剛直へ唇を注ぎ、全身を這う男らの手にスレ

ンダーな股体をクネつかせて答える。

変わったのはお腹から聞こえるぐるぐるとした響きに時おり眉をゆがませるのと。今度は侵入は許さないと肛肉をぎゅーっと蓄めていることくらい。皺が持ちあがるくらい窄まった括約筋を、すりすり指先でくすぐられると、「ううん♡ だめよ♡」と甘えた声を返すのさえ変わらない。

(み、見られちゃうわこのままじゃ。私、うんちするところを。あああ、ひどすぎる)

デュパロと、七人。だけではない。浴室で他のまぐわいをする男たちと、仲間である女たちさえ興味と好奇の視線でこちらを見ていた。

ユリーシャほどの美女が、排泄を迫られる姿。物珍しさを乗り越して非現実的ですからある姿なら目を引くのは当然だ。だが本人にとつては、仲間裏切られたような気分もまたぬぐえず、

(ひどすぎるわああ♡)

そして裏切られた悲しささえ、いまは倒錯した快感になっていた。

もう抑える必要はないとデュパロが銀髪を放す。するとユリーシャは、甘え上手な子供のような目で巨漢を見上げ、

「ンふう♡ かけて、ください、デュパロ様。ああ、ユリーシャに熱いのちようだあい」

「ククッ、いいとも、ほら」

「ああ……♡」

惨めな淫楽に悶えながら目を閉じる。

亀頭に回した指が、ぶくんと奥から



風俗店にて危険な潜入捜査!

用意されたレプリカコスチュームを身に纏い  
なりきりプレイに身を投じる!

★本作品のオリジナルシリーズ『特捜姫  
兵アルテミス 白濁の戦女神』の電子書  
籍版が無料でダウンロードできるぞ!  
詳細は表紙の裏ページにて。

特捜姫兵

# アルテミス

別伝

## 緋色の淫宴

小説 NOVEL / 挿絵 ILLUSTRATION

いしばよしかず **斐芝嘉和** / なぎおか **風丘**

キャラクター原案 / きりしま **桐島サトシ**

character

天を衝くような高層ビルの壁面を、黒く細い影が軽やかに駆け登る。

背にたなびく長い金髪、胸に踊るは豊かな膨らみ——EXスーツを纏った現代の戦女神、白藤マリアだ。

その足下に——カッ！ カカッ！

長さ二十センチほどの鋭い棘が、コンクリートを砕いて突き立った。一瞬早く身を翻したマリアが壁面を蹴って飛び離れていなければ、そのいくつかは確実に、若鮎のように優美な脛を貫いていただろう。

「さて……お手並み拝見だ。見せてみる、新人」

グラマーな体型をクッキリ浮き上がらせた黒いEXスーツの、ブーツに仕込まれた重力制御装置で落下速度を調整しつつ、青いバイザーの下で切れ長の瞳を光らせるマリア。

その視線の先、建ち並ぶビル群の足下に——紅い影が趨る。

刃が光る薙刀を脇構えにしながら踵のローラーで高速移動している、結城晶。つい先日フロントチームに配属されたばかりの女子大生だ。

長く艶やかな漆黒のストリートヘアを靡かせながら、細い眉を逆立ててキツと見据えているのは、前方の十字路歩道橋を隠すほどに大きく膨れ上がった黒い塊——オーバース。

元は人間だが、UMAと呼ばれる人工生命体と融合して醜く変わり果てた、文字通りの化け物。

「ゲギャアアアッ！」

吼えたオーバースの顔と思しき部位は、上空に向けられている。腕の代わりに生えた太く長い触手を下から上へ、下から上へと振り回し、宙に浮いたままのマリアに向かって鋭い棘を撃ち続けている——と。

その動きが不意に止まり、頭と思しき部位が右斜めうしろへ向けられた。次第に高まるローラーの音に、ようやく気づいたららしい。

「もちろん、遅い。」

「きえええいっ！」

「さあ、最高速度でオーバースの足下に滑り込みつつ、跳躍。下から擦り上げるように薙刀を振るい、太い触手の根元をすっぱりと切り裂く。」

「ほう？ 見事な太刀筋だな」

「イヤーピース越しに聞こえてきたマリアの言葉に、

「脇下や内腿など、急所を狙うのが天正無間流薙刀術ですからね。おかげで競技会には出られませんが」

「軽口を返しながら着地した晶は、すぐさま脚を踏み換えて身体を傾け、斜めに振り下ろされてきた残りの触手を高速ターンで避ける。」

「同時に薙刀を振るい、もう一本の触手も根元から断ち切った。」

「ギェオオオオオッ！」

「痛みなのか驚きなのか、黒い怪物が凄まじい声で吼えながら伸び上がる。」

「どうします、リーダー？ このまま私ひとり……」

「調子に乗るな、新人」

マリアの冷やかな声が聞こえた瞬間、晶の背後で風船が弾けるような音が続けざまに響いた。

「ッ!？」

「反射的に首を竦めながら振り返るバイザーに、紅い飛沫が降りかかる。」

「そのオーバースはハイヴ型です。ドロロンがいるので注意してください」

「イヤーピースから聞こえてきた、場違いなほど冷静な声は、晶のもうひとりの同僚、デイズ・フラット。小柄な身体を白いEXスーツに包み、己の背よりも長い銃を構えて、ビルとビルの間を妖精のように飛び回っている。」

「あ、ありがとう……でもドロロンを抑えてくれれば、本体は私が……」

「調子に乗るなど言っている。見ろ」

「……え？ もう再生しているッ!？」

「ドロロンの体当たり攻撃を避けるために一旦オーバースから距離を取っていた晶は、首だけ振り返って息を呑んだ。最初に見たものよりは細く短い、触手がしっかりと生えている。鞭のように振り回し、棘を四方に放っている。」

「あのサイズだから。触手をいくら斬り落としても意味はない」

「人工生命体であるUMAと人間が融合したオーバースは驚異的な能力を発揮するが、物理法則を無視したような強力な再生能力もそのひとつ。融合度が低いうちなら傷がすぐに治る程度だが、ヒトとしての面影がまったく見当たらない状態まで進めば、根元から断ち切られた触手でさえも瞬く間に再生してしまふのだ。」

「じゃ、じゃあどうすれば……」

「焦る晶に、

「グラヴィティ・シュートだ」

「あくまで冷静なマリア。」

「え？ ちょ、ちょっと待って。私まだ、タイミングを合わせる練習をしている段階……」

「お前は全速力で突入し、適当に蹴るだけでいい。あとは私とデイズでなんとかする。行くぞ！」

「そんな……ええい、もうっ！」

「薙刀の石突きをアスファルトの路面に突き立て、クイックターン。顔にぶつかりそうになったドロロンを反射的に切り払い、十字路に居座っている巨大なオーバース目がけて突進する。」

「いいぞ、そのまま行け」

「どうなっても知らないからね！」

「半ば以上自棄になりながら、踵で喰らうローラーを最大出力。槍のように突き出されてくる触手を既の所かわしつつ、路面に石突きを突き立て、棒高跳びの要領で高く跳ね上がって——。」

「グラヴィティ・シュートッ！」

「叫びながら、オーバースの太い胴にドロップキック。」

「——ばくんッ！」

「足に感じる衝撃とは明らかに異なる音が、オーバースの巨大な身体の内部分から聞こえてきた。」

「グギェッ!? ぎ、ぎ……ギイツ!？」

「黒い怪物が苦しうに唸り、身を振る——その巨体が大きく凹む。」

晶が叫びながらドロップキックを決めた瞬間、それぞれ別々の角度からマリアとデイジーも同じように蹴りを叩き込んでいたのだ。

と同時に、三人のブーツの中にある重力制御装置が声紋照合によってリミッター解除。みつつの重力ベクトルが交差する焦点にマイクロブラックホールが生まれ、内臓を容赦なく抉る。いくら再生能力の高いオーバースでも、主要器官をゴツリと失ったのでは生命を維持できない。

「ぐ、う、おぉ……」

最後の最後に、ほんの少しだけ人間らしい呻き声を漏らし――抜け殻となつた黒い塊が、十字路の真真中に地響きを立てて倒れた。

＊ ＊ ＊  
一時間後――対オーバース用戦闘組織・アルテミスの、日本支部。

その小さな会議室に、晶、マリア、デイジーが顔を揃えていた。

「――というように、UMA不適合死が減ると反比例してオーバース事案が増えています。適合UMAが増加しているものと推測されます」

手元のPCを操作して壁面モニタにグラフを提示しつつ、簡潔に説明するデイジー。やはりな、と肯くマリアと、青い顔をして無言の晶。

初めての実戦で、疲れきっているのだ。EXスーツには倍力機能があるから戦闘中は気づかなかつたが、解除した途端に全身の関節が軋み、すべての

筋肉が悲鳴を上げた。知らず知らずのうち、限界を遙かに超えた運動をしていたらしい。

それはきつと、マリアもデイジーも同じだろうに、

(なんなの、この人たち……)

熱いシャワーを浴びただけで会議室を確保し、事後ミーティング。

(最古参のアルテミスである白藤さんはともかくとして……)

小柄で童顔、人形のように愛らしい銀髪の少女・デイジーも、疲れた様子など欠片も見せず、ちゃんとマリアと議論している。

外回りをしていないときには新人の晶と同じ特訓をこなしているし、休憩時間にはいつもなにかしらの論文を読んでいる。晶は晶で遺伝子工学や生化学の集中講義を受けているが、それはアルテミス構成員の義務だからそうしているだけで、休み時間を使って自習するだなんてとても無理だ。

とにかく、とんでもない人たちだ。私なんか、こんな人たちについていけるだろうか――と。

「……ら。晶」

「え？ あ……は、はいっ!」

呼ばれていることに気づき、思わず立ち上がって返事をしてしまう晶。

一瞬驚いたマリアが、すぐに冷ややかな笑みを浮かべて首を傾げる。

「初陣で疲れきっているのか？ あの程度の戦闘でそんな状態になるのは、フロントチームなど無理だ。辞める」

「……ッ!」

ついていけるだろうかと不安を覚えていたはずなのに、マリアの口調と表情にカチンときてしまった。

「絶対に辞めません！ いまは確かにこんな状態だけれど、すぐに追いついてみせます！ ……で、なんの話？」

開き直って前のめりになる晶に、マリアはやれやれと首を振る。

「結論から言おう。敵は遺伝子情報を大量に仕入れている」

「……え？」

話がまったく分からずに首を傾げる晶に対し、デイジーが肯きながら、

「UMAの生産数が増えているだけなら不適合死も正比例して増えるはず。しかし実際には反比例して減っているのですから、融合の成功率が上がっているのでしょうか」

短く補足説明。

ふたりの言葉と壁面モニタのグラフを照らし合わせ、晶もようやく話のアウトラインを把握する。

「ええつと……UMAは確か、単なる寄生ではなく遺伝子レベルで融合するのよね？ で、UMAが持っている遺伝子型と合っていない人間は、融合できずに死んでしまう……それがUMA不適合死。そこまでは理解した。でもどうして遺伝子情報を大量入手して結論になるわけ？」

「UMAとの融合は、DNA中のイントロンを介して行われるからだ」

これだけ言えば分かるだろう、と言

わんばかりのマリアの態度に、ムツとなる晶。毎日毎日パンクしそうな勢いで詰め込んでいる遺伝子工学関連の知識をひっくり返し、掻き捌いて、マリアの結論までの道筋をどうにかこうにか見つけ出す。

「イントロンというのはいわゆるジャンクDNAで、個人差が大きいよね。タンパク質合成には使われないから、いくら違っていても構わない」

「通常の細胞分裂なら、な。しかしUMAはイントロン部分にUMI遺伝子を挿入して融合するから、予めイントロン部分の正確な配列を知っておく必要がある。個人差が大きいといつても種族差ほどではないから、必要量のサンプルがあれば人間特有の変異パターンを網羅できるだろう」

「なるほど。でも、それってものすごく大量よね？ そんなにたくさん遺伝子情報が集まる場所なんて……やっぱり、病院？」

「違うな。病院で必要なのはタンパク質合成に関与するDNAの情報だ。ジャンク部分の情報は集積していない」

「じゃあ、どこから……」

首を傾げる晶に、

「十中八九、風俗関係だろう」

平然と応えるマリア。

対して晶は、みるみる真っ赤に。

「ふ……フゾク……って、それはその、あの、つまりその……」

「性産業です。おそらく、利用者の精液を回収しているでしょう」

「ふ……フゾク……って、それはその、あの、つまりその……」

「っ!? なに言ってるのデイズー! ダメでしょ子供がそんな……!」

「アタフタする晶を無視し、マリアとデイズーが壁の巨大モニターに顔を戻した。マリアがリモコンを操作し——いきなり、男根を唾えた若い女性の姿が映し出される。」

「な……なな、なにやってるの白藤さんっ!? ダメ、やめなさいッ!」

文字通り血相を変えた晶がマリアの手からリモコンを奪い取り、むっちゅむっちゅと淫らな音を響かせ始めたモニターを慌てて消す。

そんな晶に対し、あからさまに迷惑そうな表情のマリアと、相変わらず無表情なデイズー。

「資料読み込みだ。邪魔をするな」

「し、資料ですってっ!?」

「最低限の技法を習得しておかなければ、潜入捜査できません」

「せ……潜入捜査って……」

その必要性は理解できるが、それはマリアの役目だろう。デイズーは関係ない、この子にこんなものを見せてはいけない——口早に主張する晶に、静かに首を振るマリア。

「私は顔を知られすぎている」

「あ……そ、そうよね……」

対オーパス用戦闘組織・アルテミスは、ありていに言ってしまうれば白藤財団の私兵組織だ。立ち上げ当初は軍や警察と衝突することもしばしばで、その折衝には白藤家の一員としてマリアが当たっていた。トップモデル顔負

けの美貌は広報にも積極的に使われているから、日本はもちろんのこと、世界中に顔が知れ渡っている。

普通の潜入捜査なら変装できるが、風俗店となるとそうもいかないだろう。髪は染めればいいとしても、鋭利な眼差しやギリシャ彫刻のような美貌、ゴージャスボディなどは誤魔化しようがない。

「分かったら、リモコンを返せ。デイズーに覚えてもらわなければならん」

冷やかな目をして掌を差し出すマリアを、キッと睨み返す晶。

「バカ言わないで! こんな子供に、そんなことさせられないわよ!」

「デイズーは見た目ほど子供ではないし、そもそも人権はない。公式には存在しない存在だからな」

マリアがよく分からないことを言うが、そんなことはどうでもいい。とにかく、だれかがやらなければならぬのは理解したが、デイズーだけはダメだ。絶対にダメだ。

「私がやる! それでいいでしょ!」

というわけで——新人隊員である晶が潜入捜査をすることになった。

白い床、白い壁、白い天井——通常より一回りほど大きな浴槽と見るからに清潔な洗い場。わずかな段差で仕切られているだけの隣の部屋には、キッチンと整えられたキングサイズベッド。

（ふうん? こんな風になっているのね……）

浴槽の縁に腰掛けて視線を巡らす晶は、ひとつきりの扉を開けて次々と入ってくるニヤついた男たちを、懸命に無視しようとしていた。

ひとりひとりチマチマ集めているはずはない、おそらく乱交OKな店があるはず——というマリアの推測は当たり、いくつかの店が候補に上がった。

そのうちのひとつが、ここだ。

都内に下宿中の女子大生と偽って店を訪れた晶は、面接で乱交OKと伝え、さっそくこの部屋を宛てがわれた。だから五人、六人と増えていく男たちは晶の客で、無視したくてもできない。いずれもパンツ一丁で、引き締まった身体つきの男もいないわけではないが、大半は醜く太っている。

「お! いたいた。亜紀奈ちゃんだ」

ニヤついた男が晶を見て、さらに相好を崩す。亜紀奈というのは店のオーナーにつけられた源氏名だが、本名に似ているのはいいことなのか悪いことなのか——。

「にしても……この間ニュースに出ていた新人にそっくりだな」

「だろ? だろ? 写真を見てピンときたんだ。この仔にはアルテミススーツがよく似合うって」

ヒソヒソと交わされる会話に、ああそれで、と納得する晶。

部屋に入る直前に店長から「これを着るように」と手渡された衣装は、E XSーツに似せたコスプレ用レオタードだった。エナメル質の光沢がある、

身体にピッタリ貼りつくような素材で、紅と黒のバランスが違っていたり胸や腹に大きくシースルーの部分があったり、肩が剥き出しになっていたりと、本物とは明らかに違うものの、所々に機械や装甲を模したような装飾があるし、御丁寧にバイザー付きなので、全体の印象はよく似ている。

（私、テレビに映っていたのか……）

晶の背に冷たい汗が流れ落ちる。いまはまだそっくりさんと思われているようだが、もし本物のアルテミスとバレたら潜入捜査は失敗だ。なるべく愛想良くして、「お金に困っている女子大生」を演じきらなければ——。

そんな晶の内心など知る由もなく、「さあ、こっちにおいて亜紀奈ちゃん。オジサンたちといいたいことしよう」

十人が入ったところで扉が閉められ、男たちのいやらしい笑みが深まった。強張る頬を懸命に緩めつつ、ゆっくり立ち上がる晶。

「じよ、女子大生の、亜紀奈です。よろしくお願いします」

店の者に指導された通り、男たちの前にしずしずと正座。三つ指をつき、丁寧な頭を下げてから、懸命に媚笑いを浮かべる。

その動きは、見るからに固い。

デイズーを守るために志願したが、もちろんこんなのはイヤだ。処女でこそないものの性経験はほとんどないし、性行為は言われているほど気持ちよくない、むしろどちらかといえば気持ち

悪いとさえ思っている。  
それがいきなり乱交だ。

「頑張らなければと思っているのに、類が強張り身体が疎む。」

「おや? 緊張しているのかい?」  
「こういうのは初めてかな?」

「正座した晶を取り囲み、猫撫で声を出す男たち。」

「は、はい……」

「おやおずと応える晶の胸元、薄布に透ける深い胸の谷間に、ねっとり熱い男たちの視線。」

「あ……ああ、見られて、る……!」  
「安物のレオタードはシースルー部分以外も布地が薄く、形良い胸の膨らみの先にはぼつん、ぼつん、と乳首の形まで浮き上がっている。」

「大きく形良い乳房、ほどよく引き締まったウエスト、ムツチリとした肉感的な桃尻、淑やかに正座した伸びやかな太腿——薄布に浮き上がった若い牝の艶めかしい体型を、粘つく眼差しが舐めるように這い回る。」

「いやあ、初々しくていいなあ!」  
「大丈夫だよ亜紀奈ちゃん。オジサンたちが気持ちよくしてあげるから!」

「う……あつ!」

「四方八方から伸びてきた手に、悲鳴が漏れそうになった。脇を抱えられ、腰に腕を回されて、グイッと引き起こされる。薄布に締めつけられた乳房や美尻をいやらしい手つきで撫でられ、反射的に打ち払いそうになる。」

「そのとき、晶の耳に小さな電子音。」

「耳朶に仕込まれた極小の通信装置が、マリアたちの声を伝えるから気をつけろ、と警告したのだ。」

「ストレス値が危険域に達しています。深呼吸してください晶さん!」

「ちょ、な……なんでテイジーがモニタリングしてるのよつ!」

「愛想を振り撒いて男たちをその気にさせて、早く済ませろ。精液回収者が現れてからが本番だからな!」

「他人事だと思つて、簡単に言つてくれるわね……!」

「こちらの音声もマリアたちに伝わるが、周りの男たちに怪しまれるから直接伝えるわけにはいかない。胸中に叫ぶだけに留め、顔には強張つた作り笑いを懸命に浮かべる。」

「晶のぎこちない表情や立ち姿を怯えたと勘違いしたのか、男たちの目の色がいやらしさを増した。」

「亜紀奈ちゃん、すごく美人だね。彼はいるの?」

「い、いません!」  
「本当? じゃあ、オジサンの彼女にしてあげよう!」

「そ……それは……あつ!」

「桃の实のような美尻をさわさわと撫でていた手が、尻割れに喰い込んで肛門に迫る。肌の色が淡く透ける腹回り、シースルーの薄い布地にゆっくり大きな円を描いていた掌は、逃げ腰になっている晶の股間に狙いを定め、五本の指を蜘蛛の脚のように蠢かせながら、太腿の付け根へじわじわ、じわじわと」

「這い寄ってくる。」

「や……むぷつ!」  
「やめてと叫びそうになった唇が、熱く柔らかなモノに荒々しく塞がれた。横合いから首を伸ばしてきた男が、いきなり晶の唇に吸いついてきたのだ。」

「むつ!? む、むううつ!」

「青いバイザーに押しつけられた、脂ぎつた男の顔。唇をこじ開けた熱い舌が晶の口腔に押し入ってきて、前歯や歯茎をぬつちよぬつちよと舐め回す。」

「(き、気持ち悪い……ッ!)」  
「反射的に突き飛ばしそうになったが、危ういところで踏み止まった。」

「(任務、任務よ! これは大事な任務なんだから……)」

「精液回収者に接触し、それを手がかりにして敵組織に迫る——そのためには、どんなにイヤなことでも我慢しなければならぬ。性行為が苦手な結城晶ではなく乱交OKな女子大生・亜紀奈になりきり、この獣たちをもつとその気にさせなければ……)」

「本気を出せば苦もなく倒せる男たちの間で、晶は勝手に動きそうになる手足を必死に抑え込む。」

「だがそれは、傍から見れば、昂る男たちに怯えたか弱い美少女の仕草。」

「キスされただけでガチガチになつちやつて……可愛いな亜紀奈ちゃん!」

「エッチは苦手?」

「は、はい……あ、いえッ! 好きです、大好きです!」

「正直に答えてから、慌てて言い直す。」

「精液を出させるのが目的だから、嘘でも好きと言っておかなければ——そう考えて一生懸命媚笑いを浮かべたのだ。が、要らぬ気苦労だったようだ。」

「無理しなくていいんだよ、亜紀奈ちゃん。本当は乱交なんてしたくないのに、頑張ってるんだらう?」

「頑張る女の仔は大好きなんだ。オジサンたち、全力で応援しちゃうよ!」

「ねっとりとした笑みを浮かべ、いつそいいやらしい手つきで、晶の胸や尻をモミモミモミ。」

「にしても……いきなり乱交つて、ずいぶん思いきつたもんだね。お金が必要なのかい?」

「え? え、ええ……弟が、難病に罹つてしまつて……やんつ!? あ……)」

「脇を潜つて胸に回つた大きな手に、形良い乳房をムギユツと揉み潰された。指の間から突き出た乳首は別の男に軽く抓られ、クニクニ、クニクニ、と感度を確かめるように揉み潰される。」

「(そうか、亜紀奈ちゃんは優しいな)」

「(弟のためなら、いつばいいつばい頑張らないといけないね)」

「ちょ、待つ……あつ!? うう、あ、あ……や、やめ……あうんつ!」

「くねる腰に太い腕がへビのように巻きつき、羞じらい強張る太腿に硬い指先が這い回る。伸縮する布地に乳房や尻、内腿の柔肌がさわさわと撫で回され、否応なく高められてしまう感度。」

「くねる背筋をツツツと撫でられ、感じやすい脇腹をこちょこちょとくすぐる。」

られ、むちゅ、ぬちゅ、と頬やうなじや剥き出しの肩に熱いキス。

「やんっ!? あ、あうんっ!?」

殴りつけたい衝動を懸命に抑え込み、男たちの間で身を縮めていると、

「ッ!?」

いきなり細い手首を掴まれた。

ただ無造作に掴まれただけなのに、ツボを押されたのか手指から力が抜ける。合気道のようなテクニクで易々と捻り上げられ、肩と肘をロックされて動かせなくなった細腕が紅い被膜越しにムニムニと揉み込まれ――。

「ほう? 女性にしてはいい弾力だ。痩せているのではなくて、引き締まっているんだな」

スポーツトレーナーなのか、精神な顔つきの真つ黒に日焼けした男が、晶の腕をいやらしい手つきで揉み回しながら、その筋肉を称賛した。

「腕を使う競技……: 武術系かな?」

「い、いえ、ラクロスです……」

「ほう? では、ランニングを増やしたほうがいい。尻から太腿にかけての筋肉が走るようにはできていない」

「やっ!? あん、あ……あ、ありがとう、ごさい、ます……うんっ!?」

腕から脇、脇から腰、腰から尻、尻から太腿――慣れた手つきでのマッサージが意外なほどに気持ちよく、羞恥に強張っていた筋肉が意に反して解き放たれてしまった。

「い、いけない……いや、いいの、かな……?」

精液を早く出してもらうためには、抵抗しないほうがいい。心まで委ねるつもりはもちろんないが、身体は男たちに預けてしまったほうがいいのかも――。

そう考え、晶は努めて力を抜いた。

耳の奥に電子音がして、

「ストレス値が下がりました。その調子です、晶さん」

「もつと声を出したほうがいい。我慢するな、晶」

デイジーとマリアの声が聞こえる。

「ううっ!? や、やめてよ、見られてること意識したら、身体が強張っちゃうじゃない!」

耳の先まで真つ赤になりながら、懸命に深呼吸を繰り返して脱力を維持。男たちの腕や胸に身体を預け、押されるまま、キングサイズベッドの上へ。

「うはあ……さすがゴッドハンド。あんなに固くなっていた亜紀奈ちゃん、急にふにやふにやになったぞ!」

「いや、まさかこんなに効くととは……: 余程敏感なんだな」

マッサージ技術を褒められた日焼け男が、晶の急激な変化をいのように解釈して納得した。

「ち、違う! アナタたちをその気にさせるため、わざと力を抜いたの!」

胸中で叫ぶ晶の左右に、ニヤついた男たちが貼りつく。シースルーの黒い薄布に形良いヘソが透けて見える柔らかな腹を、馴れ馴れしい手つきでさわさわと撫で回す。

「へへ……: ちよつと揉まれただけでエッチな気分になっちゃうのか」

「乳首こんなにおっ勃てて、いやらしいんだな亜紀奈ちゃん」

「え? あ……ッ!?」

慌てて胸を見下ろせば、安物のレオタードがずれ動き、乳房の先がカツプからこぼれ出ていた。シースルーの布地には淡く火照った肌の色が艶めかしく透け、美しい丸みの頂点を彩る肉豆は薄布を突き破らんばかりに熱く硬く痲つている。

「もつと揉み揉みして欲しい?」

「い、いや……: ひやうっ!?」

腕を取られて無理矢理開かれた脇に、男の太い指がさわさわ、さわさわ。よく練り込まれたしなやかな筋肉の下にある華奢な肋骨を探るような蠢きに、

「やんっ!? あ……: ううっ!?」

恥ずかしい声が次々と漏れる。

「や……: やめ……: むぶっ!? うう!?」

イヤイヤと首を振ると、隙を突いて唇を吸われる。すかさず差し込まれた舌が晶の歯茎を舐め、唾液をねろねろと流し込んでくる。

「や、め……: てっ!」

膨れ上がる嫌悪感を抑えきれず、身を振り脚を振り回す晶。宙を掻いた踵がだれかの顎にヒットして、うわあ、と声を上げた男が数人、ベッドから転げ落ちた。

「あ……: い、いけない!」

ハッと我に返り、周囲を見回すが、男たちは別に驚いてはおらず、むしろ

いつそうニヤニヤといやらしい笑み。巧みな愛撫と意識的な脱力のせいで全身が弛んでいたため、たいしたダメージにはならなかったようだ。

「いけない脚だ。こうしちゃうぞ!」

「やっ!? ちよ……: ああダメ、やだ、こんな格好……: ッ!」

膝裏を掬われ、大きく左右に開かれて、レオタードの股間が男たちの視線に晒された。柔らかな腹を覆うシースルーの布地は太腿の付け根まで広がっているから、よくよく目を凝らせば和毛の茂みが透けている。

薄布越しに見られるだけでも恥ずかしいのに、

「あ……: ああ、なんてこと……: !」

イヤイヤと腰をくねらせていたため尻からヘソにかけての布地がおかしな具合に引き攣れて、恥ずかしい割れ目がクツキリ浮き上がっていた。クロツチ部分は透けてはいないが、秘裂に喰い込んだ柔らかな裏地に繊細な粘膜炎弁がヌチュ、クチュ、と押し潰され心地よい微弱電流を発生始めている。

「暴れちゃダメだよ亜紀奈ちゃん。弟のためにお金が要るんだらう?」

「ジツとして。先生がすぐに気持ちよくしてくれるから」

晶の脚を四人がかりで押さえている男たちがニヤニヤと笑い、先生と呼ばれたトレーナーが晶の開いた膝の間に

のつそりと這い込んだ。

「ふむ……: やはり内腿の筋肉が発達しているな。どっしり構えたり、その場

で鋭く回転したりしていると、こういう肉の付き方になるんだが……」

どう考えてもラクロスではなく、武術系だよな、などと首を捻りながらも、日焼け男の両手は黒いシースルーの薄布越しに晶の伸びやかな太腿をさわさわと撫で回し、ムニムニと揉み込む。

「あつ!? や、やだ……この人、本当に……う、上手い……!」

たいして強く揉まれていないのに、男の太い指に触れられた部分がたちまち甘く蕩け、心地よく弛んでしまった。羞じらう心は膝を必死に閉じようとしているのに、

「あ、ンう……うう、ああ……」  
男の指が太腿の筋に沿ってスス、スス、と動くたび、腰から下の感覚が薄れて、膝裏を掏われた両脚がさらに大きく開かれてしまう。

「観念しろ、アルテミス!」  
「ッ!?」

いきなり叫ばれ、正体がバレたのか、一瞬心臓が止まりかけたのだが、どうやらゴッコ遊びのようだ。

「えー? 俺たち悪者お?」  
「そりやそうだろ。正義の味方を輪姦するんだから」

晶の歯軋りに気づかず、瞳をいつそうギラギラと光らせる男たち。  
「悪の組織に捕らえられて改造されちゃう正義のヒロイン……うはあ、チンコ硬くなるなあ!」

「じゃあ俺は、邪悪なマッドサイエン

ティストか? だったら、先生ではなく博士って呼んでくれ」

苦笑しながらもそこそこ乗り気な日焼け男が、すっかり力の抜けた晶の内腿に厚い掌を滑らせる。

「ッ!? な、なにを……あ? あ……そ、そんな……ッ!?」

膝から股間へ向けてグイ、グイ、と押されただけなのに、太腿の筋肉がたちまち蕩けて抵抗力を奪われた。巧みな愛撫は徐々に徐々に秘裂に迫り、肉敵の形を浮き上がらせた薄布を絞り出すように親指と親指、人さし指と人さし指の先端が合わせられて、

「あつ!? ひ……やあんっ!?」  
肉敵の縁がグイッと押し込まれる。途端、秘裂に反響する淡い快感。割れ目に喰い込んでいた薄布が抜け出ていくときに、繊細な粘膜花卉の端を軽くしごいたのだ。

「うう……ッ!」  
己の身体の恥ずかしい反応に頬を赤らめ、反射的に唇を噛んでいると、「改造する前に入念な調査が必要だ。素体の感度に合わせてユニットを作り替えなければならぬからな」

言い訳がましく言った日焼け男がおもむろに、晶の股間に顔を埋めた。

「やッ!? ちょ、なにを……あつ!?」  
薄布越しにグリグリと押し当てられる鼻、唇、顎。男の動きに合わせてレオタードの柔らかな裏地がずれ動き、繊細な肉敵や敏感なクリトリスがしこかれて、鮮烈な快感が閃いては消える。

「やだ、やめ……ああんっ!? そこは、そこは……あ、ううんっ!?」

マリヤやデイズに聞かれているから恥ずかしい声は出したくないのに、薄布越しに揉みくちやにされた秘裂があまりにも気持ちよく、抑えきれない。心地よい電流に撃ち抜かれた身体は右へ左へ泳ぐようにくねり、そのたびに力が抜けて、羞じらう気持ちすら蕩けてしまいうた。

「お前たちも感度を調査しろ」  
「了解です、博士!」

悪の組織ゴッコに興じる男たちが、ベッドに押さえつけられて動けない晶の身体に手を伸ばす。

「やッ!? あ……ううんっ!?」  
揉まれる乳房、くすぐられる脇腹、さわさわと撫で回される太腿——。ひとつひとつはそれほど巧みではないものの、身体中のあちこちを同時に責められると対処できない。

「あふ……くっ!? そ、そんなところ、まで……あうんっ!?」  
黒い薄布に透けた可愛いヘソにキスされ、顔を守るバイザーの隙間から額や頬を舐め回され、長く艶やかな黒髪を白い枕に妖しく振り乱す晶。

「敏感だなあ、亜紀奈ちゃん。ひよつとして、オナニスト?」  
「お、おな……ち、違いますッ!」

なにを言われているのか理解し、カアツと頬を赤らめながら叫ぶ晶。弛みかけていた気持ちが一瞬引き締まるが、

「ひやうっ!?」  
薄布越しにクリトリスを甘噛みされ、紅いレオタードに包まれた女体が弾けるように反り返り、鼻にかかった甘い声が溢れ出してしまった。

「はははっ! イイ声が出たなあ!」  
晶の耳許で笑った男が、舌を伸ばして真っ赤な耳朶をレチョッと舐める。熱い唾液のくすぐったさと気持ち悪さにビクビクと首を竦めれば、

「へえ? 亜紀奈ちゃんはこんなところでも感じちゃうんだ」  
「あんまりオナニーしていないのになんかに敏感ってことは、生まれつきの淫乱なんだな」

ねっとりした口調で嘲笑われる。  
「ち、ちが……あふっ!? だ、だ、ダメ、ダメ……むぷっ!? ン、ンう」

反論しようとした口が、男の唇に塞がれた。いままでより圧が強い。のたうつ舌に頬の内側を舐めまくられる。

「む、ンぶ、むう……ンあッ!?」  
荒々しい口づけに頬を赤らめ呻いてると、股間に再び鮮烈な快感。

肉敵の縁を菱形に押さえていた日焼け男の人さし指と親指が、クリトリスを甘噛みするリズムと合わせながらムニムニ、ムニムニ。柔肌に貼りつくようなレオタードの布地がわずかずつずれ動き、秘裂全体が絶妙な力加減で撫でまくられ、揉み捏ねられてしまう。

「ああ、いい匂いだ。亜紀奈ちゃんのオマンコ、もうヌチヨヌチヨだぞ」

日焼け男が笑い、晶の股間から顔を

おい  
信司

ちょっと  
おつかいを  
頼みたいん  
だが……

# 『Curse Eater 呪詛喰らい師』 コミックス好評発売中!



機関からの  
飛び込みの  
依頼

とある雑誌が  
電子書籍に移行する  
報を受け……

巷で男性が  
VR風俗に引きこもって  
戻れなくなるという  
怪異事件が発生中

淫神の可能性が  
あるため  
調査せよ!



お……

おおお!

Now Loading

★本作品の原作小説『呪詛喰らい師』の電子書籍版が無料でダウンロードできるぞ！詳細は表紙の裏ページにて。

これがVRの世界か

現実ときほど大差ないんだな

よんできてるもんだ



ここが機関が当たりをつけた店



なんでも揃うよろず屋へようこそ

いらっしやい

# Curse Eater

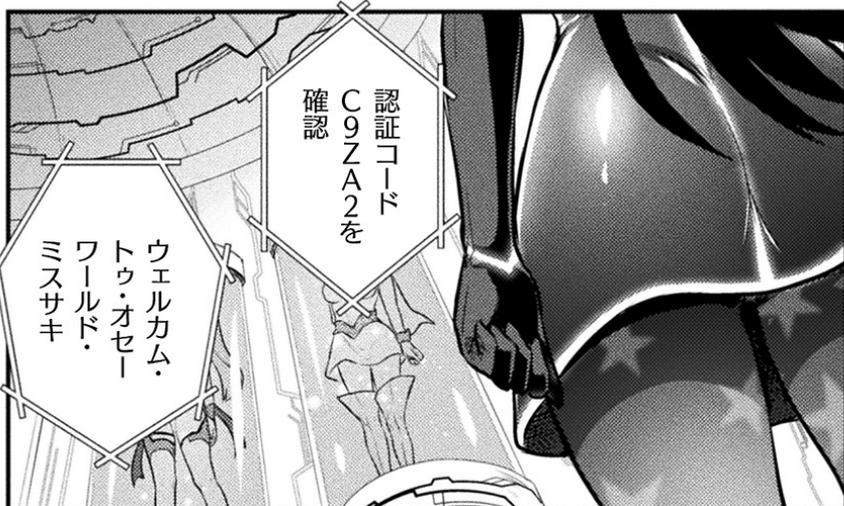
呪詛喰らい師

原作 Rusty Soul

漫画 あると 或十せねか

原案 おおいむらまさ 蒼井村正



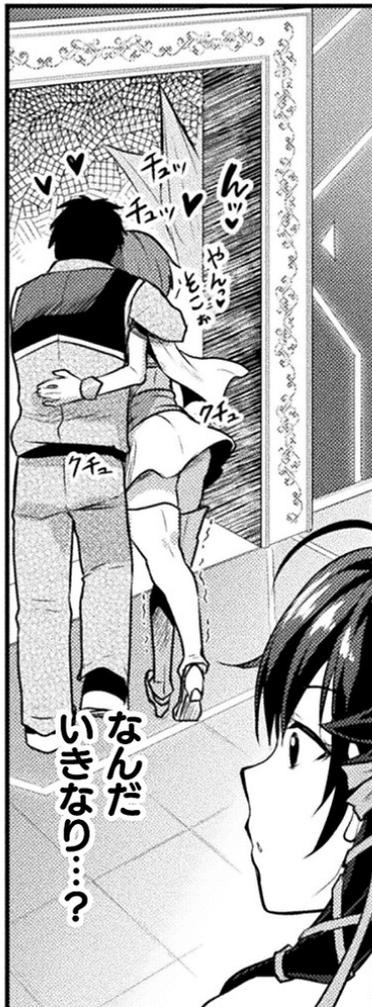




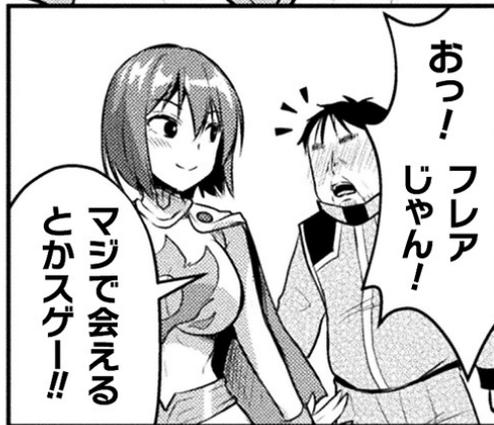
スゲー  
本物っぽい!

おお

ア  
ア  
ア



なんだ  
いきなり...?



マジで会える  
とかスゲー!!

おっ!  
フレア  
じゃん!



もちろん  
いーよ♡

なあ……  
やらせろよ





ハアアア

!!

この巫女装束  
思ったより再現度  
高いじゃないか!

どれ体の方は…

おいおい…  
私はこんな  
黒ずんだ乳首  
してないぞ?

こっちもこんなに  
ビラビラだし…

肝心な部分の  
作り込みが  
リアルより  
相当下品  
だな……

悪態がある  
だろう?!





うん？

この匂いは…



V R世界で  
催淫香…？

どうい  
う理  
屈だ？



仕組  
みは  
よく  
わら  
んが

この世界でも  
効果は発揮  
していること  
に違いなさそうだ

これがこの  
淫神の力か？





この乳で  
神伽とか  
やってんのか

マジ  
たまんねーな!



ああいかにも  
そうだが?

あ…あのツ  
カース  
イーターの  
常盤城咲妃!?



マジで  
エロ巫女だ

おっ咲妃が  
いたって?

やっと見つけた!!



おいおい…  
気安く触って  
くれるなあ…

うれしい  
クセに  
この  
ピッチ巫女が

カシタンに  
脱がされるとか…  
やっぱり紛い物だな



なんだソレは?

そんなオナセリク  
初めて聞いたぞ!

だから咲妃さんに  
祓ってもらわないと  
かもで…



ああの…

もしかしたら俺  
淫神の素質がある  
かもしれない…

欲望を力に変える悪の異能集団「アヴァロン」の総統カラミティ

彼女は支配した女性達を不特定多数の男性とセックスさせ欲望を吸収し力を最大限に増大

宿敵魔法少女美沙に最後の決戦を挑んだ

しかしその行為は相手の逆鱗に触れるものでもあり

結果カラミティは敗北したのだった

戦いの終わりに 浮獄の始まり

# 魔法少女が 売女に堕ちた 白

すけさぶろう

漫画 助三郎  
COMIC

★助三郎先生の人気作『黒薔薇の騎士 聖帝ローザ』（コミックス版）の電子書籍版が無料でダウンロードできるぞ！ 詳細は表紙の裏ページにて。



可哀想に…記憶は消してあげるからね



由紀子ちゃん…



ククク…  
可哀想だと？



我は…その者共に  
雌の幸せをくれて  
やったのだよ…

最後まで  
馬鹿な事を…



アッ!

アッ!



私には雄君という  
恋人がいるんだから



そして  
私の身体に異常が  
出る事もなかった



雄君に呪いの事は  
黙っていたけど  
彼は毎日のように  
私を愛してくれた





おや  
美沙ちゃんじゃないか

ご…<sup>こんた</sup>権田さん

うっ…この人苦手…



危ないなあ…

角をいきなり  
飛び出すなんて…

ご近所の人だけど

会う度に私の身体を  
舐め回すように見るから…

すみません…



今も視線が  
纏わりつくように…



もしかしたら  
足を痛めたかな？

あ…はい  
そうみたいです



…!?  
何？ 権田さんの視線を  
意識したら身体が熱く…



僕の家近いんだ

ちょっと寄って  
治療するといひ



こんな人に  
ついて行くのは危険…

ああ…でも  
そんな人を疑っちゃ駄目かも…

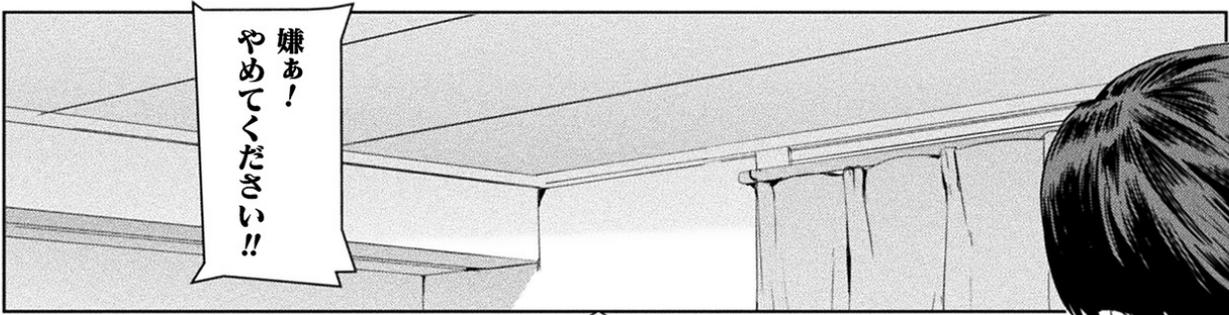


ま…また

権田さんの視線で…



は…はい…



嫌あ！  
やめてください！！



男の部屋に来て今更  
何を言ってるのかなあ？



私そんなつもりじゃ…



そうかお小遣いが  
欲しかったんだね？



受け取ったね？



お金で女性を  
買おうだなんて  
なんて下劣な…

…でもこんな…？



それじゃ  
いただくよおおん

だ…駄目え!?

ああ!?!  
おあおん♡♡



感度イイねえ  
コレもきつと  
気に入るよおん

え…脇…を…



何なの？

胸を舐められただけで  
身体中に何か走って…

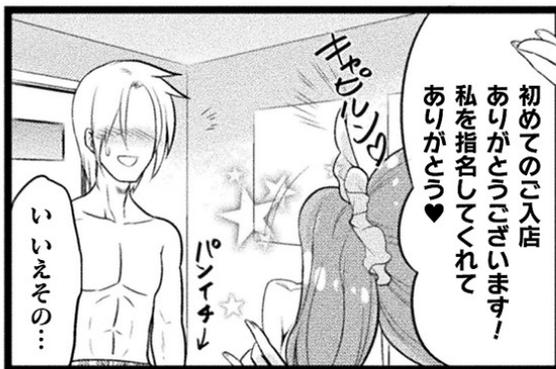


ええええ…  
こんなあ…あああ!?



雄君の時はこんな事…  
あああ!?!  
こんなの知らない!!

こんなところで!?



ぴゅあ  
レモンティー

Pure Lemon Tea

ローションパワーで折檻よ!!

悪の幹部と美少女戦士が  
再び邂逅を果たす...!!

現役時代

# 虚勢はってなんぼ



# 冷静になっちゃヤバイやつ





淫らに歪められた文化祭で  
少女の肢体は快樂に墮ちる

淫乱

2-1  
メイド  
カ

# 闇魔少女 中々

## 敗北魔少女の学園祭裏オプ売春

★本作のオリジナル作品  
『光魔少女メイ 拘束魔具の虜』の  
電子書籍版が無料でダウンロードできるぞ！  
詳細は表紙の裏ページにて。

小説 NOVEL / たかおか ちから 高岡智空 / 挿絵 ILLUSTRATION / くさかみあきら 草上明

「それではあ、我がクラスの学園祭での出し物はあ——」

「チョークを手にした制服の少女が、ニヤニヤとした笑みで溜めを作り、注意が集まったところで先を続ける。「芽衣と八千代をメインホステスに据えた、ドスケベツーショットキャパクラに決定です！」

「朗らかな声に喝采と拍手が響き、名指しされた二人——響芽衣と常峰八千代に、クラスの視線が向けられた。「中身はあ、いわゆるセクキャバってやつだけどお——二人にしてみたら得意分野みたいなもんだし、問題ないよね？」 それじゃ、よろしく！」

「採決の結果とはいえ、実行委員からとんでもない提案を口にされているというのに、短いポニーテールとたわわな乳房を揺らした芽衣は気にした様子もなく、淫靡に唇を緩ませ、周囲にヒラヒラと手を振り、笑顔を撒き、たっぷりと媚びを売って科を作る。

「はぁ、い、がんばりまっす♡」  
その笑みと仕草には、いかにも男好きだという気配が滲み出ている。周囲の男子が芽衣の痴態を想像し、股間を膨らませているのを察して舌なめずりをし、下の唇すら緩ませるほどだ。

「そんな好意的な芽衣の反応とは対照的に、指名されたもう一人の少女——長い黒髪を振り乱して立ち上がった八千代は、勢いよく机を叩き、ニヤニヤ笑いの実行委員を睨みつける。「ふざけないでちょうだい！ 外部か

らも来客がある行事で、そんな……！ 売春行為を出し物にするなんて、大問題になるわよ！」

「至極真つ当な、当然の反論——けれど、それがこの場ではなんの意味も持たないことくらいは、八千代も理解していた。現に、彼女の言葉を受けたクラスメートはクスクスと笑うばかりで、まともに取り合おうとはしない。

「ふふっ♡ いまさらなに言ってるのかなあ、八千代ちゃん？」  
そんな皆の言葉を代弁するように口を開いたのは、先ほどまでの媚びきつた微笑みではなく、愛情に満ちた嘲笑を浮かべる芽衣だった。

「リンド様と私の力は、もう学校だけじゃなくて——隣や、そのまた隣の町にも及んでるんだよ？ よっぽど遠方から来るお客さんじゃない限り、この学校のいつもの風景としか思わないから、安心して接客しようねえ！」

「芽衣っ……」  
糾弾する言葉を吐こうとするも、そんなことをしたところで暖簾に腕押しだ。自身を取り巻く絶望的な状況を思い返し、八千代は唇を噛んで、周囲への罵倒の言葉を飲み込む。

「いったい、いつまでっ……こんな狂った世界で、弄ばれ続けなければならぬのっ……」  
これならばいつそリンドの企み通りに、世界が闇に覆われたほうがマシというもの——そんな風に考えそうになる弱気を、頭を振って払いのけ、八千

代は現状の把握に努める。  
（なんとか、あの忌々しいクソ犬……リンドを出し抜かないと——）」

「事の起りは、おおよそ半年前。春を過ぎ、そろそろ初夏を迎えようかという頃、八千代は『それ——闇を纏ったかのように黒い、邪悪な獣と遭遇した。』

リンドと名乗ったその獣は、犬か狼を思わせる外見ながら、大型肉食獣のような巨躯であり、それでいて理知的に言葉を話す。話された内容は、魔法や異世界といった荒唐無稽なものばかりだったが、目の前にいる巨大な犬が話すのを見ては、疑うほうが現実逃避していると思われた。

その話で八千代が興味を惹かれたのは、闇の魔力の氾濫による世界の破壊と再創造、という部分である。八千代は自身の望みのため、闇の世界から来たという魔犬に協力し、この世界の破壊と創造を目論むこととなった。

リンドに血を与え、闇の魔力を手にした八千代は闇魔少女ヤミヨとなり、異世界と繋がる扉である学園に拠点を構える。扉のこちら側を闇の魔力で満たし、闇の世界から氾濫する魔力の呼び水にするためだ。

だが、リンドが闇からの使者であるならば、光からの使者も存在する。闇の氾濫を堰き止めるため、光の世界からやってきた魔蛇は、リンドと八千代がそうしたようにある少女と契約を結

び、彼女を光魔少女として、ヤミヨたちと戦いを挑んできた。

少女の名は、光魔少女メイ——。本名を響芽衣という、天真爛漫で明るい性格の、絵に描いたような優等生である。断じて——いま八千代に向けているような、淫靡な笑みを湛えるような少女ではない。

（……こうなってしまうのも、すべて私が原因なのだけだね……）  
私生活においても八千代を上回る優等生である芽衣は、魔少女としての才覚も別格であり、闇の侵攻は遅々として進まなくなる。そんな中でヤミヨは、メイの唯一の弱点ともいえる優しさに付け込み、自らの八千代としての顔までも利用し、彼女を狡猾な異に欺め、なんとか勝利を手にした。

それが、自身の破壊を促す第一歩となることなど、知る由もなく。  
（……あれだけ、他者を信用してはいけなくて戒めていたというのに……なぜ私は、あれほど——あの魔犬を、信用してしまっていたのっ……）

あるいはそれも、闇の魔力によって意思を誘導されていたのだろうか。いずれにせよ、大いなる自業自得の代償を、八千代は受けることとなった。

まんまとメイを貶め、ついに闇の氾濫を招くときが来たと勝ち誇ったヤミヨだったが、その成果はすべてリンドに奪われてしまう。メイとの契約を上書きし、彼女を闇魔少女としたリンドの魔力はもはや、ヤミヨのそれを軽く

凌駕していた。

魔少女のメイを使い魔として従えたリンドに魔力を奪われ、ただの人間に戻された八千代は、彼の手駒となった芽衣により、それまで彼女が演じた以上の痴態を、延々と演じさせられる立場に貶められている。元はメイのパートナーであった光の魔蛇シユカも、魔力を扱えない無力な人間の姿に変えられ、同じ境遇に陥っていた。

そうして、その状況がすでに数ヶ月も——夏を過ぎ、秋の修学旅行も終え、秋の終わりとという学園祭シーズンに近づいてなお、続けられている、というのが現在の状況だ。先に芽衣が口にした通り、闇の魔力は八千代が手引きしていたときの数倍の速さで侵食しており、扉の崩壊は間近だ。

それを阻止できる唯一の立場である八千代もシユカも、いまだその力を取り戻せてはいなかったが、それでもまだ、すべてを諦めたわけではない。

◇

「んふううっ……くっ、ふうっ……んっ、あつっ、あぐっつ、うううっ！んひっ、ひいっ、いひああつっ♡」

教室中に響くひと際大きな甲高い嬌声に、八千代は意識を引き戻される。

先ほどから絶えず流れている喘ぎ声と淫らな水音は、副担任としてLHRの監督をさせられているプロンドの養護教諭が、男子生徒の手で弄ばれ、奏でさせられている羞恥の音だ。彼女の名は須賀——と、生徒たちは

認識しているが、それはリンドらの闇の魔力によって植えつけられる偽りの情報である。魔力を奪われ、生徒たちの欲望を煽るセックスシンボルとしての役割を務めさせられているが、彼女こそ、かつてのメイのパートナーである光の魔蛇、シユカだ。

その人間としての姿は、光の世界での姿を忠実に再現させられているらしく、いまの彼女は本来の姿でありながら、なんの力もない存在へ貶められているということになる。そんな状態で、ただの人間から好き放題に罵られ、想像を絶する快感に晒されているなど、彼女の恥辱は想像するに難くない。

しかも、こうした淫行は人々の負の感情を刺激し、闇の魔力の増幅を助け、つまりは闇の氾濫を助長することに繋がっている。光の世界の住人でありながら闇の侵攻を助ける儀式を行わされるなど、どれほどの屈辱だろうか。

それでも——彼女は自らの感情を嘔み殺すように、すでに数ヶ月も、屈辱的な虜囚の身に甘んじている。その理由はただ一つ、リンドを葬り去る唯一の希望を信じているからだ。

「ちよつとおく、須賀せんせー？ 採決は終わりましたけど、内容の打ち合わせはこれからなんです、もう少し静かにしてもらえますか？」

「んっ、ふうっ……ご、めん……なっ、ひや……いっ、んうっつ、くひいっつ♡ はひっ、いいいんっ♡」

進行を務めていた実行委員の擲楯と

嘲笑に、シユカは喘ぎをこらえるように謝罪しながらも、結局は耐えきれずに艶めかしく喉を晒し、濡れた嬌声を高らかに叫ばされる。その白い肌、豊かな乳房、熟れた尻房を男子たちの手で自由に弄ばれる彼女の瞳は、快樂と羞恥に染め抜かれ、色に溺れきった女特有の蕩け方をしていた。

ただ——その蕩けた眼差しには強い光がまだまだ残っており、その光はジツと、八千代を見つめている。

(……ええ、わかつているわ……いまはまだ、なにもできない——)

悔しいことではあるが、八千代にもシユカにも、残されている力はほとんどない。そんな状態で抗ったところで、圧倒的な力を前に鎮圧され、恥辱の屈辱を強制されるだけだ。

だが、その圧倒的な力こそが、二人の信じる唯一の希望でもある。

(なんとんでも、芽衣を……あのクソ犬の呪縛から解き放ち、こちら側に……光魔少女に戻ってもらおう——)

強大な力を持つリンドと、彼に性的な支配権を握られ、絶対的な忠誠を誓っているメイの関係は、非常に強固で揺るぎない。だが、二人の力にはそこまで大きな差はない——というのが、シユカの出した判断だった。

それならば、メイが再び光の側に立つて戦ってくれさえすれば、まだ八千代たちにも逆転の目はある。その目を導く方法すら思いつかない現状ではあるが、些細なきっかけすら見逃さない

ためにも、二人は心を強く持ち、状況に流されても、決して溺れることにはなつてはならない。

そうして、絡み合う視線で互いの意思を確認し合っていると——。

「——ね、二人とも♡ なーんでそんな顔で、色っぽく見つめ合っちゃってるのかなあ？」

横合いからかけられた芽衣の言葉に、考えが見透かされたのかと、八千代は小さく肩を跳ねさせる。

「へ、別に……見つめ合ってなんて、いないわ……」

「ふうん？ ま、最近の二人が仲いいのは嬉しいんだけどお……やつぱり、ちよつと妬げちやうかなあ？」

スルリと蛇のように腕を絡みつかせ、抱きついてくる芽衣からは、彼女自身の甘い体臭に混じり、仄かな精臭が漂っていた。

数ヶ月の調教で、そのおぞましい臭気にすら快感を覚え、発情させられるように変えられた八千代の身体は、しつとりと汗を滲ませ、乳首が硬く膨らみだし、淫裂が潤み、緩んでいく。生まれた疼きに下腹部を蕩かされ、息を荒くしながら、八千代は頬をすり寄せる芽衣の、考えを見抜こうとする視線から顔を背ける。

「まあ、そうね……いまのあなたに比べたら、彼女のほうがよほど、仲良くし甲斐があるでしょうね」

「えー、そんなあー♪ 私はいつでもどこでも、八千代ちゃんとラブラブイ

チャイチャヤして、仲良くしたいな〜って思ってるのい〜♪」

どこまで本心なのか——否、それはどこまでも、彼女の本心そのものなのだろう。その言葉が指す内容が歪みきっているだけで、芽衣はこんな状態になってなお、自分と仲良くしたいと思っ

ているのだ。そんな芽衣の姿と言葉に、八千代は複雑な思いが込み上げる。本来の意味から歪められたその言葉は、芽衣ではなく自分が歪ませたものだ。どこまでも朗らかで爽やかだった彼女を、ここまで陰湿で粘着質に、けれど変わらずまっすぐな在り方へ歪ませるとは、自分の抱えていた闇の深さも、案外と馬鹿にできたものではない。

(……だからこそ、本気ですべてを変えられると信じていたのよね……)

こうして見比べると、芽衣の力がどれほどのものだったか、痛いほどに理解できてしまう。魔力の源は心であり、八千代——ヤミヨの持っていた闇の魔力は、心に蓄えられた負の感情によって生みだされていた。それは確かに強力であり、メイをしばしば苦しめていたはずではあるが、それはやはり、彼女が自分を想って手加減していたために他ならない。

彼女の感情が正の方向へ向かい、生みだされていた光の魔力の大半が、いまは闇の魔力に切り替わっている。それはヤミヨの持っていた魔力より何倍も濃く、重く、深さの知れない強大な

ものとなっていた。

(まるで、子供と大人……私はずっと、芽衣に手加減され続けて……それで對抗していると勘違いして、罨を使っ

て追い詰めて、結局——) 目的のために、自分はどこまでも冷静なつもりだった。しかし、いつしかその目は曇り、芽衣への対抗心から直情的になっていたのか、彼我の差が理解できていなかった。

それがわかっていけば、今頃こんなことにはなっていないかつたのでは——そんな「もしも」を想像し、現実逃避が過ぎると思わずせせら笑う。

ん、どしたの、八千代ちゃん？ いまの、なにか面白かった？」

「いえ、別に……少し、らしくないことを考えてしまっただけよ。そんなことより——」

ともかく、いまは出し物のことを考えなければ。いかがわしい売春施設を回避できなければ、それらは周囲の淫らな感情を増幅させ、また闇の気配は大きく膨らんでしまう。もつともらしい言い訳を作り、軟着陸できる提案をして、なるべく真つ当な出し物に変更できればベストだ。

芽衣の思惑に乗りつつ、抵抗し、心を揺さぶり続ける——いまのところはそれが、芽衣を光へ戻す唯一の手段だと、シユカとの相談で結論づけられている。そのため、彼女と争うに相応しいなにかを提案しなければと、八千代が思考を巡らせていると——。

「そうだね、そんなことより——頑張ろうね、セ・ク・キヤ・パ♪」

「いや、だから——」 続く芽衣の言葉が、八千代の思考に冷水を浴びせた。

「きつと——八千代ちゃんのお母様もいらつしやるだろうから、頑張つてるところ、たつぷり見てもらおうね♥」

視線を背けていた顔が自然と、彼女のほうへ向けられる。自分の表情が強張っていることには気づいているが、感情を浮かべることができない。

そんな八千代の顔を、芽衣の無邪気な笑みが見つめている。心の奥底を見抜く——などというものではない。(全部わかってるよ、知ってるよ。だから安心していいよ♪)

そう語りかけるような笑みが、不気味さとともに心を締め上げ、八千代から呼吸と顔色を奪っていった。

「あ、なた……なせつ……どうして、知っているの……そのことを！」

「だからあ、言つたでしょ？ 二人が仲いいの、妬げちゃうなあ〜つて♪だから私も、もつとも——と八千代ちゃんの、知りたいなって思つてえ

全部、調べておいたよ♥」 どうやって——などと問いただす必要さえない。魔法を使い、あらゆる人間を従えさせられる彼女にしてみれば、手当たり次第に聞き込みをするだけで、断片的な情報など山のように拾えるはずだ。それらを精査し、より詳しい事

情を知る者に語らせれば、八千代の——だけでなく、誰の秘密であろうとたちまち明らかになる。

「芽衣……まさか、まさか——」 「あはつ、大丈夫だって、そおんなことしないよお♥ 八千代ちゃんのお母様には、指一本触れてないし、魔法だつてかけてない……そんなことして八千代ちゃんに嫌われたら、私だって悲しいもん、ね♪」

フニユリと頬を突かれ、ようやく彼女の手が顔を撫でていることに気がついた。ピクリと肩を跳ねさせた八千代を強く抱き締め、芽衣が囁く。

「そんな、なあんにも知らない、普段と変わらないお母様が——学園祭で一生懸命働いている八千代ちゃんの姿を見たら、すごく驚くだろうね♥」 せつかくだし、お母様の目の前で接客してみせるっていうのはどうかなあ？」

これが本当に芽衣なのかと思わされるほどの悪意が、言葉と笑顔の端々から滲んでいた。腰を抱く手指が食い込み、錆びたナイフのようにじわじわと痛みを与え、恐怖を煽ろうとする。

否——恐怖を、ではない。

「きつと涙を流してよろこ——」

「芽衣いいいっつ！」 猫撫で声の脅迫が言い終えるより早く、八千代は心の奥底に膨らんだ怒りを爆発させ、魔力へと変換する。

「だめつ、八千代——んくつつ、いあつ、んうつつ、あああああつ♥」

すぐさま喘ぎに塗り潰されたシユカ

の声は、確かに耳に届いていた。だがそれでも、明確なまでの挑発であったとしても、芽衣のこの行動だけは看過することなどできなかった。

よりにもよって、大事な母を巻き込もうとすることだけは――。

「こうなっていることも、お見通しだったんでしよう……これで満足できたかしら、芽衣っつ！」

「……ふふっ、嬉しいなあ♥ 八千代ちゃん、そこまで私のことをわかってくれてるなんて、最ッ高ッ」

放たれた魔力によって生まれた防壁、それをかわすように軽く距離を取った芽衣は、息を荒く吐く八千代の姿に、ニマアツと唇を歪めた。

「久しぶりだね――ヤミヨちゃん♥」

そう呼びかけられた八千代の姿は、下着じみたセパレートの着衣と、肌が透けるほど生地の薄いローブマント、そして口元覆うマスクペールを纏った姿――闇魔少女ヤミヨのスタイルへと変じていた。ただし、溢れだす魔力は闇ではなく、光のそれだ。

「なるほどねえ、シユカと契約したんだ……あはっ♪ どっちも浮気者なんだからあ、このピッチペアめ♥」

「つ……あなたには言われたくないわ、真性のクソピッチがっ……」

「そんなに褒めないでよお♪」  
穢れきった最底辺の性処理女であればあるほどよい、そんな歪められた価値観の芽衣にとっては、相当の褒め言葉だったのだから。二人に向けられた

言葉も、あるいはそういう意味だったのかもしれない。

頬に手を添え、嬉しそうに腰を振る彼女を前に、怒りで表情を歪める八千代は、僅かな後悔を抱きつつも、芽衣に向けて乗馬鞭――杖を構える。

「本当は、この姿を見せるつもりはなかった――だけど、あなたのやつたことは許さない、絶対！」

リンドと芽衣の目を盗み、シユカが生みだしたなげなしの魔力によって、なんとか果たすことができた光の契約。リンドとの仮契約を上書きする形で結ばれたそれは、八千代たちに光の魔力を与え、リンドらの影響を受けない光魔法を行使させることが可能だ。

だが――元になった魔力の少なさもあり、相手のどちらかが少し本気を見せただけで、たちまち抵抗の力は奪われてしまう。それほどまでに弱い力だからこそ、これはいざというときまで隠しておく、とっておきだった。

そんなシユカとの約束をあつさり破棄したことは申し訳なく思うが、自分にとつて譲れない一線を越えられては、感情など抑えられない。

「来なさい――いえ、こつちからやらせてもらおうわよ！」

「はあい、ご自由に♥」

どこまでも余裕を見せ、魔少女スタイルにすらならず、短いスカートの裾を掴まんでお辞儀する芽衣。周囲のクラスメートたちは、何事かと驚いた様子で眺めてはいるが、八千代への低評

価が、たいしたことではないだろうとタカを括らせ、ちよつとしたショーでも楽しむような態度を見せている。

「なら、遠慮なくっ……」

日頃の鬱憤もあり、そんなクラスメートたちをも巻き込む形で魔法を放とうと、八千代は詠唱しながら杖を振りかざす。けれど――。

「光よ――んはううっっ!？」

その直後、下腹部を抉るように生まれた快楽と脱力感に、足腰が崩れ落ち、八千代は蹲るように膝をついた。

「はっ、がっ……んううっ! ふくっ、あっ、はあっ……やつっ……」

「あはははっ♪ 忘れてたのかなあ、八千代――ヤミヨちゃん? 修学旅行のときにつけてあげた、私たちの愛の結晶ちゃんのこと♥」

それは――かつてヤミヨが生みだし、メイに取りつけ、私生活においても苦しめ続けた淫らな触手拘束具、サキユミミックだ。メイの魔力で復活し、改良を施されたそれは、普段はショーツのように淫部を覆って張りつき、不浄の穴を満たした状態でおとなしくしている。けれど、ひとたび空腹になれば、八千代の官能をくすぐる刺激をこれでもかと浴びせかけ、どこでなにをしていようとオルガスムスに導いてくる、ひととき厄介な存在だった。

「あうっ、んっふううっ……はあっ、んっ、な、ぜ……こいつは、さつきい……んいっ、ひいっつ! あっ、さ、さつき、いっばい……」

「そうだねえ♥ 私の見る前で八千代ちゃんにアクメキメさせまくって、オマンコ汁でお腹いっぱいにしてたよね♪ でもお――ダメだよ? そんなおいしそうな光の魔力、その子の大好物なんだから……すぐにお腹空かせて食べたくなっちゃうっつてば♪」

そう――サキユミミックの特徴は、宿主の身体だけでなく、その魔力にまで寄生し、定着してしまうことだ。いままではメイの魔力で存在を保っていたようだが、八千代が魔力を持ち、行使したことで存在を認識し、本格的な寄生を果たそうとしているらしい。

「し、まつっ……んぐううっつ! はっ、やつ……んふううっつ♥」

小さな前張り程度のサイズだった魔具は下腹部や太ももまで覆うほどに面積を広げ、内側にピッシリと張りついた細かな触手で、ヤミヨのデリケートな部分を舐め回してやる。

（んあっ、あつっ、うううっ……だめえ……あんっ、んううっ♥ ち、力入らな、ひっ……いんっ♥）

芽衣に密着され、体臭を嗅いだときから潤み始めていた肉襞は、濡れた触手にねっとり舐め上げられ、たちまち熱く蕩けだしていた。緩んだ肉穴はパツクリと口を開き、そこから滝のような蜜汁が滴って、張りついた触手シートへジュルジュルと吸り上げられていく。肉穴の手前、桃色の肉ピラを隙間なく触手が這い、無数の舌のような刺激で絶え間なく粘膜を舐られると、

気が遠くなるほどの快楽が走り、四肢どころか身体中の力が抜け落ちるようだった。

「んひやつ、はつつ、ふうつつ♡ あつ、ひつつ……んいひつつ、いあつつ、やああつつ！ やつ、めつつ……んぐつつ、そ、れえ……ああつつ、だめつつ、出入りい……ふぐつつ、んくうつつ♡」

不浄の穴を満たす極太触手が短くストロークし、背徳的な官能を刺激してやまない。それに合わせて、広がった触手が下腹部やへそ周りにまでヌルついた刺激を這わせ、太ももにも無数のキスマークが刻まれていった。

「あああん♡ほんつとカワイいなあ、ヤミヨちゃん♡……ね、もうイッチャう？ 私と戦おうとして頑張ってるのに、それも忘れてミミちゃんにイカされちゃうのかなあ？ そんな簡単に負けちゃうの、ねえねえ？」

「つつ……う、るつ……さいつ……私 はつ……あなたなんかにつ——」  
 床に伏し、這いつくばって舌を垂らしながらも、芽衣の言葉に反発を覚えたヤミヨは、震える腕で鞭を振るう。そこから放たれたのは弱々しい魔力弾だが、紛れもなく光の魔力の塊だ。

「うわあ、光の魔力……ふふっ♪」  
 それを見つめ、嬉しそうに微笑んだ芽衣は、やはり魔少女スタイルにすらなることなく、片手を掲げる。

「前は私が光、ヤミヨちゃんが闇だったけど——いまは逆だね♡こんな風に取り替えてっこそするのも、おそろいっ

ぼくて嬉しいかも♪」

呑気なことを口にする彼女の手の中には、禍々しい魔力が集まり、渦を巻いていた。暗雲を思わせる魔力塊は、まるで本物の雷雲になったかのようにバチバチと火花を散らし、閃光を放ち、かつてのヤミヨが得意とした魔法の片鱗を覗かせる。

「確か、こんな風に言ってたよね？ 闇よ——あと、雷よ♡」

芽衣が愛らしく呟くと同時、ヤミヨが使っていたものを数倍以上にもした、凄まじい電撃が迸った。その閃光は小さな光の弾丸など容易く貫き、霧散させる。勢いの止まらぬ電撃は、目を見開くヤミヨの眼前まで一瞬にして到達し、その脳天を痛烈に貫いた。

「がつつ……ああああ——つつ!？」  
 刹那、絶叫を響かせたヤミヨの身体は、電気ショックを浴びたように、バグンツと大きく跳ね震える。その衝撃は意識も思考も白く閉ざし、脳からの命令を奪われた身体は、糸を断られた人形のようにカクンと崩れ落ちた。

「……あ……う……」  
 「あ、ゴメンゴメン、ちよつと強すぎちゃったね♪ 次からはちゃんと、手加減してあげるから♡」

完全に意識を失ったヤミヨを見下ろし、それを悲痛な表情で見つめているシユカをチラリと見やつてから、芽衣は唾然としているクラスメートたちを、グルリと見回す。

「それじゃ——八千代ちゃんが寝てる

間に、話し合い進めとこっか♪ その前にみんなには、いま見たこと忘れとってもらうけどね♡」

◇  
 そうして——クラスメートたちに記憶操作を行った芽衣は、シユカに八千代の介抱を任せ、何事もなかったかのように会議を進めさせた。

その過程で、元の提案であったセクキャバという出し物は、少し形を変えらることになる。そのままの形では、芽衣と八千代しか接客ができず、回転が非常に悪くなってしまうためだ。

「——ということ、出し物はメイド喫茶になったよ♡ ほかのみんなも店員はやるから、安心してね♪」  
 保健室で目覚めた八千代は、介抱してくれていたシユカとともに、その話を芽衣から聞かされたものの、素直に信用などできるはずがない。

「……いつたいなにを企んでいるの、芽衣っ……今度は私に、なにをさせようっていうのよっ……」  
 「やだなあ、八千代ちゃん……企んでるだなんて、人間きの悪い♪」  
 悪戯っぽくウインクをし、元来の天真爛漫な態度と笑顔を見せながら、底意地の悪い声音を響かせる芽衣。

「私はただあ、八千代ちゃんと一緒に最底辺の性処理奴隷になって、愛してもらいたい、だ、け——あはっ♡」  
 それは「クラスの皆から」なのか、それとも——。

ふと浮かんだ考えが口をつきそうに

なったが、そこに踏み込むことは躊躇

われた。それに、これ以上このことを彼女に問いただしたところで、まともな答えが返ってくると思えない。

「……わかったわ。メイド喫茶も煩わしいことこの上ないけれど、セクキャバなんかよりは何百倍もマシね」  
 「そうそう、可愛い衣装も準備してるし、メニューもみんな考えてくれるみたいだから——八千代ちゃんも、できることで頑張ろっ♪」

それはつまり、当日までの準備期間において、いままで通りの役割を果たせということだ。再び始まる、凌辱と恥辱の日々を想像し、八千代は暗澹たる気持ちに包まれるのだった。

◇  
 そうして数週間が経ち、いよいよ学園祭の当日となったところで——すべてを知らされた八千代は、声もだせないほどの怒りを覚えさせられる。

「は……謀ったわね、芽衣っ……これのどこが、メイド喫茶よっ……」  
 クラスの女子がメイド服、男子が執事服を着ている中で、八千代と芽衣だけは、そのどちらでもない衣装を着せられていた。

かろうじてメイド服と呼べるのは、黒と白のカラーリングと、細かな装飾くらいだろう。肝心の衣装部分はメイド服というより、もはや水着、いっそ下着と呼ぶべき代物だ。小さな布地で股間と乳首だけをガードしつつも、客が気軽に露出させられるよう、ご丁寧

にファスナーまでつけられている。レ  
ース飾りやエプロンで誤魔化そうにも  
誤魔化しきれない、いかがわしい店の  
いかがわしい衣装——それが八千代と  
芽衣に与えられた制服だった。

とはいえ、そんな衣装を嬉しそうに  
着こなしているのが、八千代から糾弾  
されている芽衣である。

「そんなに怒らないでよ、可愛いメイ  
ド服でしょ、ほらほらあ♥」

小さい布地と細い紐を絡めただけの  
肢体をくねらせ、乳房や尻肉を揺らし  
ながら、芽衣が八千代の手を取った。

「なにをするの……やめっ、そっちは  
——ひ、引っ張らないで！」

「あははっ、だめだよ？ 八千代ち  
ゃんにはこれから、外でたつぷりと客  
引きしてもらうんだからね♪」

「じゃ、冗談じゃ——いやあっ！」

抵抗も空しく、ドアから引きずりだ  
された八千代は、呼び込みの看板を握  
らされ、芽衣と並ぶようにして廊下を  
歩き回らされる。出し物の当番でない  
在校生や、すでに入っていた外部客ら  
の視線は、一瞬にして二人の下着美少  
女へと集まり、好奇と蔑みの感情が大  
勢の男女から浴びせられた。

「こんなやつ、おかしいでしょ……  
ひ、人目につく前に、教室に戻らせな  
さいっ、早くっ……」

「それじゃ、客引きにならないでしょ、  
もうっ！ 今日までほとんど準備手伝  
つてないんだから、同伴客くらい捕ま  
えていかないと、みんなへのお詫びに

ならないじゃない♪」

準備ができなかったのは、男子たち  
の下半身の相手をさせられていたせい  
だ——という真つ当な反論など、いま  
の芽衣が聞いてくれるわけもない。

「それに——これは、負けた八千代ち  
ゃんへの罰ゲーム……お仕置きでもあ  
るんだからね？ いっぱいお客さん集  
めて、いっぱい可愛がってもらうまで、  
許してあげないから♥」

クスクスと笑う彼女の瞳に冷たい光  
を見つけ、八千代はゾクリと背筋を震  
わせた。勝負に負けたことを引き合い  
にだしてはいるが、本当にそれだけな  
のだろうか。自分に抵抗し、あまつさ  
え光の魔法を使った——つまりはシェ  
カと契約を果たした。そのことに対す  
る、嫉妬のようななにかを抱いている  
のかもしれない。

「……わ、わかつたわ……とにかく、  
喫茶店に客を呼べばいいのね？」

「そうそう、頑張ろっ♪」

応じた八千代の言葉に、すぐさま満  
面の笑みを浮かべ、怒りを鎮めた芽衣  
の態度にホツとする。だが、こんな頼  
りない布地だけの格好で客引きをする  
など、考えるだけで気が重かった。

普段から自分の痴態を見ている学生  
だけでなく、初めて見る中年や他校生  
子供までが大勢歩いている。この状況  
に違和感を覚えないよう、魔法で認識  
を改められてはいるはずだが、どこま  
での認識を与えられているのかが、  
八千代にはわからない。

だからこそ——彼ら、彼女らの嘲笑  
や視線、囁かれる侮蔑や劣情の言葉が  
耳に痛く、心に刺さり、なによりも被  
虐の心を揺さぶってきた。

「に……2年、C組……メイド喫茶  
して、ますっ……どうぞ、お誘い合わ  
せの上、お越しください……」

下腹部が熱く疼き、モジモジと太も  
もを擦り合わせての内股になりながら、  
八千代は看板を手に周囲へ呼びかける  
声をだしたことで、さらに多く向けら  
れた視線が、剥きだしになった白肌へ  
突き刺さり、下卑た感情が身体を舐め  
回してくるのがわかる。

「うへえ、すげえカッコ……」

「本当にメイド喫茶かよ、へへ」

「恥じらいとかないのかしら」

「ああいうのを眺めて、馬鹿にしなが  
らお茶するのめいんじやない？」

そんな客たちの——特に女性の侮蔑  
を耳にするたび、いたたまれなさに脚  
が震え、身体が熱く火照った。

（い、や……ああっ、見ないでっ……  
違うのっ、こんな……こんなはしたな  
い格好で、歩きたくなんてっ……）

なだらかな、けれど柔らかな膨らみ  
を押さえた小さなブラには、硬さを孕  
んだ乳首がツンと浮き立ち、ファスナ  
ーや生地を擦られ、ゾクゾクと快感を  
送り込んでくる。同じく面積の狭いシ  
ョーツには、トロトロと溢れ出る汗や  
愛液で、すでに染みが作られており、  
脚を振るたびにヌルついた感触が股間  
を撫でた。そのたびにビクッと跳ねる

身体は艶めかしく上気し、彼女が身を  
小さくすればするほど、その卑猥な光  
景に大勢の視線は集まってくる。

「ハアハア、いいよ、いいよ八千代ち  
ゃん、すつこく可愛い♥ その調子で  
次は、これも読んでみよっか♪」

そんな八千代の姿に満悦といった  
様子で、芽衣が嬉しそうにチラシを差  
しだしてきた。それを宣伝しろとい  
うことなのか——そう思っただけ目を通  
した瞬間、そこに込められた悪意を理  
解させられ、瞳が鋭くツリ上がる。

「芽衣っ……」

「素敵でしょ、私たちだけの、特別サ  
ービス♥ いっっぱいお金払ってもら  
えるように、いっっぱいアピールして  
いかないとねえ？ ほらほら、私も手  
伝ってあげるからあ♪」

言いながら、芽衣は無造作に八千代  
の尻房を掴み、柔らかさを堪能するよ  
うにムニムニと揉みしだしていく。普  
通なら不快感しかないはずの感触だが、  
八千代の尻肉はいまや、膣肉をも上回  
る性感帯へと成り下がっていた。

「んくううっ♥ はっ、ひやっ……  
んうっ、あっ、やっ……だ、めっ……  
んふうっ、くふっ、ふあああ♥」

撫でられ、揉まれるだけで、ペニス  
を挿入されているかのような甘い快感  
を生み、ゾクゾクと足腰が痺れ、立っ  
ていられなくなってしまう。その奥に  
窄まる尻穴などは、すべてが淫核にな  
り、指の一本も捻じ込まれようものな

ら、たちまちアクメさせられることは  
疑いようもなかった。

「ほおらあ、八千代ちゃん？ 早く読  
んで、大声で♥ 私たちのお、とつて  
おきのお——裏オプサービス♥」

「め、いいつ……んふつつ、ひやうう  
つつ♥ やつ、めえ……んうつつ！ よ、  
読む、からあ……んあつ、やつ……耳  
らめえ……んひい……」

尻房を鷲掴みにされ、尻穴を指先で  
擦りながら、耳をねつとりと舐め上げ  
られ、淫靡な表情を晒させられた八千  
代は懸命に訴える。そんな二人の美少  
女が絡み合う耽美な光景に、周囲には  
軽い人垣さえできており、なにが始ま  
るのかという期待感に満ちていた。

「あつ、と、当店ではつ、んつつ……  
とくつ、特別サービスのつ、お、オプ  
ションも、ご用意しており——」

喘ぎまじりにチラシを読み上げなが  
ら、八千代の顔は耳まで真っ赤に染ま  
る。こんな内容のメイド喫茶があるも  
のか、これならばまだ、最初に提案さ  
れたセクキャバのほうが幾分かマシだ  
つただろう。

「私つ……常峰八千代と、こ、こちら  
のつ……んつ、ああつ♥ ひ、響芽衣  
の二人はつ、料金別の、サービスチケ  
ットを扱っておりますつっ！ な、内  
容つ……んうつつ、内容、はあ……」

内股になり、腰を引き、尻房をツン  
と突きだして喘ぐはしたない格好は、  
後背位でエアセックスしているように  
しか見えない、淫ら極まりない姿だつ

た。そんな姿を見た男たちがゴクリと  
生唾を飲むのを感じ、懸命に姿勢を正  
そうとするが、芽衣はそれを許してく  
れない。尻肉に強く、けれど優しく指  
を食い込ませて、乳房を揉み捏ねるよ  
うにいやらしく撫で回し、汗ばんだ谷  
間に指を伸ばししてくる。

細くしなやかな、心地よい指の刺激  
が菊皺をなぞるように滑り、円を描き、  
時折ツブツブと軽い抽挿を繰り返して、  
八千代の理性を蕩かすほどの官能を流  
し込んでいた。ショーツはおもらしし  
たようにグツシヨリと濡れ、汗や愛液、  
半開きの唇から滴る涎などが、足元に  
ポタポタと雫の跡を刻む。

込み上げる肉悦に喘ぎがもれ、視界  
が霞み、なにかを欲するように舌を突  
き伸ばしながら、八千代は律義に、チ  
ラシのメニューを読み上げた。

「ふたつ、二人きりの特別室へ、あ  
なつ、ひいつつ……せん、えつ、んう  
つつ……くうつつ、はあつ、せ、千円に  
て、承つていますうつつ！」

追加課金により、他の目の届かない  
空間でツーショットになれる、完全に  
セクキャバと同じサービスだ。当然  
その先で行われることなど、男たちに  
は容易に想像がついた。

「なかなか手頃な値段じゃねえ？」  
「おいおい、マジでメイド喫茶なのか  
よ、それでさあ？」

「その特別室で、なにをするつもりなん  
だか……あーあ、やらしい」  
「ほら、聞かれてるわよ。教えてやつ

たらどうなの、エロメイドさん♪」

周囲の揶揄や促す声に煽られ、八千  
代の思考も蕩けだし、頭の中が桃色に  
染まっていく。意識は芽衣の指遣いへ  
集中し、繊細な動きと滑らかな肌の感  
触で菊肉を浅く穿られるたび、たまた  
ま腰を跳ねさせ、身悶えてしまう。

身体が、頭が、熱さにぼんやりと果  
けさせられ、煽る声にゾクゾクと背中  
がわなわなして止まらなかつた。完全  
にスィッチの入った身体は、周囲の目  
も明らかなほど愛液を滴らせ、太もも  
から下をベトベトに濡らし、淫らな水  
たまりを足元に広げていく。

「特別室での、サービスつ……諸々お  
……せ、千円、からあ……んあつ、で  
つ、チケツトお……は、販売、して、  
ますうつつ……んううつつ♥」

指先がどうとう、第二関節まで尻穴  
を穿ち、グリンツと大きく腸内を掻き  
回した。背筋を駆ける快感電流に背筋  
が跳ね上がり、腰が突きだされ、足先  
がたまたま伸びきり、ピクピクンツと  
全身が跳ね震えてしまう。

（んくつ、あああつつ、いやつ……こ  
んつ、なあつ……とこころ、でつ……イ  
ツ……クツツ、んううつつ！）

傍目にも明らかな反応で、八千代の  
身体は呆気なくアクメの震えを晒して  
しまっていた。表情は懸命に伏せて隠  
そうとしていたが、隣の芽衣がニヤニ  
ヤと笑いながら、あごを掴んで顔を上  
げさせ、みつともない蕩け顔を曝けだ  
させてくる。

そこに向けられる男性の欲情しきつ  
た眼差し、女性の侮蔑の視線に貫かれ  
ながら、八千代は気づくと、はしたな  
く腰を前後させてしまっていた。アク  
メに対する女性の反射として、身体が  
覚えこんでいる最低の反応——調教の  
証ともいえる態度を示しながら、ショ  
ーツから滴る愛液を周囲に撒き散らし  
それでもアクメに歪んだ表情を戻すこ  
とができない。

（いっつ……ぐつ、んあつ、あああ  
あ——つつ♥ や、めつ……芽衣つ、  
あああつ、芽衣いっ♥ そ、れつ……  
……んあつ、んううつつ、おし、りい  
……やめ、なさいい……）

もはやひと言葉でも発すれば、それは  
たちまち絶頂の叫びとなり、廊下中に  
響き渡ってしまう。衆人環視で行われ  
るセクハラを止めさせようと、八千代  
は必死で彼女に密着し、抱きつくよう  
に擦り寄りながら、濡れた瞳で懇願し  
ていた。

（お、お願いっ、芽衣つ……も、や、  
やめてえ……許し、てえ……）  
「はあああつ、八千代ちゃんつ……も  
う、しょうがないんだから♥」

そんな八千代の態度をしばし堪能し  
ていた芽衣は、やがてニコリと微笑む  
と八千代に口づけを返し、周囲の歓声  
の中で十数秒も舌を絡ませる。  
「んむううう……くちゅぐちゅつつつ、  
じゅるううつつ、んじゅつ、じゅばつ、  
じゅるおお……んちゅつ、ちゅばつ、じ  
ゅつばあ……ぐちゅぐちゅう……」



# ネトラレ 異世界転移

Netorare  
Another World  
Transition

身体を差し出す少女騎士

◆最終話◆ そして、彼女は選択した……

歪んだ愛情を持った少女たちの  
行きついた先は——？

うえだ  
小説 / 上田ながの  
NOVEL  
挿絵 / 弥弛  
ILLUSTRATION

★上田ながの先生の人気作『魔界王女 金眼のファルシア』の電子書籍版が無料でダウンロードできるぞ！  
詳細は表紙の裏ページにて。



歓喜の悲鳴としか言えない声を夏漂が漏らす。

(……これって)

何が起きている？

「気持ちいいですか？」

「い……いいっ♡ んんん！ こっれ

……ちんぽ……ズンズンされるの……

はああああ……気持ち……良すぎる♡

あんっあんっ……あんんんっ」

ジェイドの問いかけに対し、素直に

快感を認める言葉まで口にした。

何で？ どうして？

「射精しますよ。中に……」

「来て……だして♡ 沢山……射精……

……してえ！」

出すという言葉さえも素直に受け入れる。自分から射精を求める。あの夏漂が……。

それに答えるようにジェイドはズン

ツと腰を突き込むと共に、肢体をブル

ツと震わせて射精を開始した。夏漂の

膣奥に向かって精液を撃ち放つ。恋人

の。一番大事な人の膣中に……。

「はあああ！ 来てる！ で……て

る！ んんん！ 熱いの……膣中に！

イクツ！ あっあっあっ！ わ……た

し……イクツ！ こんなイクツく！

イクイク——イクちゃううう♡♡♡

あっあっ——はあああああっ!!」

瞬間、射精に合わせて夏漂も絶頂に

至った。普段は漂としていた表情を

これまで何度身体を重ねてもみせてく

れなかった程にだらしなく蕩かせなが

ら達する。

「ああああ……いつひ……いひい♡」

潤んだ瞳、上気した頬、半開きにな

った口——夏漂でもこんな表情ができ

るのかと思ってしまう程に、淫らな顔

だった。

「さあ、綺麗にしてください」

射精を終えたジェイドが満足そうな

顔でジュボツと夏漂からペニスを引き

抜く。夏漂の愛液に塗れた肉棒が露わ

になった。射精直後だというのに、大

きい。半勃ちなのに、明らかに奏多の

ものよりも……。

夏漂はぼっかりと開いた膣口から注

がれた精液を垂れ流しつつ、そんなジ

ェイドの肉棒の前にそうすることが当

然だとも言うように跪いたかと思う

と——

「んれつろ……ちゆれるお……ふつち

ゆ……んちゅうつ……ちゆつろ……れ

ろろお……。れろつれるつ……んつち

ゆれろお」

素直にペニスを舐め始めた。肉棒に

こびり付いている愛液や精液を躊躇な

く舌で搦め捕っていく。いや、ただ舐

めるだけではない。肉棒を咥えたかと

思うと、頬を窄めて吸引まで始めた。

ジュズルルツという下品な音色が室

内中に響き渡る。

こんなことあり得ない。嘘だ。絶対

に嘘だ……。

でも、現実を突き付けるように、夏

漂の奉仕によってジェイドのペニスは

再び勃起した。

そうした口淫に満足そうな表情を浮

かべつつ、ジェイドは講義室内に置か

れた椅子に腰を下ろした。

「さあ、来て」

短く夏漂に告げる。何をしろと具体

的には命じない。だが、ジェイドの求

めを夏漂は理解しているらしく、躊躇

うことなく座るジェイドに跨がるよう

な体勢を取ったかと思うと——

「あつ……んっあ！ あっあつ……は

ああああ」

肉先の位置を自らの手で調整し、腰

を落とした。いわゆる対面座位でジ

ェイドと繋がりが合う。それも肉先だけで

はない。根元までペニスをすべて、夏

漂は受け入れた。

「お……大きい。ちんぽ……深い……

はああああ」

幸せそうな、気持ち良さそうな表情

を浮かべて歓喜の吐息を夏漂は漏らす。

「私も気持ちがいいですよ。ですが、

もつとです。もつと夏漂で感じたい」

自分に跨がる夏漂を抱き締めながら

ジェイドが囁きかけた。するとそれに

答えるように夏漂は自分から腰を振り

始める。

プリプリとした尻を振り、ジェイド

に対して「あっあっあっ」という喘ぎ

声を響かせながらパンパンパンツと秘

部を打ち付けた。

いや、それだけでは終わらない。

「んんんっ！ ふちゅう！ はつちゅ

……んちゅろ……んちゅれろお♡

あつふ……はふうう」

夏漂は自分からジェイドの唇に自身

の唇を押しつけると、積極的に舌を挿

し込み、口内をかき混ぜ始めた。繋が

り合った唇と唇の間から唾液が零れ落

ちてしまうほど濃厚な口付けを……。

「なんだ……これ……なんだ？」

わけが分からなかった。夢だと思

たかった。だから何度も目を擦る。そ

うすればこの光景が消えるんじゃない

か——そんな願いを込めて。

けれど、消えない。悪夢のような光

景は続く。

「大きくなってる。わた……しの膣中

でジェイドのちんぽが……これ……い

い！ あああ……いいのお！ 気持ち

良すぎるう」

聞こえてくる喘ぎ声を遮断すること

もできない。

絶対にあつてはならない光景だった。

しかし、何故だろう？ どうしてだ

ろう？ 見たくない光景のはずなのに、

あつてはならないことのはずなのに、

身体が熱くなってしまう。自分とのセ

ックスでは見たこともないほど乱れて

いる夏漂の姿に、肉棒を屹立たせてし

まう自分がいた。

「なんで夏漂様があんなことをしてい

るのか……知りたいですか？」

そんな奏多にレイリアが囁きかけて

きた。

「どう……して？」

反射的に問い返す。

「簡単なことですよ。すべては奏多さ

ん……貴方の為です」

「僕の為？」





「あああ……出る！ もう！ こんな！」

「来て！」

レイリアが笑った。

「出して♥」

夏凜が求めた。

それに合わせるように――

「うあつ！ くああああ！」

どつびゆ！ ぶびゆるるるるう！

奏多は射精を開始する。

「はあああ……来た♥ 奏多さんの精液！ あつあつあつ！ 来たああ♥」

レイリアの表情が歓喜に歪んだ。

「あつひ！ 来てる！ 出てる！ イツク！ あああ……イクつ！ また……」

……腔中！ 腔中に熱いのが出されて……

イクつ！ イクイク――イクうう♥」

シンク口するように夏凜も絶頂に至る。

（ああ……夏凜……）

達している夏凜。自分以外の男の精液を受けて幸せそうな表情を浮かべている夏凜――そんな姿を絶望的な気分で見つめながら、奏多は最後の一滴までレイリアの蜜壺に精液を注ぎ込み続けた。

「奏多さん……良かったです」

レイリアが笑う。

「んっちゅ……ふちゅうっ」

笑いながら、奏多と繋がり合った状態のまま、キスをしてきた。

「じえい……ど……んっちゅ……ふちゅうっ」

夏凜もジェイドにキスをしている。

（もう……こんな……）  
悪夢のような状況――心が死んでいくのを感じた。

「夏凜様……貴方は私のものだ」

そんな奏多に更なる現実を突き付けるような言葉をジェイドが夏凜へと向ける。

もしこれに夏凜が頷いたら……。

だが――

「ちが……う……」

夏凜の口から出た言葉は拒絶だった。

更には――

「私は……お前のものじゃ……ない。全部は……全部は……奏多の為だ。私は……奏多の恋人なんだから……」

……ああ……夏凜……」

その言葉に胸が熱くなる。

絶望感が薄らいでいく気がした。

自然と眺からは涙が零れ落ちていく。

…………

そんな奏多を、レイリアがただただ冷たい目で見ていたが、その視線に気付けるような余裕なんてどこにもなかった。

「おかえり夏凜……」

「……たたいま」

夜――部屋に帰ってきた夏凜を奏多は笑顔で出迎えた。違う。ただ笑みを向けるだけじゃない。暗い顔をした夏凜を抱き締め「好きだよ」と変わらぬ自分の想いを告げた。

自分が愛しているのは夏凜だけ。もう、レイリアと顔を合わせたらだって、レイリアと顔を合わせたらだって、レイリアと顔を合わせたらだって、レイリアと顔を合わせたら……

「え？ あ……ああ、私も……奏多が……好きだよ……」

想いに夏凜も答えてくれる。それが嬉しい。

（夏凜は僕の為に頑張ってくれてるんだ。だから、何があっても僕は夏凜を嫌いになんかならない。僕はずっとずっと愛してる。夏凜を愛し続ける）

強く心の中にそう誓った。

同時に思う。

（元の世界に帰る時は絶対に二人一緒にだ！）

――と。

だから、それから凡そ一週間後――

「実は奏多……その……奏多を元の世界に帰すことができることになった。それだけの力を私は得ることができたんだ」

なんて言葉を自分へと向けて来た夏凜に対し、首を横に振った。

「僕は帰らないよ」

はつきりと言葉にもしてみせる。

「帰らない？ なんだ？ どうしてだ!? おばさん達のが心配じゃないのか!」

奏多の答えに対し、夏凜は狼狽したような様子を見せた。そんな恋人を抱き締める。

「確かに心配だよ。凄く心配……。でも、夏凜を置いてなんて行けない。だから残る。帰る時は二人一緒だよ」

う、レイリアと顔を合わせたらだって、レイリアと顔を合わせたら……

「え？ あ……ああ、私も……奏多が……好きだよ……」

想いに夏凜も答えてくれる。それが嬉しい。

（夏凜は僕の為に頑張ってくれてるんだ。だから、何があっても僕は夏凜を嫌いになんかならない。僕はずっとずっと愛してる。夏凜を愛し続ける）

強く心の中にそう誓った。

同時に思う。

（元の世界に帰る時は絶対に二人一緒にだ！）

――と。

だから、それから凡そ一週間後――

「実は奏多……その……奏多を元の世界に帰すことができることになった。それだけの力を私は得ることができたんだ」

なんて言葉を自分へと向けて来た夏凜に対し、首を横に振った。

「僕は帰らないよ」

はつきりと言葉にもしてみせる。

「帰らない？ なんだ？ どうしてだ!? おばさん達のが心配じゃないのか!」

奏多の答えに対し、夏凜は狼狽したような様子を見せた。そんな恋人を抱き締める。

「確かに心配だよ。凄く心配……。でも、夏凜を置いてなんて行けない。だから残る。帰る時は二人一緒だよ」

それが心の底からの思いだった。

（なんでだ？ どうしてだ？ 何故ここに残るなんて言うんだ。だったら……私のこれまでは何だったというんだ）

夏凜は恋人以外の男に抱かれてきた。それはすべて奏多の為だ。奏多を元の世界に戻す為にひたすら耐えてきたのだ。それなのに奏多は戻らないと言う。帰らないと言う。その答えはこれまでで夏凜の想いを否定しているかのようなものだった。

「彼は帰らないのですか？ 既に彼を選べるだけの力はあるはずですが」

講義室にてジェイドが言葉を向ける。

「……奏多は帰らないそうだ……」

そんな彼にただ一言だけ告げた。

その答えにジェイドは一瞬言葉に詰まった後、ゆつくり近づいてきたかと思うと、ギョッと夏凜の身体を抱き締めてきた。

「酷い男だ。夏凜の想いに何も気付いていない。夏凜は彼のことだけを考えずずっと耐えてきたというのに……。本当に酷い男だ」

抱き締めてくるだけじゃない。優しく頭まで撫でてくる。その感触がとても心地良かった。

「夏凜……」

いや、撫でてくるだけじゃない。名前を囁いてくると共に夏凜の頬に手を添えてきた。顔が上げられる。目と目が合った。そのまま――

「んっ」

「んっ」

「んっ」

「んっ」

「んっ」

「んっ」

気がつけばキスをしていた……。

——一ヶ月後。

「滅びよ魔王っ!!」

部下達を倒され、後がなくなったことよって自ら王都に出現した魔王に対し、異空騎士夏凛は聖剣を振り下ろした。ひたすら溜めに溜め続けて来た力を宿した刃を……。

だが、それでも力は足りなかった。一撃で魔王を滅することは、滅ぼすことはできなかった。

勝てない。倒せない——感じたものは絶望だった。

しかし、その絶望を振り払うかのように、夏凛の身体に強力な魔力が流れ込んで来た。ジェイドの魔力が……。

全身に漲る力。それは奏多からもらえるものよりも遙かに大きな力だった。その力よって夏凛は魔王を、世界を破壊するものを——滅ぼしたのである。

「本当にありがとうございます。改めて礼を……。本当にありがとうございます」

魔王消滅から数日後、城の広間にて盛大なパーティーが執り行われていた。その主役は夏凛だ。夏凛に対し、レイリアが頭を下げてくる。

「私はすべきことをしただけです」  
そのレイリアに静かに夏凛は答えた。  
(終わった。全部終わったんだ。これで……)

答えつつ改めて思う。ようやくすべてが終わったのだ——と。

そんなことを考えながら何となく会場を見回す。奏多の姿はない。今回のパーティーは貴族や有力商人達の為のものだからだ。夏凛と共に呼び出された存在とはいえ、この世界での奏多の立ち位置は従者でしかない。この会場に来る資格はなかった。そのことに少しだけ寂しさを感じる。

いや、それだけじゃない。同時にめでたい席とは思えない程の不快感も覚えた。

理由は単純だ。有力貴族や商人達の中には、当然のように以前自分を犯した男達もいたから……。彼らは二ヤつきながら舐め回すような視線を夏凛へと向けてくる。

(……くっ)  
それに対し夏凛にできることは、歯噛みしながら必死に無視することだけだった。

「……夏凛」  
声をかけられたのはそんな時のことである。

視線を向ける。  
そこにいたのは——ジェイドだった。彼は一度夏凛をねめつける男達に視線を向けたかと思うと、夏凛を庇うような位置に立った。お陰で最低で最悪な男達の視線から逃れることができた。

だが、代わりにジェイドの視線をより強く感じるようになってしまった。  
「……なに？」

魔王を倒して以来、ジェイドとは身体を重ねていない。いや、それだけで

はなく、言葉も交わしてはいなかった。もう、顔だつて合わせたくはない相手だったから……。だからジェイドの視線など感じたくはなかった。自然と彼に対して向ける言葉も凍てつくように冷たいものとなる。

「……私とは話もしたくないか。だが、私は夏凛と話がしたい。だからこの後、私の部屋に来て欲しい。お願いだ。駄目かな？」

それでもジェイドは怯むことなく告げてきた。

「私にはもう、お前と話す理由はない」  
「分かっている。それでも頼む。帰還の儀式についての話をしなければならぬいかな。だから、これが最後だ。必ず来てくれ」

真つ直ぐ自分を見つめて来る。  
自分を穢した男。奏多を裏切らせた男——だというのにどうしてだろう？  
その視線に、何故か胸が高鳴ってしまった。

「違う。違うっ！ 違うっ!! 私は……私には……」

奏多がいる。それなのに別な男にあって、あり得ない。自分は父を裏切った母とは違うのだ。  
(行かない。こんな男のところになんて……)

自分が強く言い聞かせる。  
だが——  
「ありがとう」

パーティーの後、気がつけば夏凛はジェイドの部屋へとやって来てしまっ

ていた。  
(なんで？ どうして私はここに？ いや、仕方がないことだ。だって……帰還のことについて聞かないといけないから……)

言い訳のように自分自身に言い聞かせる。ただ、その想いはどこか弱々しいものだった。

「本当によく来てくれたね」  
「……帰還について……必要なことだから」

ジェイドにも伝える。  
「いいや、違う。そうじゃありません。夏凛がここに来た本当の理由はそんなことじゃないですよ」

ベッドに腰を下ろしていたジェイドが立ち上がり、夏凛の目の前に立った。そのままそつと頬に手を添えてくる。

「そんな……こと……」  
否定しなければならぬ言葉だ。だが、何故か振り払えない。

「夏凛の身体が、心が……私を求めているんだ。だからここに来るしかなかった」

「っ！ ち、違う！ だから私は帰還の……」  
もちろん否定する。

「何も違わない。夏凛には私が必要なんだ。そして……私にも夏凛が必要だから……頼む。残ってくれ」  
真つ直ぐこちらへと視線を向けたまま、そんな言葉を口にしてくる。いつもの敬語ではない。その口調は、心の底からの想いだと夏凛に感じさせるよ

ここね  
例の『店』は…

ここ…ここ…？  
リラクゼーション店  
っていうけどこれ…

魔法少女

シャイニー・マナ

大気中の成分を魔力に変換して  
自分の力にできる魔法少女

マナの相棒  
ディー

様々な面でマナの  
サポートをする仲間

調査の潜入先は  
女性専用の風俗店!?

リラクゼーションサロン

淫魔

明らかにやらし…  
いいかがわしい  
お店じゃない…!

情報じゃこの『嬢』が  
立て続けに精気を吸われて  
昏睡しているって話よ

どうやらそれが…  
客を装った魔界の  
者の仕業っぽいの

いま明らかに  
「やらしい」って  
言おうとしたな



著者単行本も  
好評発売中!!

あちよっ…  
ディー!

新人さん  
募集中  
経験者優遇

私は  
裏から探りを入れて  
内情を調べるから…  
じゃね!

マナは店の『嬢』として  
中から探ってちょうだい

・料金システム

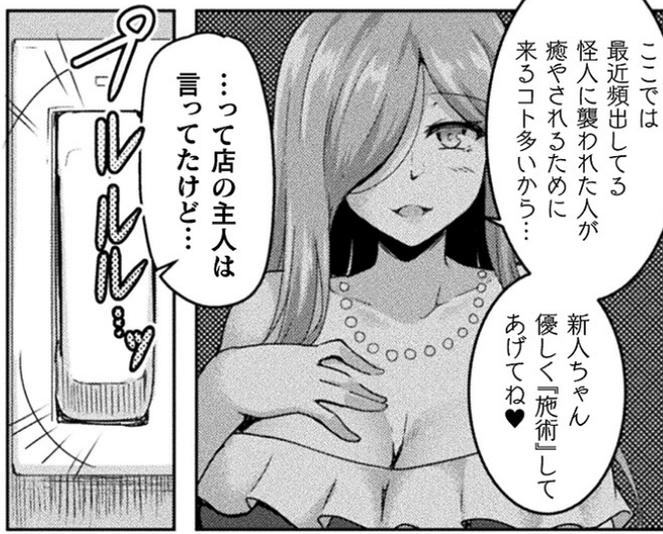
- 基本マッサージ  
30分 4000円  
60分 8000円
- 浴衣洗体  
30分 10000円  
90分 15000円
- 玉座コース  
(2名のセラピスト1名専用)  
60分 14000円  
90分 21000円

サービスタイム  
10:00~18:00  
60分  
6000円!  
おんまじり7円

魔法少女  
シャイニー・マナ  
~吸精の悦楽~

漫画 しーあーる  
COMIC

…うー…  
大丈夫かな…



…って店の主人は  
言ってたけど…

ここでは  
最近頻出してろ  
怪人に襲われた人が  
癒やされるために  
来るコト多いから…

新人ちゃん  
優しく『施術』して  
あげてね♡

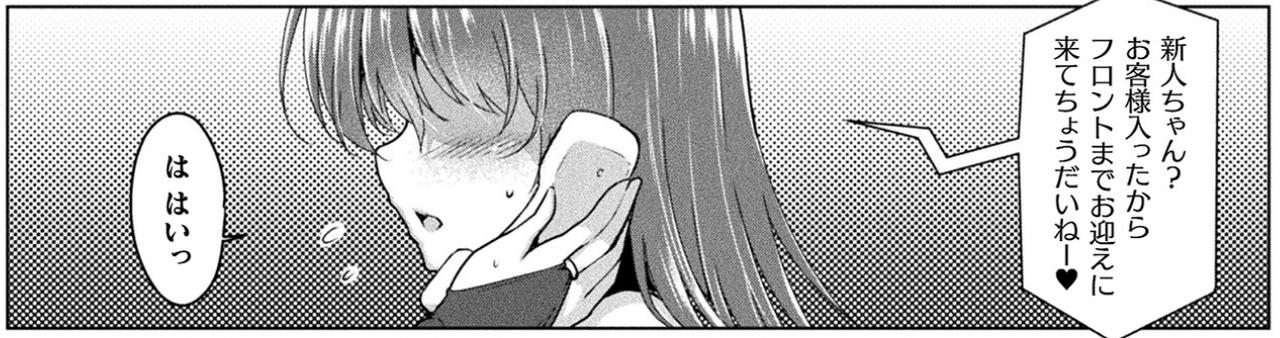


…なんかあつさり  
採用された…しかも  
即仕事なんて…

…にしても…部屋中  
ピンク色で…本当  
いかがわしいなあ…

なんかスースーする  
ドレス着させられるし

もじ  
もじ



はいっ

新人ちゃん？  
お客様入ったから  
フロントまでお迎えに  
来てちょうだいね♡



は…はい…よろしく  
お願いしますー

わっ…きれいな人…  
でも…すごく  
疲れてる…？



ではお部屋まで  
ご案内しますねー

今月の指名TOP5  
-----  
-----  
-----  
-----  
-----

ここのお客が怪人に犯された  
心の傷を癒やされに来てるって  
ことは本当なのかしら…？



よ…よろしく  
お願いします…

ふう…



あきまは  
マヤジ店

きょっ  
今日はどのあたりが  
お疲れでしょうか…？

そっ…ですね…



わ…私…  
化物に犯されてから…  
こんなカラダに  
なっちゃって…

お…おちんちん…!?



魔物に襲われたことで  
体に変異が起きたのかしら…  
…それとも…

そうですね…  
気持ち悪い…ですね？  
こんなカラダの私…

ひょっとして…  
この人が原因…!?

いえっ…

私の力で浄化すれば…  
なにか理解するかも…っ

変身!



魔法少女  
シャイニー・マナ!

えっ…  
アナタその  
姿は…??

大丈夫少し  
あなたの心身を癒やして  
あげるだけだから…

私が…私の力で  
治してあげますからね…

きゅん

浄化の魔力を込めて  
触れてあげれば…  
きっと…





おん...

んああ...舌...  
ヌルヌル気持ちいいとこに  
当たって...イイ...

あは...

おん...  
ヌ...  
ン...

ヌル...

んっ...きあひ  
いーれふ...か...?  
...よかった...♡



ん...

ヌル...



ぬるぬる...

...あれ...?

ん...

んあ...  
んじ...  
お...

...でも...おちんちん  
おいし...♡



...♡

んじ...  
ここが気持ちいい  
ですわえ...♡

あ...  
あ...



私...何でこんな  
興奮して...?

ん...

はあ...

あ...



ね…  
見せてえ…♡

あなたも…同じ  
『気配』がする…♡

はあ…っ  
…うひひ♡  
ねえ…

え…ちや…



ウッ…全然  
治まってる…



はあ…っ  
はあ…っ  
治りま…

やだ…私夢中に  
なっちゃった…?





★本作品の原作小説『新装版 聖天使ユミエル』の電子書籍版が無料でダウンロードできるぞ！詳細は表紙の裏ページにて。

ここに  
聖天使ユミエルの  
告別式を始める!!!

はひ…♡

あ…

# 聖天使ユミエル

カオティックワールド

第7話 敗北の聖天使

漫画  
COMIC

うし ふうい  
くろい ひろき  
白う〜風い  
黒井弘騎

原作  
ORIGINAL

お姉ちゃん達のお陰だよ

みんなの欲望を食べて随分力を使えるようになったわ

オメガ様♡

ツー

これが最後の晩餐だもの影魔王の力全部使って犯し殺してあげるから!!



ああ私あんなすごいので壊されちゃうんだ

い...いやもうこれ以上は許してえ

これを挿入れられちゃったらどうなってしまっただろう

ガッ

ギョ

ギョ

ああキチャキチャの？  
挿入れちゃこの？

私のえっちな  
穴にい

何で…お尻…お  
おおおおおっっ!!!

おっ!?…な

ふ

い

ビッ

ビッ

お

お

2/3 12

お

お

お

お

お



あつ…ぎい…  
ひっ…っ

あはっ♪  
死ぬって解ってたのに  
期待してたなんて  
スゴイねっ!

おつき…  
ふ太いのお!  
入らないっ!  
むりっ 無理よおっ

バカねえ

お姉ちゃんが  
無理でも裂けても  
私には全然  
関係ないよ!

裂けるッ  
お尻イ裂けちゃ  
うらううっ!!!

ママキネ  
ママキネ

ほひっ

ほ♡

ぐち

ぐぽ

ぎ

ひん

ひっ…



ひびきさすてい  
ななこ…!!

お尻  
ねじれ…っ

あははっ  
処刑続行っ!!

ひぎゃあああ!  
は入ってる…!どんどん  
掻き混ぜられちゃって  
るうろうろうう!!!

しぬ…  
死んじやう

おお♡

おお♡

このままじゃ…おし  
お尻で殺されちゃう  
っうっう!!!





もおらめ  
死んじゃう  
抜いて…

抜いてくたなめめめ  
ひいっ!!

ポッポッ

ポッ



ふふっ  
本当は感じて  
るんでしょ?

っ!?

あああああああ!  
お腹の中で  
気持ちイイのが  
暴れまわってるう!!!

ひよんな  
コ…

ぬいっ



フッフー!

気持ち良すぎて  
死んじゃいそう  
でしょう?!

ポッポッ

ポッポッ

フッフー

フッフー

ポッ

ポッ

ポッ

これが  
私の処刑

終末ノ快樂!!

濃くて熱いのが  
腸の中に射精て  
るうううう!!

すいっお腹の  
中で触手がビクビク  
跳ね回ってる

イヤあああああ!!!  
死にたくなひい  
死にたくなひのにいっ...

気持ちいいおー!  
♥♥♥





身体を持ち上げられて…っ

あっめめめめ…  
と刺れぬぬ…  
うんげんげん



お腹の中の精液押し上げられて…え!!

ごぶご…おお  
うぶうぶほほ  
ほほめ!!



綺麗♡  
とっこも

良いっわよお  
悠美いつ!

ぬほっ

二次元ドリームノベルズの大人気作  
『サンダークランプス!』がスピンオフ化!  
気高く妖艶な熟女ヒーローたちが乱れまくる!



★新居佑先生の人気作『紅の破壊  
天使スカレット』の電子書籍版  
が無料でダウンロードできるぞ!  
詳細は表紙の裏ページにて。

GRAN BLAZE  
サンダークランプス! オルタナティヴ  
あらいゆう 小説 新居佑  
挿絵 ILLUSTRATION えれ2エア回  
原作 ORIGINAL 羽沢向一

オフビート。

それは世界中にいる超人たちの総称。かつてソビエト連邦が存在した冷戦時代の初めに、テロリストがワシントンDCへ向けてはなった核ミサイルを、一人の男が生身で受けとめ、生身で宇宙まで運んで捨てた。

大勢の人々を救ったその男は、人間を超える肉体を持ち、自在に空を飛び、鮮やかな赤のコスチュームとケープをまとっていた。

男は集まった記者たちへ朗らかに笑って、僕は子供のころから「調子つばずれ」と呼ばれていたと語った。

最初に現れたスーパーオフビートに刺激されたのか、それまで知られていなかった超人たちが、次々と姿を見せた。

彼らは生まれつきの超能力者、改造人間、魔法使い、あるいは意志を持つロボット、伝説の妖怪や魔物、はては異星人に異次元人までいた。

人々は最初の超人にちなんで、彼らをオフビートと呼んだ。

そして今、世界では、超人的な力を、自らの欲望のために使おうとするヴィラン。

そしてそのヴィランの悪しき魔の手から、無垢なる人々を守るために、危険を顧みず、力を行使するスーパーヒーローたちの戦いが続いている。

現代、日本。東京。

真夏の昼下がり――。

朝のテレビの天気予報では、日中の気温は40度近くまで達し、日差しと熱中症に気を付けるよう、有名アナウンサーヒーローであるスノーウィングが、その名前通りの、涼しげな語りと声で、人々に注意喚起を行ったばかりだ。

東京・渋谷区代々木公園。

64年の東京オリンピック時の選手村だった、この公園は、都心中央部という立地のよさもあり、休日は様々なイベントを楽しむ人々で溢れている。しかし――。

とある日曜、12時20分。

公園の気温は、早朝にスノーウィングが発した通り、40度程度。

だが、今このとき、代々木公園にはいつもとは違う明らかな変化が起きていた。

「な、なんだこれはっ!? いつの間にかこんなに木だらけになったんだっ!?」「しかもで……でかいっつ! 高いっつ! ここは日本……しかも東京だろっ!? いったいいつからアマゾンになったんだよっ!?」

何も知らず公園に遊びに来た人々が、驚きの声をあげる。それもそのはずだ。

公園の一角は、文字通りの大密林へと変貌しており、高さ数メートルを誇る大樹がところせましと生い茂り、地面にはわずかな木漏れ日しか届かないほどにまで成長している。

それでいて足元からは、まだ新たな植物が続々と伸びてきており、緑の密度は本家アマゾンに勝るとも劣らない勢いだ。

しかしこの状況になったのは、つい30分ほど前のことだ。それまではいたって普通の、いつもの穏やかな公園だった。

それがわずか数十分の間……。

まるでVTRで木々の生育の早送りを見ているかのように、緑に覆われつくした、大植物園へと姿を一変させたのだ。

しかもその植物は、地上の人々が知るような、生易しいものではない。

「ひいっつ! なによこれっつ! ツタが身体に巻き付いてっ!? いやあああっつ!」

「こ、こいつら植物のくせに、地面を這ってやがるっつ! うおおつ、くるなああっつ!」

東京ドーム11個分の広さを誇る、東京のセントラルパーク。

その緑に覆われたあちらこちらで、人間の常識でははかりきれない、奇怪な植物たちに襲われた人々の悲鳴が響き渡る。

「くくくつ、やはり地上の土はよく育ちますねえ。しかもここ東京では、追加の栄養分にも困ることがない。いい立地。私の菜園にもってこいの、最高の場所ですねえ」

まるでそこだけ密林化を免れたかのように、いつもの姿を残している、公園

園の中央広場。

その時計台の上に立ち、悶え苦しむ人々を、にんまりとした満足げな表情で見下ろしている、一人の男がいた。

身長は180cmの白人。年のころは40歳程度。

体格はまるで鍛えられた軍人のようなゴリマッチョで、二重あごに、時代錯誤なカイゼル髭を生やしている。

服は、盛り上がった筋肉で今にも破れそうなタキシード。シルクハットを被ったその姿は、この灼熱の光景の中において、完全に異質そのものである。

男の名は、インフェルノ伯爵。

人間が住む地表の下……。時空を隔てた場所にある、炎熱魔界の住人だ。

すなわち、彼もまた異能をもつ者……オフビート。

そして己の力と歪んだ思想によって、人々を苦しめるヴィランである。

今年になって確認された新しいオフビートであり、彼の能力は人間電子レンジ。すなわち、分子を振動させ、熱を発生するというものだ。

適るること、三か月。

まだ梅雨に入る前の五月のこと。沖縄の太平洋近海に突如出現したインフェルノ伯爵によって、周囲の海面の温度が急上昇し、予想外の巨大台風が発生。

幸い、上海で開かれていた国際ゲームイベントに出席していた、関西の三人組スーパーヒーローチーム「フェアリーフォース」の乗った飛行機が、ち

ようど現場近くに居合わせたため、彼女たちの活躍によって、インフェルノ伯爵は一時撤退。

台風の進路は、事態を知り駆け付けた、ゴールデンルーキー・マイティナースによって、進路を東に逸らすことに成功。

大きな被害はなく、ひとまずその事件は幕を閉じた。

後日、フェアリーフォースのリーダー、サージフェアリーの事件レポートには、「ムキムキの男が、上半身裸で台風の中、シャウトしながら、踊り狂っていた」という、にわか信じがたい内容が書き記されていた。

そのとき、インフェルノ伯爵が彼女たちに告げた自らの能力が「灼熱限界」

天候に干渉し、災害級の被害をもたらすポテンシャル。

そしていくつもある魔界の一つ……炎熱魔界において、侯爵に次ぐ、伯爵の地位を与えられていることから、ヴイランの中でも上位の危険度にリストアップされている。

そんな彼の目的。それは……。

「くはは、いいですよおつ。いい暑さですつ！ この地面の環境に、私が厳選した、魔界の植物の種子をまき、そのうえで我が能力「ホットリミット」によって、土の中の温度をあげればあつ！ あくら不思議つ。見事に育った魔界の植物たちが、ひ弱な人間どもを捕獲、抹殺、大吸収つ！ 直に植物

たちの栄養につ！ そのまま死体となって、こられた植物たちの栄養につ！

男は時計台の上に立ち、バツと上半身裸になると、ゴリマツチョンな肉体を見せつけるように、意味不明なポーズをとりながら、踊り始めた。

「さあ、人間たちいっ！ さつさとその場につ倒れて、くたばってしまいなさいっ！ 今からここを私の菜園にするのですつ！ 高純度の娯楽を採取するためのねえつ！ そのために、あなた方には優秀な肥料となっていただきましよう！ レエツツ、ゴウトウ、ザ、養分ツツ！」

ゴオウツツ！  
インフェルノ伯爵の能力「ホットリミット」により、空気中の分子が激しく振動し、公園内の気温が跳ね上がっていく。

40……42……45……。  
気温が上がるにつれ、植物たちはさらに成長を加速させ、人々は逃げる間もなく捕らえられていく。

本場のアマゾンのように、ムワツとした蒸し暑さに包まれた代々木公園は、まるでそこだけ隔離された異空間のように、巨大な植物群に覆われていく。

「ひいひいっ！ いいやああああああつ！」  
植物なのに、自力で這って移動できる移動植物……見た目は巨大なハエトリグサが、中央広場から逃げ遅れた、うら若い少女の白い足首をツタで掴み、ズリズリと幹の方へと引き寄せる。

高さ三メートルはある魔界の食虫……いや食人植物は、長さ一メートルはある葉と葉の間を、人間の口のようにバチバチ上下させ、捕まえた少女を呑み込もうとする。

しかも葉の間からは、ジュワジュワという嫌な音をたてながら、ネバついた透明な粘液が染み出ししている。

「や、やめてっつ！ ああつ、お願いいよお……つ！」

「くははつ、偉大な魔界の伯爵。その菜園の養分になれるのですから、せいぜい誇りに思つて地獄へ行きなさい。ああ、でもあなたたちの魂は、私が全部いただくので、地獄にすらいけませんけどねえつ！ ふあつはつはつ、下等な人間にはお似合いですよつ！」

「そんな……だれか。だれか助けてええつつ！」  
広大なジャングルと化した広場に、少女の悲痛な声が響き渡る。

そんな声を無視して、食人植物がその葉の中に、少女の足を無慈悲に挟み込もうとした、その瞬間……。

「……そこまでだ、魔界のオフビートつ！」  
乾いた空気を切り裂いて、鋭く、そして毅然とした声が中央広場に響く。

「むうっ、なんだっ!？」  
響いた声に、インフェルノ伯爵は、視線を声の方へと向ける。

そこには、三人の見目麗しい女性たちが立っていた。

それぞれが皆、身長170cmを超

える、女性としては長身で、いかにも大人の女性という雰囲気を感じ出している。

ただ若いだけの娘にはない、年齢と経験を重ねた確かな自信が生み出す、艶やかな女の花香をまとった、極上の美人。

街を歩けば、十代の少女たちを差し置いて、男たちからの熱い視線を送られているだろう整った美貌。

三人とも、遠目からでもわかる、そのムツムツの肉感的ラインは、年齢を重ねても一切崩れることなく、ウエストや足首など、縮まる場所はキュッと引き締められている。

しかも三人ともバスト90を超える、爆乳と呼ぶに十二分な量感ある乳房の持ち主で、母性と女性的なフェティッシュさを備えた二つの果実は、まるで垂れていない。

ボディーツの上に、うつつらと浮かぶ乳首は、彼女たちの高潔さと自信の高さを示すように、ピンつと上を向いており、艶やかさと凛々しさが、絶妙なバランスで共存している。

爆乳と対をなす、ヒップもサイズ90に迫る量感を備えており、上半身だけでなく、下半身からも、妙齢な美人ならではの色っぽさがあふれ出ている。

少女には決して真似できない、大人の女のに許された張りた柔らかなさを兼ね備えた肉質は、たまらないほどに煽情的だ。

その肉感極まるグラマラスボディを

もつ、三人の女性たちは、それぞれがその女盛りな身体をピッチリと包むボディスーツを着ている。

美熟女のエロティックさを際立たせるコスチューム。

だがそれを飄爽と身にまとった彼女たちは、日本において知らぬ人のいない、スペシャルな人物であり、チームなのだ。

「ブラックフォルテ。まずは彼女の救出を……っ！」

「ふっ、悪いな。ブラスタークイーン……もう救出済みだよ」

ブラックフォルテ、そう呼ばれた黒髪の女性の手の中には、食人植物の栄養分にかけていた少女が、お姫様だっこの格好で抱かれていた。

「えっ、私いつの間に……っ!? あああつ。あなたたちは……っ!?」

少女は地面にそつと降ろされると、自分を助けてくれた女性たちを、驚きと嬉しさ……そして憧れが交錯した涙交じりの瞳で見つめる。

「どうやらケガもないみたいだね。あつ、膝擦りむいてるわね。ちよつと待ってなさい……。さあ、これでいいわよ」

「さすがブランマリア。ほら、キミは早く逃げるんだ。大丈夫。ここは私たちに任せろ！」

ブランマリア……。ブラックフォルテに、そう呼ばれた金髪の女性が、少女の傷口にそつと手をかざしただけで、その傷口が完全に治癒されてしまった。

「あ、ありがとうございますっつ！」

その……頑張ってくださいっつ！……ブラックフォルテ、ブランマリア、ブラスタークイーンッ！ チーム「偉大なる輝き」の皆さんっつ！」

そう感謝の言葉を告げた少女は、言われた通り公園の外へと走っていく。

「グランブレイス……っ!? ふく、そういうえば聞いたことがありますね。日本で活躍するスーパーヒーローチーム・グランブレイス……。そのあなたは、漆黒の悪魔狩り、ブラックフォルテっ！」

「ふっ、まさか魔族の根拠地である、魔界にまで名前が広まっているとは……」

インフェルノ伯爵に呼ばれた、三人の中で一番若く見える黒髪の女性が、その雰囲気通り、クールな口調で答える。

ブラックフォルテ、年齢は34歳。国籍はヨーロッパ某国。

本名は、エマ・アンドリーセク。母方は、元をたどれば小国の王族であり、同時に魔族ハンター一族として、その筋では有名だった。

そして父は、一般人でありながら、オブビートの素養を持つ人物だった。冷戦時代のオブビート出現を受け、魔族の暗躍もまた活性化。人々を恐怖に陥れていた。

幼いころ、そんな現状を憂いた彼女は、類まれなる二つの才能を生かすべく、子供のころから高名なスーパーヒーローに弟子入りし、数年後、ブラックフォルテとして、世界屈指のデモン

ハンターへと成長していく。

縁あって日本に住むことになった彼女は、対魔族のスペシャリストなのだ。

「そしてブランマリア。たしかあなたは、別の時空からきた異世界人とかお互い、異界のもの同士、仲良くしたいものですがねえ？」

「あら、それは光栄ね。けれど私はこの地上が気に入っています。あなたみたいに、我がままな考えは嫌いなもの」

少女の傷を治した金髪、そして特徴的なアイマスクをした女性が、クールではあるが、ブラックフォルテとは趣が違ふ、ややアンニュイな……より大人の余裕と色香を醸した口調で言う。

紫と白を基調とした、どこか特徴的なデザインの入ったボディスーツを着た女性。

ブランマリア、36歳。国籍は日本。本名はアマリア・西園寺。

異世界「マリグリッド」を統べる女王であった彼女は、同時に稀代の天才発明家でもあった。

十年ほど前、マリグリッドから、オブビートたちが放つ巨大なエネルギーを観測した彼女は、その好奇心を刺激され、一人、地球に時空転移してやってくる。

地球での生活は、彼女の知的好奇心を満足させるに十二分であり、そこで知り合った日本人男性と結婚。

今はマリグリッドの女王の座を妹に譲り、日本人として、夫と二人、仲睦まじく暮らしている。

すべてを見透かしているかのよう大人びた雰囲気、そしてグラマーな女性に、やや取つきにくそうな雰囲気があるが、実は世話焼きな一面を持つ。地球に来たばかりのときに、ブラックフォルテと知り合い、意気投合。

彼女のサイドキックを長年務め、異界の女王でありながら、その知識と閃きに裏打ちされた実力は、スーパーヒーローとして認められている。

最後に、ブラスタークイーン。ふく、実のところ、あなたが一番謎にしている。最近、突然表舞台に現れ、その力は一級品。人気、実力ともに熟女ヒーローの代表格。その年で急にオブビート能力に目覚めたのか、あるいは……。くくく、興味深いですねえ？」

「大人の女に秘密はつきものよ。それを下世話な心で暴こうだなんて、伯爵の名が泣くわね」

ブラスタークイーンと呼ばれた亜麻色の髪の女性は、伯爵の言葉を、熟した女性の余裕たっぷりの口調で受け流す。

彼女は三人の中で一番の年長者だが、年齢を重ねているというのは彼女にとつて、むしろ誉め言葉である。

熟れきつた魅惑的な体つき。そして三人の中で最も落ち着き払った雰囲気は、まさにクイーンの名に恥じないスーパーヒーローとして貫禄を醸し出している。

年齢は39歳。





同時に、エロティックな魅力を見るものに与える。

そこから伸びるムチムチの太い生足が、ダイナミックに蹴りだされ、拳を突き出すたびに、スーツに隠れた爆乳がブルブルんと揺れる。

伯爵がその分子振動能力で放つ殺人光線も、強靱な身体を持つブラスタークイーンの前では、水鉄砲も同然にはじき返される。

「このまま一気に押しきるわっっ！ふううっっ！ いやあああわっっっ！」

魔界の中でも上位レベルの伯爵を逃げに徹させる、麗しの熟女ヒーロー。

地上では、ブラックフォルテとブランマリアによって、すでに、広場の危険植物たちは、駆除されてしまっていた。

「くうっ、グランブレイズっ。まさかここまでとは……っっ！ だが私は炎熱魔界の伯爵っ！ あなたたちごとき地上の劣等種に、負けるわけがないっっっ！」

空中で逃げ回るのがやっとのカイゼル髭の伯爵が、下に急降下すると、奥の手といわんばかりに、その両手を地面につけ、自身の能力を全開にする。

ゴゴゴゴゴゴツツツッ！

「な、なんだっっっ！？」

「この音……この振動……っっ！？ まずいわ、二人とも気を付けなさいっっ！」

「インフェルノ伯爵……っ。なにをす

る気……っっ！？ きゃあああわっっっっ！」

三人が事態を把握する前に、その脅威は美熟女ヒーローチームを、想定外の危機へと陥れていた。

ドグオオオオオツツツッ！ ジュルルルウウウツツツッ！

突然、地面を割って現れたのは、体高二メートルを誇る、超巨大食人植物だった。

まるで地上のウツボカズラのような魔界植物は、身体から伸びる何百というツタを使って、グランブレイズに襲い来る。

「うっっ、くうううっっ！ し……しまったっっっ！」

「あふうっ、身体が……動かない……っっ！」

ブラスタークイーンとブランマリアが、それまでの威勢のよさとは真逆の、悔しさのこもった、それでいてどこか甘く悩ましい媚声を漏らす。

彼女たちは、いきなり現れた魔界植物の攻撃の前に、その熟れた淫猥ボディを、両手両足ともにきつく縛りあげられてしまったのだ。

「くははははっっっ！ これぞ私の最高傑作であり、本命植物っっ！ くくくっ、自慢の馬鹿力も、得意の発明とやらも発揮できないでしょう？ ブラスタークイーン、ブランマリアっ！」

緑色のネバつくツタに拘束された二人のスーパーヒーローの前に、カイゼル髭を撫でながら立つインフェルノ伯

爵。

「んんっっ、くふううっっ！ こ、これは媚薬……っ！？ 身体が……くうっ、あ……熱いいいいっ！ ブラスタークイーン、気を付け……はひいいんっっ！」

「あっ、ううっ。ひ、ふううっ！ わ、私はいじょう……おおうっ！ んひっっ、ああっっ！ くおっっ、おおうっっ！」

つい数分前までの凛々しい声から一変、金と亜麻色の髪の熟女戦士は、まるで発情しきった獣のような声を、必死になつて押し殺そうとしている。

二人の身体からジワツとした大粒の汗が湧いて出る。

この公園の暑さのせいとは違う、たしかに牝の発情臭をのせた、淫らな水玉だ。

「くふふ、私の目的は、こいつで媚薬を大量に作り、魔界での勢力争いに利用すること。本来は人間たちを養分にじっくり育てる予定でしたが、極度の熱を与え、無理やり発芽、成長させたのですよ。どうやらその様子だと、人氣のスーパーヒーローにも効き目は抜群のようですね。はははははっ、形勢逆転というわけだ、この牝豚どもめっっ！」

「バチインツツッ！ バチバチイイツツ！」

男が植物に命じ、そのツタで二人のお尻を思いきり叩く。  
「ひあああああわっっっ！ くおうう

うっっ！ んあわっっ……くっっ、ひ、ぎいいいいっっっ！」

「おひいいいっっっ！ あっっ、くあうっっ！ ふくく、ふくくっっ！ おおうっ、く、うううっっ！」

痛みへの悲鳴ではなく、二人の口から漏れ出たのは、明確な快感にヨがる牝の声だった。

声と同時に、叩かれたお尻がブルブルと淫靡に震え、二人の背筋をゾクゾクっという、ヒーローとしてあるまじき、官能の電流が駆け巡る。

（こ、これは確かに強力な媚薬だわ……っ。痛みが直接、快楽神経に響いてくるなんてっ！ 性欲も無理やり強化され……っ。この私が……っ。くうっ、あな……たあっっ！）

（だ、だめよっっ！ こんな快感……っ。思い出しちゃ……あっ。ま、誠っ。郁郎くんっ！ 私はもう二度と快楽になんて負けない……っ。あっ、ふひいっっ！ お尻いいっ、アナルに響くっっ！ はあはあっ、欲情、させられちゃうううっっ！）

「ギチギチっっ！ ジュルジュルウウツツ！」

「はっっ、ふひっっ！ おほおっっ！ あ、あわっっっ！ ふっ、ひいいんっっ！」

「おおうっっ！ あふっっ、おほおっっ！ はっ、あはっ……くひっ、ふおおおおうっっ！」  
ブランマリア、そしてブラスターク

イーンともに夫の愛の営みを経験している……女が牝になる快感を知っている者同士だ。

悪に決して屈しない女スーパーヒーローを苦しめる、強力無比な魔界の娼薬の前に、強制的に開かされかけている、牝の欲望に、そのムチムチな熟ボディが、ワナワナ、ビクビクと淫らに震える。

「はあはあっつ。くうっ、インフェルノ伯爵、フォルテは……。んはあっつ。ブラックフォルテは……。どうしたのっつ!? 彼女はいつたどこにっつ!? あおううっつ!」

「ああ、あの生意気そうな女ですか。くくつ、お前たちのお仲間なら、ほら? あの中ですよ、くははははっつ!」

ブラスタークイーンの問いに答えた伯爵の視線の先には、なんと巨大な食人植物に丸呑みにされたブラックフォルテの膝から下だけが、苦しそうにビクビクと震えている光景があった。  
「……っつっつ! むぐっつ……っつ。……っつ……っつ!」

植物に頭から呑まれたブラックフォルテの声は、外にはほとんど聞こえない。だが、彼女が絶望的な状況で苦しんでいることだけは、はっきりとわかる。

そんな衝撃的な姿に、余裕の表情を崩さなかったブランマリアが、激しく怒りに打ち震える。

「そ、そんなブラックフォルテっ! くつ、許さないわよ、インフェルノ伯

爵っ! 私の仲間を解放しなさいっ! 今すぐにっつ!」

「そいつは無理な相談ですなあ、女王様。あの女は、今からすぐに溶かして、養分とするのです。安心なさい。あの中は、より濃密な娼薬がたっぷりです。溶けながらもイケること、請け合いですよ、ふはははははっつ!」

「そ、そんな……っ! ブラックフォルテっつ! くうっ、今すぐ助けに……っつ! あおううっつ! む、胸をこいつら……っつ! ひぎっつ、お、おつばいが……おおうっ、気持ち、イッ! ……だめっ、このままじゃ……っ。ああっつ、くふううううっつ!」

「ま、股の間をズリズリとおおっつ! ひいつ、うひいひいっつ! オ、オマンコがスーツの上から擦られて……っつ! おおっつ、ごめんなさい、ブラックフォルテ……おほおううっつ!」

触手に乳房をギチュリと締め付けられたブラスタークイーンは、より切なげに眉をひそめ、まるでなにかを必死に我慢しているかのように、唇を噛みしめて、首をフルフルと左右に揺らす。ネチネチとしたいやらしい動きで、触手に素股をされているブランマリアは、突き出した尻尻を、屈辱の中、カクカクと上下に淫らに揺らしてしまっている。

二人の顔は、ヒーローとして悪に立ち向かわなくてはいけない、仲間を助けなければいけないという、強い使命感とともに、牝としての肉欲に抗いき

れない、快楽を知った熟れた女の性の浅ましさを、憎き敵に見せつけてしまおう。

「お、おつばいが、い……今にも噴き出しそうよ……おつ! 仲間がピンチなのに……っ、んほううっつ! 触手の締め付けが……き、気持ち良すぎるわっつ! 身体に力が入らないのほおうっ!」

「ああ、こんなに焦らされるの初めてよ……おつ。娼薬がどんなん身体に染み込んで……っ。し、しっかりなさいブランマリアっ! 私は女王だった女なのよっ! 仲間を見殺しになんて……あはあっつ! お、お尻の穴まで擦るなんてええっ! ふおおおっつ! ブラックフォルテ、ごめんなさい……いっつ!」

日本屈指の人気と実力を誇る、マダムヒーローチーム、グランブレイズは、今まさに敗北のときを迎えようとしていた。

「う、くううっつ! はあはあ……んぶうううっつ!」

インフェルノ伯爵が目覚めさせた巨大魔界植物に囚われてから、数分後。ブラスタークイーンとブランマリアが、強力な娼薬に悩まされ、牝の快楽本能に必死で対抗していたところ……。

ブラックフォルテは、その魅力的な熟女体を、まるで女性の性器にも似た狭い肉の通路に左右から押さえつけられていた。

両手は高く頭の上で拘束され、凛々しい唼声を切っていた口には、太く粘ついた触手が、無理やり捻じ込まれている。

「くつ、不覚をとった……っつ! ブラスタークイーンとブラスタークイーンは無事……に決まっているっつ! 私も早くここから……っ。うくつ、くそっつ……こいつ、らああっつ!」

人外の魔族を相手にするという経験は豊富なブラックフォルテ。

しかし、身体ごと丸呑みにされたのは初めてだ。

しかも相手は低能極まりない魔界植物。

その触手によつて、動きを封じられ、仲間を助けにいけない……。

もしかしたら自分が足手まといになっているかもしれない現状に、スーパーヒーローとしての、高いプライドが痛む。

「くふうっ! 身体が熱い……っつ! これは……っ。まさか娼薬……っ! こんなにも強烈な……んくううっつ、ものだったとは……ああっつ!」

ブラックフォルテは、きつく拘束されながら、身体中をめつたやたらに駆け巡る、快感のパルスに、全身を火照らせ、女芯を疼かせていた。

どうにか膝から下は、まだ呑まれてはいないようだが、その圧倒的ボリュームを誇る二つの爆乳は、スーツから漏れ出ており、まるで団子でもこねるかのように、触手たちがムニムニと付

け根から探みしだいでいた。

そこから生じる感覚は、ブラックフオルテがかつて味わったことのない、初めてと違っていい女の快感だった。「むぐつつ、んじゅぶつつ！ んぼつつ！ おぶつつ！ ふうつつ、ふうつつ！ んっ、ぶううつつ！」

（き、気持ち……いい、だと……っ！？）口をジユコジユコ弄られるのが……っ。胸を採まれるのが……っ！ こんな下等な触手などに……っ。そんな馬鹿なことが……っ。んふううつつ！

触手が舌の上つ面を擦り、ニユブニユブと唇の中から出たり入ったりするたびに、ブラックフオルテのクールな思考に、甘く蕩けるような快感を突きつける。

露わになったバスト90を超える牝乳は、∞を描くように、根元からきつく締め付けられている。

同時に、ヌメついた媚薬粘液をまとった触手たちが、柔らかいマッサージでもするように、グニグニと女の脂肪を採みしだく。

そこから生じる電気信号は、冷静沈着な熟女ハンターの頬を赤く染め、股間にジワリとした熱い感覚を覚えこませる。

（媚薬……女を性の快感に狂わせ、牝に堕とす最低最悪な代物……っ！ そんな、私は今、感じているのか!? く、ふううつつ！ これが……女の快感……などと……おっ！）

すでに既婚者であるブラスタークイ

ーンとブランマリアと違い、ブラックフオルテは30を超えても独身を通して

いる。小国であろうとも、たしかな王家の血筋であり、人々を悪から守るデモンハンターであった自らの家系。

それを心から尊敬してきた彼女は、自らの幸せや欲求よりも、その身に刻まれた使命を優先する生き方をしていた。

その類まれなる美貌と、自信に満ち溢れた麗しい姿は、過去、何度も男に求婚されたが、目の前の悪を倒し、人々の平和を守りたいという想いのため、すべて丁重に断ってきた。

最愛の伴侶、そして娘とその恋人に囲まれ、幸せそうな笑みを浮かべる二人のチームメイトを祝福しても、いつか自分も……という想いには、まるで至らなかつた。

それほどまでに、ブラックフオルテは、誰かのために尽くしたい、という想いが強いスーパーヒーローなのだ。だがそれゆえに、その熟れた身体は、まともな快楽……オナニーすら知ることもなく、清純な処女のまま、<sup>年齢</sup>30を超え、さらに熟した牝の身体に成長してしまっていた。

そんな乙女の美熟女が、生まれて初めて味わう快感……それが、敗北の危機に瀕しながらの、強烈な媚薬触手快感なのだ。

ジュルツツ、ジュリイイツツ！ ニュルニュル……ウウツツ。

「むぐううつつ！ おぐつつ！ んお おおつつ!! ふじゆるつつ……おぶつつ、んぶつつ、ふうううつつ！」

まるで動物の体内に閉じ込められたかのような悪臭と蒸し暑さの中、漆黑のデモンハンターと恐れられた女ヒーローが、鼻息を徐々に強く、淫らかなものにさせ、そのムツチリとした太ももを、股間の前でグチグチと小刻みに前後させる。

（か、身体中が……内側から熱いっつつ！ まるで全身の血が沸騰しているみたいだっ！ なのに……胸が……乳首が……っ！ はああんっ！ なんだこの感覚は……っ!? 甘くて、熱くてえっ!? くふうつつ……しっかりしろ、ブラックフオルテっ！ こんな感覚に感わされる……なっつつ！ 私は誇り高きグランブレイズの一員なんだぞ……んふううつつ！ はっ、あはっつつ！ くふ、おおおっ！）

触手が口に入っていないければ、どんな声を出しているかわからない。頭が徐々に朦朧としはじめ、触手に愛撫されているスイカのような胸と、親指大の乳首に意識が向きっぱなしになっってしまう。

これまで保ってきたヒーローとしての、清廉で強固な誇りすら消し飛ばすほどの、強い快感への誘惑波動。その影響は股間の奥……いまだに処女膜のついたままの、穢れなき陰部で、さらに激しく強くなっっていく。

（ア、アソコが猛烈に疼く……うっ！

まるでマグマが煮えだぎっているようだ……っ！ さ、触ってほしい……っ。ああ、触り、たい……っ。なっ、私は何を考えているんだっ!? 戦いの最中に、そんな破廉恥なことを……くうつつ、媚薬がきつ……すぎるううつつ！）

性の経験が豊富な二人の仲間とは違い、ブラックフオルテは、初めて性感を刺激されているのだ。

どうすればこの強い疼きを逃がせるか……。この先、これ以上、牝の快感がどうなってしまうのか……。知識では知っていても、実際の感覚は未知数だ。

ちょっとでも気を抜けば、媚薬で暴走しかかっている、三十年分の牝の肉欲が、スーパーヒーローとして鍛えてきた、保ってきた自身のプライドを、どう貶めるか想像もつかない。「ふぐつつ、んふうううつつっ！」

（ち、乳首を擦りたい……っ！ し、刺激がほしい……っ！ くうつつ、ま、負けるなっ！ 耐えろ……おおつつ！ 快楽などに、スーパーヒーローは絶対に屈したりしないっつつ！ あくつつ、おおううつつ！）

口の中の触手を食い切らんばかりの勢いで、唇をきつく噛みしめる。しかし、ここは媚薬を生み出す魔界植物のただ中だ。まるで頭からバケツでぶっつかけられたかのように媚薬は、全身に染み込んでいく。

肉道が押しつぶすような刺激すら、刺すような快感となって、脳内の理性

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**